
光ある国

深縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光ある国

【Nコード】

N92880

【作者名】

深縁

【あらすじ】

恋に夢見る主人公 由岐は16歳になったばかり。ある日突然異世界に飛ばされ、魔法息づくリカルドに降り立つ。そこは接触によって力を増幅・貯蓄して魔法を使うものたちが生きている世界だった。そこで由岐は運命の出会いをする

はず？

R-15は保険です。

本編は完結しております。現在、その後の話を展開中です。

プロローグ（前書き）

初投稿になります。こういつのって、ドキドキしますね。

プロローグ

世界を支えていたと云われるひとつの国が、ある日突然、水の中に沈んだ。

その国はいつも光と共にあり、国民たちの顔から笑顔が絶えることがなかったと云われる。

その国は代々女王が国を治めており、争い無き国だった。

その国ではいつもさまざまな花が咲き誇り、いつもさわやかな風が吹く。

しかし、世界を支えていたと云われる国は忽然と水の中に消えた。

その国があつた場所は大きな湖となり、ただ風がその湖面を波立たせる。

人々は消えた国を未だ忘れない。

しかし人々の口からその国の名が紡ぎだされることはない。

プロローグ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第1話 彼女は景色をただ眺める

青い空。

流れていく雲。

鬱蒼と生えている名も知らぬ草花。

見慣れたものはずなのに、同じではない。

ドスンと大地を踏みしめるように鎮座している岩に軽く寄りかかって、彼女はただ景色を眺めていた。

「いい天気…」

ポツリと口からこぼれおちる言葉。

どこからともなく吹く風に、彼女の綺麗な長いこげ茶色の髪がたなびいた。

髪の毛と同じで、それよりもっと深みのある瞳はずっと彼方を見つめていた。

彼女は数刻前のことを思い出していた。

満開だった桜が葉桜へと代わり、年度替りの慌ただしさがようやく
落ち着きを見せ始めていた。

東京のとある一角のマンションの一室。

二人の人物が話をしていた。

「由岐…あなたの運命の相手はファーストキスの相手なのよ」

10人中ほぼ10人が美人だと認める美女がお茶を飲みながら優雅
に笑っている。

そんな美女の向かいには、美女に面影の似た少女がいた。

美女の名前を四季川離亜、少女の名前を四季川由岐という。

二人は親子だった。

短縮授業でいつもより早く帰宅した由岐は、専業主婦の離亜と二人
で昼食を食べ、食後のお茶をしていたところだった。

最初はたわいもない話をしていた。

入学したばかりの高校生活の話やら友達の話など。

（ああ…そうか。友達に彼氏が出来たって話をしていたんだ）

離亜の唐突な言葉の意味が上手く頭の中で回らずに、由岐は話の内
容を思い出そうとした。

（で、私も彼氏が欲しいっていう話に…なったんだっけ？）

思考の迷路の中に入ってしまったわが子を楽しそうに見ながらも、

離亜は口を挟まない。

お茶を飲もうとしてコップの中が空なのに気づいて席を立つ。
しかし由岐は考えに没頭して気づいてないようだった。

「ええっ！」

やっと言葉の意味を呑み込んで声を上げる。

「やっとご帰還」

自分の分と一緒に入れなおしたお茶を由岐の前に置いて離亜は椅子に座った。

机から器を持ち上げて口に運び、動揺を流し込みながら由岐は視線を離亜に向けた。

「運命の人って」

温かいお茶にほっとしつつ、口を開く。

そんな由岐の前で離亜はゆったりと背もたれに身体を預けた。

「そ、由岐の好きな運命っていう名のついた男の人」

「わ、私の好きになって」

「あら、間違っていたかしら」

優しくない笑みで離亜は由岐を見た。途端に由岐は口をつぐむ。

「ファーストキスってな、なんで」

「まだでしょ」

部屋の中がなんともいえない静寂に包まれる。

視線が下に落ちていくのを止められず、ついつい机の模様をじっと見つめる。

きっと今は耳が赤くなっていることだろう。

「由岐が16歳になったから教えてあげるのよ。覚えておいてね」

茶化すように離亜は喋る。

しかし、言葉にかすかに真剣な声音が混じっているような気がして、机の模様から視線をはがし離亜を見る。

「お母…さん？」

先程までの人の悪い笑みが消え、ただまっすぐに自分を見つめる離亜に、らしくなく身体が固まる。

「わが一族…いいえ、わたしの実家のほうで代々言い伝えられているの。男の子の場合は関係ないのだけど、女の子が生まれたときだけこれは現実になる」

身体の前で手を組み、由岐の奥底まで刻み込みようにゆっくりと離亜は喋る。

茶化すことを許さない雰囲気流れる。

「ッ
」

離亜の瞳に捕らわれて、由岐は何も言えなかった。そんな沈黙を破ったのは2人ではなかった。

「ただいま」

ガチャリ

ダイニングに続くドアを開けて少年が大きなスポーツバックを背負って入ってきた。

「あ…昂貴」

ハッと息が漏れる。いつの間にか息をつめていたらしい。

「おかえりなさい」

先程までのあれはなんだったのかというほどに、離亜は元通りだった。

「母さん、由岐、ただいま」

昂貴と呼ばれた少年は、背負っていたスポーツバックを降ろす。ドスツと重い音がたつ。

「昂ちゃん、お昼ご飯は？」

「いる。食わずに帰ってきた」

「じゃあ、すぐ用意するわね」

キッチンに入っていく離亜を目線で追いかける。視線を感じて、由岐は視線を感じたほうを見た。

「昂貴？」

「どうしたんだよ、由岐？」

「ッ… お姉ちゃんって呼びなさいよ」

訝しげな昂貴の視線に我にかえり、咄嗟にいつもの注意が口をついて出た。

「由岐は“由岐”で十分だ」

ニツと笑って、昂貴は手を洗うべくダイニングを出て行った。その後姿を見送る。

「もうっ」

頬を膨らませて、困ったように眉間に皺を寄せた娘に、離亜はキツチンで笑みを零していた。

「覚えておくのよ、由岐」

あなたはもうすぐ運命の出会いをする…

「何か言った？」

「何も」

息子のために昼ごはんの準備をしながら、離亜は背中に由岐の視線を感じていた。

その視線を感じながらも振り向くことはしない。

そして時間は緩やかに、しかし確実に進む。

「これが運命の出会いの一步ってわけ？」

青い空。

流れていく雲。

鬱蒼と生えている名も知らぬ草花。

見渡せど、建物の一つも見えない。

しかし天気は抜群で、今の現状に鬱屈をためることも出来ない自分に首をかしげる。

由岐は岩に背を預けて、ただ景色を眺めるだけだった。

「運命の出会いがここであるのなら、文句ない…かも？」

彼女の名前は四季川由岐。

腰まであるこげ茶の髪とその髪の毛よりも深い色目の瞳がチャームポイントだった。

先日16歳の誕生日を迎え、これから訪れるはずの運命の恋を夢見る少女だった。

第1話 彼女は景色をただ眺める（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第2話 その少年、追われる者なれど

ドオォーン…

バキバキバキッ

大きな破壊音と共に木の倒れる音を背に、11〜12歳くらいの顔立ちのとても整った少年が鬱蒼たる木々の中を走っていた。

その少年の後ろには、190センチ程の身長のがつしりとした体躯を持った青年と、その横を走っているせいで小さく見えるが、170センチ以上はあるだろうしなやかな体躯と釣り目気味な目が印象的な女がつかず離れずの距離を保って、走っていた。

3人は言葉もなく走り、十分な距離を稼いで足を止めた。

「何でこんなことに」

少々荒い息を整えながら、木々の陰に隠れて少年は悪態をつく。

「フエイ様のせいですよ」

「主のせいでしょ」

声をそろえて低い声と高い声が側から応える。
それに顔をしかめながらため息をついた。

「はいはい、どうせオレのせいだよ」

フェイと呼ばれた少年には分が悪かったのか、全面的に自分の非を認める。

「分かっているならいいです」

「リー…」

「ローだって責めたくせに、今さら私に非難の目を向けないでよ」

胸の前で腕を組んで偉そうに頷くつり目な女　リーに、がたいの良
い青年　ローは言いすぎだといわんばかりに困った顔をして口を開く。

しかしリーの言い分のほうが正しくて、開いた口を閉じた。

「ロー」

「…はい」

「構わない。オレがこんな時期なのに出てきたのが悪いんだ」

大きな身体を縮こませるローにフェイは目じりを和らげて言った。

「フェイ様…」

「主はローに甘い」

「オレは平等のつもりだが？」

「むう」

リーの釣り目ぎみの目がもつと鋭くなる。

「それより今の状況を嘆いたり怒ったりしている暇があったら、どうにかしないとやばいと思うが？」

フェイは冷静に今の状況についていったん和らげた目じりを引き締

めて2人の従者に言う。

言われた二人は瞬時に気持ちを切り替えたのか、表情を一変させた。

「オレは魔力が底に近くなってきたいるんだが」

フエイは今の自分の現状を伝える。

「俺はもう少し大丈夫だと思います」

「私は主と同じです」

2人も自分の魔力の残量について冷静に分析する。

「迂闊だったな。あいつらに会う前に大きな事故にあったのがひびいてる」

悔しそうなフエイを見て、ローとリーは顔を合わせる。

「主」

「先程の事故ですが、奴らの仕業ではないでしょうか？」

2人は追っ手がかかる前に遭遇した事故に人為的なものを感じていた。

何より、タイミングがよすぎる。

「なんだと」

フエイの目が鋭くなる。

それによって、周囲の温度が下がったように感じた。

「私たちの魔力を事前に減らしておこうとことを起こしたのではと」

「何より、魔力を回復するために移動していると奴らは現れています」

言葉を紡ぐたびに周囲の温度が下がっていくのを2人はひしひしと感じていた。

気を強く持つていなければ、身体が震えてしまいそうだった。それほどまでに自分たちの主人の怒気は強いものだったのだ。

「オレを消すためだけに数十人もの人を恐怖に追いやったのか…」

主人の目が怒りに満ちているのを見て、2人は口をつぐんだ。

しかし、2人に見れば、数十の人の命より主人の命のほうが尊いと思っっているので、追っ手のやり方に振り回されてしまった自分たちに怒りがいつていた。

「…しかし、それを総合しますと、奴らもかなり本気だということではないでしょうか」

「ああ…そうだな」

怒りに目がくらみそうになりながらも、ローの言葉に怒りを無理やり考える力に変換した。

「ということは、奴らはちょっとやさつとじゃ引かないということだな」

「だと思えます」

「…」

「主？」

「今回はオレの失態だな」

「フェイ様っ！」

「抜け出してくるのに、膨大な魔力があれば抜け出すのがばれてし

まうと思つて、半分以上指輪に移して置いてきたからな…」

「それを言いますと私たちも考えず力を使つてしまつて」

「お前らはあの事故で死人が出ないように頑張つてくれた。咎める筋なんてない」

「…」

その言葉のままに、フェイの目は澄んでいた。

自分自身に対する怒りはあるものの、自分たちを責めることのない主人に2人は齒がゆくてたまらなかつた。

遠く聞こえていた破壊音が止んだ。

「リー」

「はっ」

「偵察を頼めるか？」

「仰せのままに」

「状況が分かり次第、連絡を入れる。これは必要なことだから魔力の出し惜しみなんてするなよ」

「分かつております」

口元にささやかな笑みを浮かべ頭を下げると、リーは音もなく先程来た道に戻つていった。

「隠密行だからリーに行かせた。すまないな」

「その言葉は必要ありません。俺ら兄妹はフェイ様を守る盾であり矛でもあります」

ローは主人の次の言葉を待つ。

「本当にお前ら双子は…」

ちらりと苦い顔をして、すぐにフェイは頭を切り替えた。

「俺たちは何を？」

ローも次の支持を静かに待つ。

「もう少し行ったところにひらけた場所があったな」

「そうですね。2、3キロほど行ったところに」

「そこに誘き出すか」

「しかしこちらには魔力が」

「罨を張ればなんとかなるだろう」

「ですが…」

「自然の気は変換しにくいが、奴らが来るまでに少くらはいは魔力に変換できるだろう」

もう全てを決めてしまったのか、フェイの瞳は定まっていた。

これ以上は進言しても無駄だと悟り、ローは指示に従うべく、移動を開始した。

第2話 その少年、追われる者なれど（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第3話 ファーストコンタクト

十数分が経ち、リーからの連絡が来た。
罨を張りながら、草地に向かう。

「予想以上に人数が多いようです」

リーからの連絡が終わったのか、ローが深刻な顔をして近づいてくる。

たった今作った罨から離れて報告を受ける。

「そうか」

「それに…あの」

「とつとつと言え」

「…どうも無関係の者が混じっているようだ」と

「なんだとっ！」

「あちらも色々と仕組んでいるようです。自警団らしき者たちだと思えます」

「凶悪犯でも逃げ込んだなどと言って、協力させているのだろう…」

壮絶な笑みを口元にのぼらせ、フェイの周辺がまた冷気を帯びていく。

顔が整っている分、その顔が怖い。

「フェ、フェイ様っ」

若干青ざめながら、ローはフェイの周りを世話しなく動いた。

「落ち着け」

しかし、フェイの一言にビシッと止まる。

「ククク…どうしてくれようか…？」

不穏な気を撒き散らしながら笑っていたフェイが何かに気付いてピタッと止まって後ろを振り向く。

「フェイ様？」

「草地のほうに人が…いる？」

「え!？」

フェイの言葉に後数メートルとなった草地のほうの気配を探る。
確かに先程は気付かなかったが、人の気配がする。

「待ち伏せですかっ?!」

「いや…それにしてもこの気配は1人分だ」

怒りに我を忘れていたわけではないようで、しっかりとした返事が返ってくる。

ローはそれに密かに吐息を零す。

「関係ない者をこれ以上巻き込むわけにはいかん」

「はっ」

慌てて2人は草地に向かった。

鬱蒼とした林を抜けると、草花が生い茂る草地が広がっていた。
その草地の中に、ひときわ大きな岩が存在感を持って鎮座していた。

（あ…）

岩の陰に隠れるように投げ出された足が見える。

フェイは慎重にその岩に近付いていった。

気配を消して近づいたわけではないのに、投げ出された足はピクリとも動かない。

訝しげにフェイは前に回りこむ。

「！」

フェイは大きく目を見張った。

岩の側に居たのは、15歳位の少女だった。

少女は暢気というか、気持ちよさそうに岩に背を預けて寝ていた。
フェイが驚いたのは寝ていたことだけではなく、少女の美しさのせいでもあった。

腰まであるこげ茶の髪に、肌理の細かそうなしみ一つない肌。

見飽きることのなさそうな伸び伸びとした若木のような美しさを少女は持っていた。

残念なことに少女の瞳は閉じられて見えないが、さぞ綺麗な瞳が隠されているだろうと無意識にフェイは手を伸ばす。

ローの静止が口について出る前に、フェイは少女の頬に触れた。

ピクリと少女が反応する。

ジツと少女の様子を見てみると、ゆっくりと瞼が上がり、想像していた以上の黒ともこげ茶色ともいえる深い色合いの瞳が現れた。

フェイが少女の瞳に魅入られるように見ている時、これまた少女
由岐も目を開けたら目の前に現れたとても整った顔立ちの、しかし
まだ幼さの残る少年のアップに驚いていた。
空を見ているうちに、のどかな日差しに誘われてついつい転寝をし
てしまっていたらしい。

起きたばかりの頭で、今のこの状況がうまく飲み込めなかった。

「あ、あの」

何とか口を開く。

しかし続きを喋ることは出来なかった。

少年に口を塞がれたから ∴ 口で。

「ンッ！」

最初、由岐には状況が分からなかった。

目の前に少年のアップがあつて、それがもつと近くにきて、視界全
部が覆われて、口にやわらかい感触が降ってきた。

ふにやつとした感触を唇に感じながら、少しずつ眠気で覆われてい
た脳が動き出した。

そしてこの感触が何であるかをとうとう悟ってしまった。

「
xッ！！！！？」

悟って、固まって、やっと抵抗らしきものをしようと動こうとした
とき、口の中にヌルツとした異物が入ってきたことによって、由岐

は更にパニックに陥った。

「っ…ん、うん…んっ」

口の中を異物が動き回ることと息もまともに吸えなくて酸欠で頭がクラクラしていく。

藁にもすぎる気持ちで目の前にある何かを鷲づかみにした。十数分にも、数秒にも感じた時間が唐突に終わった。

口の中から異物が出ていき、やっと新鮮な空気を取り込むことに成功する。

「はっ、はっ…はあ」

苦しさでショックで潤んでいた瞼をそつと開く。

由岐の目の前には、さっきと同じ少年の顔。

心なしか頬が上気している。

整った顔が上気していらぬ色気があり、ドキツとしながら、由岐は少年を力ない腕で押した。

意外とあっさり少年が由岐から離れる。

ゆっくりと自分の身体を起こして、落ち着こうとするが、今だ、パニックは続いているようで、由岐の身体は思うように動かなかった。由岐の目の前に、しなやかな手が差し出される。

少年の手だった。

もう抵抗する気力もなく、その手にすがって立ち上がる。

「すまん」

少年は、由岐と視線を合わせて言った。

「…え？」

「止まらなかった」

（何が…？…！！！！）

首をかしげ、固まって、肌という肌が真っ赤に染まっていく。

みるみるうちに瞳に涙がたまっていくのを少年　フェイは痛々しく、申し訳ないと思いつつも、また手を伸ばしてしまいそうになる自分の不謹慎な感情に戸惑っていた。

由岐の手がゆっくりと上がっていくのをなかばどうなるかを理解しながら甘んじて受けるため、囚人のようなおももちで待った。

パシィィィィンッ！！

なかなかの音を立てて、フェイの頬が鳴った。

「ファーストキスを返せ……」

真っ赤な顔で、涙をぼろぼろ零しながら由岐は叫んだ。

これが、由岐とフェイの初めての出会いであった。

第3話 ファーストコンタクト（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第4話 従者は主の下へひた走る

草木の合間を縫うようにしてリーは走っていた。

「早く主の下へ」

誰に言うでもなくポツリと零す。

敵の全容は知れた。

後は主に報告し、主の側に仕え、大事な主の御身を守るだけ。
その想いを胸に、敵に悟られぬよう細心の注意を払いながら走っていく。

そして、主であるフェイの作った罠を発動させぬように気をつける。
自分が罠にかかってしまえば、なんの意味もない。

また一つ罠を潜り抜けながら、リーは口元に笑みをのぼらせる。

「よく出来ている」

罠の作り方を教えたのはリーだった。

基本的な罠から複雑な罠まで。

しかしフェイはそこで終わりにしなかった。

色んな文献を読み漁り、自分自身で新しい罠を作り上げた。

とても勤勉なフェイに、リーは鼻が高くなる反面、もっと違うものにその勤勉さを向けて欲しいとため息を零したものだ。

現在進行中でその知識が役に立っているので、下手に文句も言えな

いが。

「罾の作り方などに精通して欲しくはないのだけど…」

でもやはり愚痴は口をついて出る。

そもそもフエイに罾の作り方を教えるに至った経緯も思い出せば、今でも怒りに心が支配されそうになる。

「駄目だ。そんな場合ではない」

ついつい過去の記憶に捕らわれそうになって慌てて思考を切り替える。

この先で自分の帰りを待っているはずのフエイを想う。

彼には敵がいつぱいだ。

捌いても捌いても次から次へと出てくる敵。

彼の立場がそうさせる。

思考を切り替えたはずなのに、どうしても思考の深みにはまりそうになる。

リーは、右手をギュッと握り締めた。

「…今は目の敵を…」

自分に言い聞かせるように呟いて、リーは走る速度をあげた。

後数メートル行けば開けた草地に出る。

リーは見慣れた自分の片割れであるローの後姿を見つけて視線をめぐらす。

少し離れた場所にある大岩の横に佇む主の姿を見て、無意識に息を吐いた。

「遅くなり…！主！？」

報告をしようと口を開くが、リーの視線はフェイの顔で止まる。

いや、顔というより頬に視線がくぎづけになった。

フェイの丸みを帯びた頬が真っ赤になっていたからだ。

白い肌だけに、赤みがとても目に付いた。

報告を忘れてフェイに近づく。

いや、フェイにあと少しで手が届くという目前で、リーは止められた。

「ロー！離せっ…！」

自分を止めたローを怒った瞳で睨む。

ローはそれでも掴んだリーの腕を離さない。

「落ち着け、リー」

ローの落ち着いた声に、余計に怒りが募る。

「落ち着けるかっ！おまえがついていながらなぜ主が怪我を」

「やめろ、リー」

2人が言い争いになる前に、いつもと変わらないフェイの声が間に入る。

なんとか気持ちを落ち着けて、リーはフェイを見つめた。

「ちょっと腫れているだけだ。怪我というほどのものではない」

落ち着かせるように、声が重ねられる。

しかし、フェイの視線はある一点から動かなかったが。

「？」

動かない視線に、自分もその視線の先を辿る。

視線の先には、1人の少女が顔を伏せて泣いていた。

フェイの頬の腫れに意識がいつて気付かなかったが、自分が来る前から居たのが窺える。

冷静な思考が戻ってきた。

この状況は何なのか、リーは視線をローに向ける。

「……」

そこには表現しがたい困り顔があった。

「ロー？」

催促してみる。

「う、うん…まあ…」

とても歯切れの悪い返事が返ってくる。

「主？」

相手を代えてみる。

「…」

やはり無言。

リーの頭の周りには、クエスチョンマークが回っていた。

「… 報告します」

凄く気になるが、それよりも差し迫った状況が追求することを許してはくれない。

無理やりに問題を横に置き、伝えねばならないことを口にのせることにした。

「ああ」

視線はこちらに出来ないが、返事を返してくれる声にしたがって、見てきたことを分かりやすく、順序立てて伝える。

「 というわけで、人数的には全部で18。我々を狙った襲撃者はその内の3名であると思われます」

「そうか」

「気になるのが、襲撃者の一人の腕に…杖に蔦が巻きついたかのような刺青がありました」

「…『ワングレイイル』か…」

フェイの台詞に無言で目を伏せる。

ワングレイル 一言で言えば秘密組織。

黒い歴史の後ろには度々名前が挙がる。

表立って動くより、水面下で動くことを好む組織で、行動目的などは闇の中。

組織の者は、体のどこかに杖に蔦が巻きついたかのような刺青をしている。

「…」

「主？」

「フェイ様？」

悠長に構えている時間など無く、リーとローはそれぞれフェイに声をかける。

「首謀者を割り出さねばならないな」

強い視線が返ってきた。

2人は自然と背筋を伸ばす。

「襲撃者を捕まえる」

「で、ですが」

「現在、我々には力が足りません」

フェイの言っていることも分かる。しかし、冷静に考えて今の状況を分析する。

こちらは3人しかないし、3人とも魔力が底につきかけている。

そしてあちらには、関係ない者たちもついている。

これだけ状況が悪いと逃げることは何とかなっても、襲撃者の捕獲までは手が回らないのが嫌でも分かる筈だった。

「我々は3人しかいません」

「少数精鋭だ」

「あちらには無関係な者もいます」

「考えがある」

「魔力が底につきかけています」

「私もです」

「オレはある」

無理な状況を一つずつ挙げていく端から淡々と返事が帰ってくる。
これが一番の問題だと魔力残量について2人が述べる。
フェイは問題無いと返してくる。

「…は？」

「…え？」

フェイの最後の言葉に2人は目をむく。

先程まで自分たちと同じように魔力の残量について言っていたのに。

「どういうことですか？」

リーが真っ先に聞く。

「回復した」

「んな…馬鹿な」

「回復したといったらしたんだ」

すっと手のひらをリーに向かって広げる。

手のひら感じるのは、途方も無い力。

ひしひしと身体全体で感じた。

「っ…！」

咄嗟に身体の前に腕を持つていく。

力から逃れるように。

「分かったか？」

「…は、はい」

頷くしかなかった。

違えることの出来ない力を感じ取ってしまったのだから。

「しかし…いつの間…に…っ！」

リーの横で、今度はローが困惑に染まった顔で、フェイに問いかける。

だが、ローは何かを察し、最後は絶句して言葉を途切らせた。視線がフェイとうずくまったまま泣いている少女を交互に見た。

「…あれ…ですか？」

確認するように、ローは口を開く。

「…そうだ」

一瞬の後、フェイは答える。

「…」

「…」

「？」

男2人は沈黙し、女は1人疑問に首をかしげた。

「…」

遠くから人の声が聞こえた。

「「「！」「」」

3人はハッと現実にかえった。

「…まずは追っ手を」

「そうですね」

「全て終わったら、私にも話していただきますからね」
「…」

鋭い目をして、3人は意識を切り替えた。

第4話 従者は主の下へひた走る（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第5話 追われる者の反撃

緊張した足取りで、男たちは鬱蒼とした木々を横切る。

誰も言葉を発さず、周囲を鋭く見回す。

しかし、その視線の中に、少し恐怖の色がちらついていた。

この雑木林に入る前は総勢で18人居た彼らだったが、現在その数を減らし、過半数をもう少しで下回るぐらいの人数になっていた。人数が減った原因は一つ。

今歩いている雑木林に、多種多様のトラップが、巧妙に隠されていたからである。

そう、フェイが雑木林を通り抜ける際に、仕込んでいったものである。

まず、最初の犠牲者は先頭を歩いていた男だった。

無造作に踏み出した足を急激にとられ、男は空中を舞った。

トラップに引っかけた男も、そしてその後をついてきた男も何が起こったのかすぐには分からなかった。

一瞬後、空中を舞った男の悲鳴が響く。

残された男たちは我にかえり、男の消えた場所に慌てて集まった。上を見上げると、これでもかといわんばかりに木を支えに全身を絡め取られて気絶している男がいた。

「おいっ!？」

「ダンっ!大丈夫かつ!!」

下から声をおもいおもいに掛けるが、気絶した男　ダンには届かない。

動揺して騒ぎ出す男たちを、少し離れた場所で見ている男たちがいた。

「…トラップが仕掛けられているとはな」

「伊達にあの思惑入り乱れる場所で生きているわけではないだろう」

「しかし、魔力を使用せず仕掛けられているから避けるのも大変だ」

「確かに」

「…」

3人の男たちだった。

3人ともローブを着ており、はっきりと顔が分からない。

「これでは『探知』の魔法に引っかからない」

「…」

「どうしますか？」

会話に参加せず、無言で居た1人の男に残りの2人はどうするのか聞く。

3人の中では喋らない男が一番偉いようだった。

「進むしかない…ここで手間取っている暇は無い」

「ですな」

「我々だけならこんなトラップ子どもの悪戯のようなものなのですが」

なんとかダンを助けようと、男たちが木に群がっているのを見てため息をつく。

思った以上に、ダンを拘束している鳶が丈夫な上、複雑に絡み合っているようでなかなかすぐには助けるに至らないようだった。

「何人が残していくしかあるまい」

「それしかないでしょうな」

「わかりました」

ロープの男たちは話をまとめると、救出劇を繰り広げる男たちの側へ寄っていった。

2人ほど残して追跡を再開することについて話す。

多少の不満があがったが、現在追っている者たちの危険性について述べて先を急がせることに成功する。

その後も、巧妙に隠されたトラップに引っかかりたり、事なきを得たりしながら彼らは先へと進んだ。

皆多少なりとも傷をつくりながら。

「…先程はあのようなことを申しましたが、これはとても考えられたトラップです」

引っかったトラップを思い浮かべて、ロープの男の1人が複雑な気分で唸る。

「地に足さえ着かなければどうということではないと思っていたが、トラップは地面だけではなかったものな…」

危うくトラップに引っかかりそうになり、多少の汚れがついてしま

ったローブの端を持ちあげ、苦笑交じりに喋る違うローブの男。

彼らは追跡している獲物を軽く見ていた。

けれども、追跡する自分たちは確実に減らされた。

人数を減らす目的で仕掛けられた、人の死角を突いたトラップには舌を巻いた。

彼らは確実に人数を減らし、体力を奪われていったのである。

だが、ローブの彼らは自分たちが失敗するはずがないという自信を未だに持っていた。

その自信はどこから来るのか。

それはローブに隠れた彼らの腕にある刺青が理由だったのかもしれない。

杖に蔦が巻きついた刺青。

これは大いなる闇の組織にして、絶対の力を誇る。

組織の名前は『ワングレイイル』。

少し先にぼっかりと開いた土地が見えた。

数々のトラップに疲弊していた男たちから安堵のため息が零れる。

見晴らしの良い場所ではトラップもそうそう機能しないからだ。

無意識に早足になる。

ローブの男たちは早足になる男たちを尻目に、ゆっくりと後をついて行く。

太陽の光を遮っていた木々がなくなり、視界が明るさで一杯になる。木々の間から零れ落ちる光があったため、そこまで暗いと思っていなかったはずだが、さすがに一気に視界を満たす光に半分以上の男たちが、光から目を庇うように手をかざした。

まぶしい光に目が慣れ、男たちはかざしていた手はずず。視線一杯に色とりどりの花々が咲き誇り、風に揺れていた。天国の花園にでも来てしまったかのようなようだった。

思っても見ない光景に、男たちは呆ける。

そんな男たちを誘うように一羽の蝶が軽やかに飛んできて、周りを旋回する。

「ッ！」

「！これはっ」

「幻覚！？」

「その通りだ」

「！！！？」

存外近い場所からの肯定する言葉にロープの男たちは驚きをあらわに周囲に視線をめぐらした。

しかし、近くには誰も居なかった。

見えるのはただ自分たち以外の者たちがうつろな目で花畑の中、棒立ちになっている光景だけだったのである。

「お前たちが今回の追跡者か」

何もかも分かったかのように姿の見えない主は喋った。

「……」

「ワングレイル」

「ッ……」

「お前たちには、雇い主の名前を吐いてもらおうか」

淡々と声だけが聞こえる。

ロープの男たちは背中を預けあい、死角を無くすよう配置につく。

比較的丁寧な口ぶりだった男が懷から一枚の紙を取り出す。
彼の身体から仄かな光が溢れ出し、手に持つ紙にその光を移行させていく。

彼の身体からは光が消え、その反対に紙は光に包まれた。

「……」

聞き取れないくらいの声で何かを呟く。

その瞬間、辺りは突き刺すような光で溢れた。

光が収まった後には、目の前に広がる光景が一変していた。

天国かと思わせる花々は消え去り、辺り一面は草地に変わっていた。

「荒い解除方法だ」

「！」

先程見えなかった人影が少し遠くに見える。

しかし声は近い。

「そんなに荒々しく魔法を打ち消してしまうから彼らが気絶してしまった」

幻覚によつて、棒立ちになっていた男たちが今は地面に倒れている。
強制的な魔法の打ち消しによつて、身体が耐えられず、倒れてしまったようだった。

遠くから声を届けながら、その声の主はゆっくりと近づいてきた。

「用件は大体分かる」

彼らの目の前には幼い外見の少年がいた。

いや、幼いのは外見だけであって、少年の瞳はとても強い意志を宿しており、外見にそぐわないものだった。

その少年の横にスツと男が姿を現す。

「断罪の黒騎士……ローウェン・ウィズサーナリー」
「名前の前にそんな名称みたいなものはついてない筈ですが」

嫌そうにローは眉間に皺を寄せた。
しかしそれだけだった。

ローはその場を動かない。

「ではあなたが」

「おれの名前などどうでも良い」

「そんな身も蓋も無い」

「ロー」

「……すみません」

「おれがお前たちに望むのは、依頼主の名前を言うことと、ここでオレに捕まることだ」

視線をそらさず、必要なことだけ喋る。

強い視線に、ローブの男たちが微かに身体を揺らす。

数秒の沈黙の後、言葉数の少なかった男が口をひらいた。

「あなたもわかってているはず。我らは依頼主の名前を言わない。ここで捕まらない」

ローブの中からおもむろに紙を引っ張り出す。
フェイは目を細めた。

「
我らはあなたを殺す」

第5話 追われる者の反撃（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

しかし…主人公は由岐のはず？なんですが、ターンはフェイのまま

…（汗

多分話が進めば……すいません、確約できません（泣

第6話 相対

「お命頂戴する」

襲撃者たちはフェイに向かって言い放った。

1つに固まっていた男たちが瞬時に離れて、それぞれこちらを窺いながら構える。

しかし、フェイとローは微動だにしなかった。

「」

左に立った男が、懷から取り出した紙を前に突き出し、何事が唱える。

光が生まれ、前に突き出された紙に集約していく。

変化は突然だった。

フェイとローを囲むように地面が割れ、割れた場所から何かが2人を包む。

外から見るとそれは無骨な鳥籠のようだった。

「やはりもう力はないようですね」

魔法を発動した男が、愉悦をにじませた声で喋る。

「我々はあなたを殺すように命令されております。」

が、あなた

が我らの望みを叶えてくださるのなら命はとりませぬ」

この後の展開を思うように、ローブの男は朗々と語りかけてくる。

「……」

しかし、フェイはやはり表情を変えことなく、口を開いた男ではなく、一番真ん中に立つローブの男から視線を外さなかった。

「聞いているのですか」

喋っていた男が、気分を害したかのように、少々声が尖る。

「ロー」

やはりそれに応えず、フェイは静かに自分の側に寄り添うローを呼んだ。

「御意」

何も言わなくとも、ローは主の意を汲む。

背中に装備した大剣を鞘からスラリと抜いた。

フェイの背後を離れ、前に立つ。

おもむろに大剣を横になぎ払った。

「……!!」

それだけで十分だった。

フェイとローを取り囲んでいた囲いは消える。

「脆いな。こんなものでおれを捕まえられると思うとはとんだ茶番だ」

「ぐ…」

「これぐらいしてみせろ」

パチン

指を打ち鳴らす。

音と共に先程魔法を発動させた男の周りに光の円が現れた。魔方阵である。

緻密な文様が浮かびあがっており、つい見はれてしまいそうだった。しかし、魔法陣の中に立った者にとったらそれどころではない。慌ててその場を離れようとしても、もう足をその場から動かすことも出来ない。

「!?!」

大地に派生している草が伸び、男を拘束していく。ついには首から上以外は草で覆われてしまった。

「ぐう…っ!」

身動きがとれず、男は呻くだけだった。

「お前らも何かしてみるか?」

残ったローブの男2人を見据える。

「おかしい…なぜ魔法が使える?!」

右側に立つ男がうるたえたかのように言葉を漏らす。

「おかしい？何がおかしいんだ？魔法くらい使える」

フェイは右手を胸の前に掲げる。

右手の手の上には光が凝縮され瞬いていた。

凝縮された力に、今まで言葉を発しなかった真ん中に立つ男が身体を微かに揺らす。

「信じられないことだが…事実」

ここにきてやっと口を開いた。

目の前にいる標的であるフェイの手から、身体を圧するような力が押し寄せてくる。

圧するような力から離れようとする身体をなんとか踏み止まらせる。

「奥の手…か」

「いや偶然の産物だな」

「…」

「どうやらこちらに運は向いているようだ」

つい口から漏れた言葉に返事が返ってきたことに男は口を閉じた。

「で、どうする？」

黙り込んだ男を見据えてフェイは聞いた。

「…？」

「まだこの茶番を続けるのか」

「…」

「両端はもう使えないぞ」

フェイの言葉に左右に視線を投げる。

言葉の通りに、一緒にここまでやってきた仲間は使い物にならなくなっていた。

左の男は先程の蔓に巻きつかれたまま気絶し、右の男はフェイの力に萎縮し動けなくなっていた。

それほどまでに力の差が激しかったのだ。

「…ここまでのようだ」

言葉と共に男の体は光に包まれる。

「お前だけ逃げるつもりか」

「またお会いしましょう。 フェイリール様」

問いには答えず、優雅に男はお辞儀をした。

男の台詞にフェイは眉間に皺を寄せた。

一瞬後、男の姿はもうそこにはなかった。

「魔力を辿りますか？」

ローの言葉に首を振る。

「無駄だ」

途中までは辿れる。

だがそれだけだ。

下手をしたら、へんな場所に誘い込まれてしまうかもしれない。

フェイは男の魔力を辿った時にどうなるか半ば予想できた。

相手は狡猾だ。

こちらの魔力を底につかせた方法を思い出せば、どんなことでも利用するだろうことが予想できる。

「撤収する。その2人は衛兵に事情を話して更迭してもらえ」

「は」

「罨を無効化したのちに移動する。場所はいつものところだ」

先程仕掛けた罨が発動せず残っていたらまずい。

人が使わない場所だろうと、絶対踏み入らないという保証はない。

今後の行動を考えながら、リーと一緒に移動させた少女を思い出す。

「フエイ様？」

「っ…いや、すまない。そこでのんきに寝ている男たちもよろしく頼む」

「了解しました」

ローは首肯すると時間を無駄にせず動き出す。

ロープの男たちを拘束しようと移動したローを尻目に、フエイは雑木林に足を向けた。

第6話 相対（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第7話 怒り

視界も頭の中も真っ白になった。

次いで視界は真っ赤に染まった。

現実的に視界が色を判別したわけではない。

後から考えてみるに、あれは『怒り』によってだったのだろうと理解する。

突然の接触。

ファースト・ だなんて言いたくない。

たとえそれが事実だとしても。

あれがファースト・キ　だなんて認めない。

小さいころから夢みてた。

父と母の運命的な出会い。

出会ってすぐ2人は恋に落ちた。

いろいろと障害があつたけど、その障害を突破し、結ばれて私と弟が生まれた。

自我が生まれたときには、もう母からその話を聞かされていたように思う。

寝る前におとぎ話を聞かせるように。

何回も強請って聞かせてらった。

いつか自分も2人みたいな運命的な出会いをして、恋をする。

そう思ってた。

中学にあがって、いろんな男の子に告白された。

私は全て断った。

高校生になっても同じ。

告白は嬉しかった。

でも…彼らは違った。

私の『運命の人』じゃない。

何かが叫ぶように伝えてくる。

『違う』って

16歳の誕生日が来た時に母に言われた。

『16歳になったあなただから』

驚いて、そしてずとんと胸にその言葉が落ちてきた。

『もうすぐ会える』

「だからってこれは無いでしょ　　つつ!!」

茫然自失になっっているうちに連れて行かれた宿らしき建物の1室で、ベッドの上で丸まって、由岐は叫んでいた。

ジンジンと熱を持ったような右手がこれは現実だと伝えてくる。思いつきり人をひっぱったいた代償だ。

「~~~~~」

ボスツと枕に頭を静めて後はうなるばかり。
泣くだけ泣いた。

泣いた後には怒りが身体を支配し、そして母の言葉やあの少年のこ
となど色んなことが頭を巡る。

時間は過ぎていくが、由岐の身体の中は嵐が吹き荒れるばかりで静
まらない。

しかしその吹き荒れるばかりの嵐も唐突に収まる。

「あつた事實は変わらない…よね」

ごろりとベットの上を転がる。

枕の中に埋めていた顔は上を向く。

「ていうか、ここって明らかに日本じゃないわよね…」

混乱した頭で歩いた通りを思い出す。

色鮮やかな髪の色。

そして瞳の色。

日本人は基本黒目だ。

カラーコンタクトを入れれば別だが。

しかし、ここにいた人の全てがカラーコンタクトを入れているはず
が無い。

「…仮装大会じゃあるまいし」

乾いた笑い声が口から漏れる。

また身体の向きを変えて窓から見える空を眺めた。
空の色は一緒。

しかし建物は日本建築には程遠い。

「…もしかして異世界？ …なんちゃって」

瞼を閉じて見える世界をシャットアウトした。
急速に全身が重くなる。

これは夢への誘い。

その誘いを拒まず、由岐は意識を手放した。

第7話 怒り（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

今回は短めでした。やっと由岐のターンかと思いきや、現在進行形で混乱中です。

読んでくださった方がいると思うと、筆が進んだり…。

少しの間の奇跡かもしれませんが、頑張りますので、よろしく願います！！

第8話 知らぬ間に話は進む

リーは宿屋に落ち着いてすぐ、フェイに事情を聞いて口を開いた。

「主が悪い」

一刀両断。

ギラギラと目を怒りで光らせながら主を睨みつける。

その視線を真っ向から受け止めて、フェイは困って眉根を寄せる。

「乙女の唇を強引に奪うとは何事ですかっ！そんな子に育てた覚えはありませんよ！！」

なおも口を開き、主であるフェイを糾弾する。

それをローが少し離れた場所に所在無く立ち、見ていた。

「お前に育てられた覚えは」

「何ですか？」

「…何でもない」

お説教は1刻にも及ぶ。

そろそろ止めるべきだと思ったローがリーに近づく。

「そろそろ落ち着け」

スツと冷たい水の入ったコップを差し出す。

リーは、差し出されたコップを奪うように取り、治まらない怒りと共に喉の奥に流しこんだ。

冷たい水にやっと怒りが下火になる。

同じようにフェイにコップを渡しながら、ローが口を開く。

「フェイ様のしたことはもう済んでしまったこと。これからのことを考えるべきだ」

「…そうだな」

「…」

ローの言葉にピクリとリーの口の端が反論したそうに反応したが、口から出てきたのは同意の言葉だった。

フェイは無言。

「彼女をどうするのですか？」

強い視線と困惑した視線が左右から注がれる。

視線に促されるようにフェイは口を開くが、またそのまま口を閉じた。

「見たところ、見たことのない服装でした。この周辺の生まれではないでしょう」

「黒い瞳は珍しいものです。この国には無い色です」

「何処からか連れて来られたとか」

「いや、出会った状況的にそれはありえないだろう。暢気に転寝を

していた様子では旅人辺りが濃厚だろう」

フェイを置いて2人の話は続く。

「しかし、旅をして来たにしては持ち物が無さ過ぎだ」

「そうだな…」

「素性も気になるが、今後彼女をどうするか…」

「落ち着いたら別れるか」

ローは頭に手をやり、リーは顎に手を添えて考える。

「連れて行く」

今まで口を開かなかったフェイが唐突に口を開く。

2人は虚空を見ていた視線をフェイに戻す。

「彼女は連れて帰る」

もう1度自分の意見を述べる。
決定事項だといわんばかりに。

「ですが」

「もう決めた」

「フェイ様…」

「何を言われても変わらない」

意思は変わらないのだとそっけない返事。

2人はお互いの顔を見て、その後盛大なため息を零した。

こうなったフェイは頑固で、意思を覆すことは不可能だと長年一緒にいる2人には痛いほど分かった。

「彼女をどうするのですか？」

一言一句違えず、声をそろえて2人が問う。

フェイは口元に笑みを上らせる。

「あれはオレのものだ」

2人は目を見張る。

息が止まるほどに驚いた。
慌ててフェイの側による。

「熱はっ」

「何処かで頭でもぶつけたのかっ！」

動転したのか、おでこの熱を測ったり、身体に異常は無いか2人は調べ始める。

それを無視して、フェイがニツコリと笑った。

「「!？」」

それに同時に固まるローとリー。

「オレは本気だ」

言葉と共に部屋の中はフェイを中心として突如風が吹き荒れる。

2人は風に煽られ吹き飛ばされそうになる。

辛うじてしりもちをつく失態を防いだが、片膝について止まることのない風から身体を守るように片手を前にかざす。

「主っ！」

「フェイ様っ！」

「もう決めた。オレはあいつを伴侶にする」

「っ！」

「っ！… 分かりましたっ！！分かりましたから、この風を止めてくださいっ！！？」

ビュウビュウと容赦なく身体を揺らす強風の中、部屋の中にリーの悲鳴じみた声が響いた。

「分かってくれて何より」

唐突に生まれた風は、唐突に消えた。

ローとリーの髪は風に煽られ、ぐしゃぐしゃだ。

しかし、部屋の中であれだけの突風が吹き荒れたのに、部屋の中にあつた調度品類は指の爪ほども乱れることなく各々の場所にあつた。そしてフェイ自身も一筋の乱れも見えない。

「…酷いです、フェイ様」

ローはがつくりと床に沈んだ。

「…こんな方法で物事を解決する方法など…教えておりませんが」

額に青筋を上らせ、リーが髪の毛を手櫛で整える。

「人は日々成長するのだ」

先程と変わらず笑いながらフェイはそんな2人を見ていた。

「まずは彼女が落ち着いてからですかね」

「ちよつと様子を見てください」

ローの言葉に、リーが立ち上がる。

落ち着かせるために、隣にもう一室取った。

宿に着てからもう数刻が経っていた。

そろそろ落ち着いているはずだ。

これからの予定など諸々を話し、関係を築かなければならない。
フェイは椅子に座って考え込んだ。

バンッ！

「主っ！？」

扉を乱暴に開け放ち、リーが部屋に飛び込んでくる。

「リー、扉が壊れる」

ローの非難の声をスルーして、リーはフェイに近づく。

「どうした？」

ただならぬ様子に、考え事を中止してリーを見る。

「彼女の姿がどこにもありません!!」

「!」

「宿の中を全て捜したのですが 主っ!」

最後まで聞かずに部屋を飛び出し、隣の部屋に駆け込む。

リーの言ったとおり、彼女の姿は無かった。

ベットは少し乱れていたが、誰かが部屋に押し入ったような雰囲気は無かった。

「自分で…出て行ったのか…」

「フェイ様」

部屋の中に佇むフェイに数分遅れてローが声を掛ける。

「なんだ」

「受付にいた者に話を聞いてきたのですが、1刻ほど前に彼女が出て行ったのを見たようです」

「それは真実か」

「はっ。彼女の服装はこくらへんで見かけるものと全然違うので、間違っはすがございません」

「分かった…捜せ」

「はっ」

「了解です」

いつの間にかそろった2人は同じように礼をとり、宿を出て行った。

「… オレから逃げられると思うなよ」

1 人部屋の中で立ち尽くしたまま、フェイはその幼い顔に似合わぬ
獰猛な笑顔を浮かべた。

そして、身を翻して部屋を出て行った。

第8話 知らぬ間に話は進む（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
ちよつと話が進んでいきます。

誤字脱字沢山だと思えます（汗）
もしよろしければ教えてください！

第9話 目覚めればそこは …

「悪趣味でしょ…」

重い瞼をなんとか開ける。

視界に入ってくるのは、金、金、金。

上から右を向いても左を向いても黄金色。

これまでこんなに金色で埋められたような部屋を見たことはなかった。

「…金の壺に、金の像 本当にもえなさすぎ」

やっとこじ開けた瞼も一段と重くなる。

つい誘惑に負けて閉じそうな気持ちと瞼に叱咤して、そろりと起き上がる。

「…金の天蓋」

天蓋があるベッドなんて普通のやつでも寝たことなんて無いのに、いろいろすっ飛ばして金が惜しげもなくちりばめられたかのような見事な一品で、由岐は寝ていたのだ。

「夢見がちな私でもこれは嫌だわ…」

どうしたって居心地意度マイナス100パーセントのベッドからそそくさと逃げ出す。

悪趣味なベッドを降りた足をあし毛の長いジュータンが迎える。これまた言わずもがなな色合いで。

「」

コメントするのにも疲れ果て、由岐は疲れたため息をついた。

コンコン

「！」

ドアを叩く音。

急なことに体がビクツと揺れる。

「は、はい」

恐る恐る声を返す。

一瞬後、ゆっくりとドアが開いた。

「失礼いたします」

メイドのお仕着せを着た1人の女性がいた。

身体の前にはワゴンがあり、由岐の返事を待たずして部屋の中に押して入ってくる。

何も言えないまま、その行動を何とはなしに見つめた。

部屋の隅に置かれた、これまた豪華なテーブルに、ワゴンで運んできた物を静かに置いていく。

用意が整ったのか、由岐をしっかりと捉え、手をテーブルに向けて

一言。

「どうぞ」

そのまま微動だにせずこちらを見る。

わけが分からないながらも、自分が動かないかぎりかの女性が動かないことに思い当たり、ソロソロとテーブルに近づく。

椅子を引かれて仕方なしに座る。

テーブルの上には焼き菓子が上品に盛られたお皿と、ティーカップが置かれていた。

由岐が見ている前で女性はティーカップにお茶を注ぐ。

途端にお茶の芳醇な香りが広がり、由岐の強張った肩から少し力が抜ける。

「おしほりを」

目の前に差し出されたおしほりを勧められるがままに手に取る。

おしほりは少々熱めの温かさを保っており、由岐はこの時、自分の手が思った以上に冷えていたことに気付いた。

「え、えと…ありがとうございます」

家の教育の賜物か、口から感謝の言葉がこぼれる。

しかし、女性は少し頭を下げてそのまま静かに部屋を退出して行ってしまった。

「どこ何処よ…」

おしほりを手に途方にくれる。

由岐は、さっぱりわけが分からなかった。

「違うところで寝てたよね……で、トイレに行きたくなって、部屋に無かったから部屋を出て……？」

思考が止まる。

その後の記憶が由岐には無かった。

「なんでえ？」

気持ちを落ち着かせようと、メイド？が用意していったお茶を手にとった。

お茶によつて温まった茶器に、ほっとため息がこぼれる。

しかし、お茶に口を付けようとは思わなかった。

どうしてこんな場所に居るのか分からなかったから。

「飲まないのかい？お嬢さん」

唐突に声がかかる。

由岐はまたまたビクツと身体を揺らす。

部屋には由岐しかないはずだった。

そして唯一の出入り口が開いた音はしなかったのである。

驚くなどという方が無理な話だ。

恐る恐る声のしたほうに振り向く。

「!？」

由岐はその男を一目見て、確信する。

この部屋はこの男の趣味だと。

由岐の視線の先には惜しげもなく布が使われ、所々に金糸で縫いこまれた刺繍がすみずみを飾っており、極め付けに何カラットあるんだといわんばかりの宝石が加工されて胸元を飾っていたのだ。

才能ある者が作っているようで、素晴らしいといわざるしかないような出来ではあるが、通常的に着るようなものには見えない。

というか、由岐の住む日本：いや、地球ではお目にかかれぬような服装だった。

由岐はそんな場合ではないと思いながら、自分が慣れ親しんだ場所から遠く離れた場所に来てしまったことを認識してしまったのである。

「おはよう 眠り姫」

キラリと齒並びのいい無駄に白い齒を光らせながら男が笑う。

男の台詞に、寒気が走る。

「ね、眠り姫？」

ついつい聞き返してしまった。

「そうさ！僕を一瞬で魅了してしまった麗しの君！！寝ている君はとても美しかった！！！」

とっさに茶器をテーブルに戻して、手で腕をさする。

いつきに鳥肌が立ったのだ。

「プティリスの町で歩いている君を見て、僕は雷に打たれたかのような衝撃を感じたよ！」

決壊したダムから水が勢いよく流れていくように男の言葉は止まらない。

陶然とした表情で、由岐との出会いについて語っていく。

しかし由岐には見に覚えが無い。

口を挟むことも出来ず、ただただ男が自分の世界から帰ってくるのを、腕をさすりながら待つことしか出来なかった。

由岐はそんな中、あの少年を思い出す。

意志をもった紫色の瞳がとても印象に残っている。

どうして少年のことを思い出すのか…。

そして、今この場に少年がいないことに不安を感じている自分に戸惑う。

（なんで居ないのよ…）

そんなことを考える由岐の姿は、母親が側にいないことを哀しんでいる子どもようだった。

第9話 目覚めればそこは … (後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます！

今回は予約掲載という機能を使いました。

明日更新がうまいこといくか分からなかったので…。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです！

第10話 追跡

フェイはもぬけの殻となった部屋を飛び出した。

怒りのままに廊下を走りぬけ ようとしたが、不意に立ち止まる。
スツと目を細める。

「
…？」

何か違和感を感じるのか、辺りをゆっくりと見回す。

「
…宿屋の廊下になぜ魔力の残滓が残っている？」

疑問が口をついて出る。

先の事件で魔力が底に近いせいで感知が鈍くなっているのか、ロー
とリーは気付かず出て行ってしまったが、フェイには分かった。

時間が経っているせいか、かなり薄まっているが、魔法が使われた
気配 魔力の残滓が見えたのだ。

先ほどまで身体を支配しかけていた怒りが身のうちから消える。

残った魔力を注意深く探る。

魔力の流れを追うように視線を移す。

階段近くにあるちよつとしたテラスのようになった場所に辿りつく。
そこには時間がたった今でさえ、隠しきれない魔力の波動が満ち溢

れていた。

「やはり…おかしい」

残っている魔力につと眉間に皺がよる。

フェイの中に一つの確信が浮かび上がる。

「逃げてない」

眉間の皺が無くなる。

「あいつはオレから逃げてなんか無い」

うつすらと口元に笑みが上る。

ゆっくりと手を前にかざす。

無言で周囲に散らばっていた魔力を集約し始める。

手のひらの上が光りだし、光の玉が形成されていく。

廊下やテラスにあった魔力の残滓をかき集め終わったときには約10センチの球体になっていた。

「わが身体に流れる血に従いて形を成せ」

光の玉はフェイの手のひらの上でぶるぶると震えだしたかのように見えた。

数瞬後、光を辺りに撒き散らしながら消えた。

光の玉の無くなった手の上には、蝶が羽を休めるかのように留まっていた。

「誰だか知らないが、オレのものに手を出したこと後悔させてやる」

蝶を手にも、踵を返す。

先ほどまで使用していた部屋に戻る。

部屋に飾ってある花瓶へ蝶を放した。

蝶はフェイの意に従うかのように、ひらひらと羽を揺らして花瓶に飾られた花のひとつに身を落ち着ける。

それを満足げに見つめて、椅子に腰を下ろした。

「…」

テーブルに頬杖をついて、無造作に空いたほうの手を振る。
手の動きに沿うようにささやかな風が起こる。

「情報が集まったら至急戻ってこい」

虚空に声を放つ。

それだけ。

生まれた風が意志を持つかのように開いた窓からするりと外に出て行く。

フェイは振った手を下ろして、瞼を閉じた。

「…名前を聞いておけばよかったな」

背中に流れるこげ茶色の髪。

その髪の色をもっと濃くしたかのような瞳。

その瞳が涙を湛えて、怒りに染まったのを思い出す。

叩かれた頬の痛みはもう消えたはずなのに、何故か痛みを感じるような気がした。

それも甘い痛みだ。

自分にそのような気でもあったのかと心配するわけではないが、ふっと笑ってしまった。

思い出せば思い出すほど、あの少女を自分の身体の中に閉じ込めたと思う。

「囚われた…か　しかし悪くはない」

幼さを残す外見に似合わない切なそうな表情が浮かぶ。

そんな表情を目にした者は、生憎誰一人としていなかった。従者の2人を待つ間、フェイは思考の海に沈むのであった。

待つこと半刻。

まずローが部屋に戻ってきた。

そして時を待たずにリーも戻ってくる。

「ただいま戻りました」

「ああ」

「ただいま戻りました」

「揃ったか…」

頬杖をついていた腕を外し、椅子の背もたれに背中を預ける。

そんなフェイの様子に、2人は宿を出て行く前と様子が違うことに気付く。

「フェイ様？」

「主？」

問うように聞かれ、視線を側に立つ2人に移す。

「何が分かった？」

疑問に答えず、反対に聞き返す。

「足取りを追いましたが、途中で足取りがなくなりました」

「その足取りの掴めなくなった周辺で聞き込みをし、怪しい者が居なかったか調べました。しかし、怪しい者などの情報は掴めず…」

「そうか」

「ですが、彼女が消えた路地の方で光が奔ったとか」

「ほう？」

「現在、我らは魔力量が底につきかけており、これ以上の探索は困難と判断し、帰ってきた次第です」

「情報が集まり次第、帰って来いとのことでしたので」

2人はフェイに逆らわず、集めてきた情報を口にする。

静かに聴きながら頷くフェイに、2人は揃ってお互いを見る。

本当に先ほどまでの獰猛さは何処に行ったのかと頭の中は疑問でいっぱいだ。

「オレのほうも情報を手に入れた」

「…！」

「お前等が出て行った後に、その廊下に魔力が残っているのを発

見した」

「この宿屋で…ですか？」

「魔力が廊下に漂っていたって…」

フェイの言葉に2人それぞれの反応を見せる。

宿屋の廊下で、通常、残るほどの魔力を使う者はいない。

基本、そんなことが現行で見つかれば詰め所に連行されてしまうことだろう。

宿屋など不特定多数の人間が訪れる場所は魔法が禁止されていた。

禁止されていると言っても絶対に使われないかといえばそんなことは無い。

ちよつとした魔法であればすぐにでも魔力は散開し、残らないので日常生活に利用されるくらいの魔法の使用は現状としては暗黙の了解とされていたりする。

だからこそフェイの台詞は腑に落ちない。

そんな規制のある宿屋の廊下で、残るほどの魔力が漂っていたことは。

「いつものお前等だったら気付いたはずなんだがな」

苦笑と共に言われ、2人は顔をしかめる。

その通りで、ぐうの音も出ない。

「リー」

「はっ」

「一度戻ってオレの指輪を取って来い」

「っ！で、ですが」

「お前等の魔力を回復させないことには後手に回るだけだ。運の良

いことに、オレの魔力はあらかた満たされているし、指輪に移したオレの魔力はお前たちにやる… だから取って来い」

反論を許さない目で見られて、リーは口を閉じた。

「リー」

ローがリーを呼ぶ。

「…分かっている。ローが行くより、私の方が早い」

「…」

「では、主」

「ああ。アルデンの外れまでは送ってやる」

フェイは言葉と共に2センチの玉をリーに放る。

リーはその玉を難なく手で受け止める。

玉はほんのり光っていた。

「人気の無いところまで行くか、教会に行け」

「はっ」

「適当な場所に着いたら連絡しろ。…それくらいは魔力が残っているだろう？」

「ええ」

「連絡がきしだい転移陣を展開するからその玉を割れ」

「分かりました」

手の上で玉を転がしながらフェイの言葉に耳を傾ける。

転移の魔法は実はとても難しい。

大きな町には大抵、魔法教会の支部がある。

その魔法教会には、転移の魔方阵を刻んである部屋があり、その魔方阵に魔力を流し込むことで違う町に転移することが出来る。

その刻まれた魔法陣にしても転移できる距離には限度があり、遠くても2つ3つ離れた町の魔法教会までしか転移することは出来ない。現在の魔法技術では転移というものは、意外と融通の利かないものなのである。

世の話としては。

なのに、フェイはこともなげにリーにアルデンまで転移魔法で送ってくれると言う。

教会にある魔法陣を使う気もないし、アルデンにある教会の魔法陣に送るつもりも無い。

少々（？）規格外な主に、リーは時々 本当に時々だが不安に襲われる。

「なんていうか…」

「なんだ」

眉根を寄せてリーが玉をみながら呟く。

それにフェイは先を促す。

「いつか世界を掌握したいとかいいませんかよね？」

ピシリ

部屋の空気にヒビが入ったような気がした。

「それも面白いかもな」

否定して欲しいところを否定してもらえなかった。
リーは背中に流れる汗を感じた。
それはローも同様に。

「あ、主？」

「フエ、フエイ様？」

2人は無意識に寄り添い、フエイをジッと見る。
フエイは2人の視線を感じながら、邪悪に笑う。

しかし一転、その表情が呆れたものになる。

「んな分けあるか」

頬杖をつき、呆れた視線を2人にやる。

2人はいつきに力が抜けたのか、膝から床に崩れ落ちた。

「主」

「フエイ様」

「情けない声を出すな」

「そんなこといわれても」

「うるさい。誰がそんな楽しそうにないことをするか。オレは適当

にやることとして、とつとと適当な領地に移り住んで、日がな木の下で読書をしたり、釣りに出かけたり、馬に乗って出かけたりするという大切な計画がある。世界掌握などしている暇など無い！」

「……」

（それもどうかと思う……）

（夢があるんだか無いんだか……）

とても可哀相な子を見るような目でフェイを見て、2人は視線を交わす。

2人のアイコンタクトはばっちりだ。

フェイはそんな2人を他所に、未来について熱く語る。しかし、それもぴたりと止まる。

「フェイ様？」

「世界…掌握か……」

「主？」

「このままあいつがオレの元に戻って来なかったら…してみるのも一興…か？」

「フェ、フェ、フェツ、フェイ様っ……！」

「主！す、すぐに指輪を取ってきます！すぐに取って、引き返してきますからっ……！」

フェイの台詞に2人は動転する。

フェイの瞳が狂気に満ちているのを見てしまったのだ。

言うが早いか、ローが部屋の扉を開けて、リーが飛び出していく。

リーが飛び出していった廊下を見たままローは汗をだらだらと流す。

ソロソロと視線を部屋の中に戻す。

フェイは優雅にお茶を飲んでいた。

「フエイ様？」

固まったローを冷めた目で見ながら、お茶を口に運ぶ。

「さつさと動かんからだ」

茶器を手に持ったまま、窓の外に視線を移す。

空はとても青くて、最初に彼女を見た時のことを思い出させる。名も無き草花が揺れるあの場所で、彼女は幻かのように存在していた。

投げ出された足。

身体の上を流れるように広がる長い髪。

無防備に眠る姿が今も目に焼きついている。

（世界掌握など冗談ではないが…あいつが戻ってこないのなら…）

「フエイ様？」

ローの自分を呼ぶ声に思考が途切れる。

「…本当に、名前を聞いておけばよかった」

ため息と共に、下らぬ思考を闇に葬り、茶器をテーブルに戻す。

「今度こそ聞きましょう」

「そうだな」

気遣うように言われて、ふっと笑う。

「あいつはオレのものだからな。絶対に連れ戻す」

根拠があるわけではないが、確信がある。

会うべくして会ったのだと。

フェイは椅子に座って、リーの連絡を待つのだった。

第10話 追跡（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第11話 これって現実？

「
」

男が喋り始めて早1時間が経とうとしていた。
由岐は呆れるのと同時に、感心していた。

（よくあれだけの美辞麗句を並べ続けられるなあ…）

男から延々と聞かされる美辞麗句を聞き流しながら、そつと視線を外す。

（本当に、ここは何処なのかしら？）

美辞麗句の合間に聞き取れた話を総合すると、由岐は宿屋をいつの間にか抜け出し、外の路地で倒れていたらしい。
それをこの男が発見し、この屋敷に連れてきたとのことだった。

（…宿屋を抜け出した記憶なんて無いのだけど。疲れて夢遊病患者みたいな行動に出たとか？）

自分の行動に疑問が出てくる。

生まれてから16年。

そんな行動にでたことは無いはずだ。

でも現実には寝ていた部屋を出て、廊下に出たところまでしか記憶に無い。

自分の行動に不安が募る。

考えに没頭しようとした由岐を現実に戻したのは、目の前で喋っていた男だった。

「お嬢さん？」

「え？」

「あなたのお名前をお聞かせ願いたい。ちなみに私の名はスタンリー・ドリードゥーフライゲラだ。ぜひスタンリーと呼んでくれ」

歯をきらめかせながら、男 スタンリーは由岐に笑いかける。その笑みにちよつと身体を引きながら、由岐は口を開いた。

「し…ユキ・シキガワです」

スタンリーの名前を聞くかぎり、ここは名前を先に言うのが妥当だろうとあたりをつけ、自分の名を告げる。引きつった笑いと共に。

「あの…倒れていた？私を介抱してください、ありがとうございますでした」

どんなに男がおかしい感じがしても、助けてもらった？ことに変わりはない。

母と父の教育の賜物か、しっかりと礼を述べた。

「ユーキ？いい名前だ！」

しかし、スタンリーは由岐の礼の言葉など放置し、由岐の名前を褒

め称える。

（ユーキじゃなくて、ユキなのけど）

文句は口に出さず、心の中で。

これは母に教えられた処世術だ。

物事を円滑に進めるには余計な口を挟まず、適当に笑っていれば大抵のことは上手くいくとのことだった。

母の言葉はある意味正しかった。

「目覚めたばかりなのに、長居してすまなかったね。綺麗な君の…いやユーキの姿を見て言葉が溢れ出して止まらなくてね」

ニコニコ

「いつまでも君の姿を見て、話をしたいが、無理をさせるわけにもいかない」

ニコニコ

「今日はゆっくり休んでくれ」

ニコニコ

「何かあれば侍女に言ってくれればいい」

「ありがとうございます」

ニコリ

由岐の返事と笑顔に満足してスタンリーは部屋を出て行った。

数秒と経たずに、ニコニコと顔に浮かべていた上辺だけの笑みが消える。

「この後どうしたらいいのかしら？」

残念ながら由岐にはあのスタンリーという男が信用できなかった。言葉の大半は美辞麗句に使われ、由岐の処遇にはこれといって何も言わなかった。

辛うじて話してくれたのは、由岐が路地に倒れていたことと、今居る場所がザラウェイという地名の町ということだけだった。

コンコン

扉を叩く音が聞こえてきた。

「はい」

「失礼致します。湯浴みの準備が出来ております」

扉を開けて入ってきたメイド服姿の女性 侍女だった。

簡素に用件を言われる。

由岐も確かに一度身体の汚れを落としたいと思っていたので、渡りに船といわんばかりに頷いた。

侍女に誘導されるままに、ついて行く。

着いた先にはこれまた形容しがたい湯殿があった。

（どれだけ黄金好き…）

せっかくのお風呂も疲れを取る場所とは遠い存在のようにみえて、ため息が零れそうになる。

侍女に促されるままに、脱衣所に移動する。

由岐が慌てふためいたのはこの後。

さてお風呂に入らせてもらおうと思った由岐だったが、侍女が出て行かないのだ。

あまつさえ、服を脱がせようとしてくる。

「あ、あの、自分で出来ますから！」

侍女の手を遠ざけて、その場からも数歩遠ざかる。

しかし侍女も引いてはくれない。

数分の攻防の後、負けたのは由岐だった。

湯殿の中まで入ってこようとするのだけは断固として拒否したが。

「私は日本人なのよ……」

ブツブツと愚痴りながら、身体を流す。

湯船には色とりどりの花が浮かべられており、甘い匂いが漂っていた。

内装に関しては推してしかるべし。

飾られてある天使の像などを出来るかぎり視界からシャットダウンして湯船につかる。

さすがに湯船につかると、ほっと力が抜けた。

「町並みも人も全然違う」

ポツリと言葉が零れた。

ふと、父や母そして弟の顔が浮かんでくる。

それに伴いとても不安が湧き上がって、涙が頬を伝う。

零れた涙は湯船の中に落ちて消える。

「お父さん」

膝を抱える。

「昂貴」

ギュツと力を入れる。

「…お母さん」

こらえ切れなくて喉が震える。

由岐、どんな時でも前をしっかりと見据えるの

「！」

母 離亜の声が聞こえたような気がした。

離亜は何かある事に色んなことを教えてくれた。
聞こえたのはその中のひとつ。

友達と喧嘩して絶交して帰ってきたとき。

昂貴と言い争いになって負けて泣いたとき。

ストーカーまがいの男に言い寄られたときなど。

離亜は様々な場面で、由岐に負けるなど言ってきた。

勝ち負けなどではない。

不安や折れそうになる自分自身の気持ちに負けるなど。

離亜の言葉の一つ一つが由岐の中に息づいている。

お湯をすくって、顔に打ち付ける。

数秒手で顔を覆ったままの姿勢で固まる。

「…どんなことも自分の気持ちしだい」

顔を覆う手のせいでこもった声を吐き出すと同時に、顔を上げる。

不安に揺れていた瞳は強い意志を灯す。

もし、この時の由岐を見ている者がいたら、由岐の瞳がキラキラと光っているように見えたことだろう。

それほどまでに瞳に力が戻っていた。

これが本来の由岐の姿だ。

「まずは現状を把握しなきゃ」

由岐は、のぼせそうになる一歩手前まで、お風呂につかったまま今後の取るべき行動を考えるのであった。

第11話 これって現実？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第12話 意見の相違は多々あることで…（前書き）

気づくのが遅くなりましたが、この小説を評価してくださった方がいらっしやいました。

ありがとうございます！とても嬉しかったです！

嬉しい気持ちを糧に、頑張っていきたいと思います！！

第12話 意見の相違は多々あることで…

湯船の中でのぼせそうになり、慌てて湯船を後にした。

碌な抵抗も出来ぬうちに、スタンバイしていた侍女に服を着せられる。

着せられた服は、由岐が普段着るようなものではなかったが、ワンピースのような形の服だった。

部屋着なのであろう。

由岐はこっそり息をついた。

（あの人が着ていたみたいな服でなくてよかった…）

着替え終わり、お肌の手入れを丹念にされる。

その後、また侍女の誘導で部屋に戻った。

「お食事をお持ちいたしますので、少々お待ちください」

礼をして、侍女が部屋を出て行った。

食事を用意してくれるのは助かる。

いろんなことが起こって忘れていたが、半日以上口に物を入れていなかったのである。

「さてと」

言葉を零して、窓際に置かれる椅子に座る。
外はもうかなり暗い。

（まずは腹ごしらえからよね）

湯船の中で落ち着いた気持ちのまま、今後の予定を立てる　と、
いってもまずは今にも鳴ってしまいそうなお腹を満足させることが
先決であるが。

（スタンリーとか言ったあの男の人は、プティリスの町で私を見つけたと言っていた）

鳴りそうなお腹を満足させてくれる料理はまだ来ないので、仕方無しに少ない情報を整理することにした。

（でも、ここはザラウェイという町。…常識として、助けた人を違う町まで運ぶもの？どんなところだって、警察に似た機関はあると思うのよね）

喋りもせず窓の外を眺める由岐の姿は傍目から見たらひとつの絵のようだった。

きつと由岐を見ている人物がいたとしたら、彼女を見てうつとりとため息を零したことだろう。

（プティリスとザラウェイがどれくらい離れているのかは分からないけど、それを教えてくれる人は今のところいない…）

由岐の脳内情報整理は進む。

（周りの人が教えてくれないのなら、自分で情報を得るしかない）

結論は出た。

由岐は心を決める。

コンコン

ちょうどいいタイミングで扉を叩く音が聞こえた。

「はい」

「失礼致します。お食事をお持ちしました」

由岐の返事が聞こえると同時に部屋に入ってきたのは先ほどの侍女。身体の前には食事の乗ったワゴンがあった。

「テーブルに並べてもよろしいですか？」

「お願いします」

テーブル横までワゴンを押して止まる。

テーブルの上にさっと白いテーブルクロスが広がる。

その上に次々に色とりどりの料理が置かれる。

そつとお腹が鳴らないように手でお腹を押さえながら、何食わぬ顔で待つ。

「それではお食事が終わったところに参ります」

「ありがとうございます」

一礼して部屋を出て行く侍女をそのまま送り出してまたひとつ息をつく。

食事している間、側についてられたらどうしようと思っていたので、由岐はほっとしたのである。

ほっとしたのも束の間、また扉を叩く音がした。

食事が出されてまだ数分。

侍女が来るには早すぎる。

由岐は首をかしげながら返事をした。

返事を返した後、扉を開けて入ってきたのは執事と呼ぶにふさわしい装いのおじいさんだった。

「お食事中に失礼致します」

「！…いえ」

深々と頭を下げる男に由岐は慌てて椅子から立ち上がろうとするが、男に視線で止められる。

「わたくしスタンリー様に仕える執事のセイドと申します」

（やっぱりセバスチャンとかいう名ではないのね…）

名乗りを聞きながらどうでもいいことを思い浮かべる。

「身体の調子はいかがでございますか？」

「は、はい。これといって気持ち悪いとかどこかが痛むということもありません」

「それはよろしゅうございました」

口元に笑みを刻む。

スタンリーの執事にしては品のいい人だと失礼なことを思う。

しかし、執事 セイドがこの部屋を訪れた理由が分からなかった。

「それで…何の御用ですか？」

単刀直入に聞く。

はつきりいってお腹が限界だ。

まだ少ししか口にしていない。

いや、少しお腹に入れたせいで余計にお腹が不満を漏らしているような気さえする。

「スタンリー様のことなのですが」

「はい」

「どう思われますか？」

何を聞かれているのか少々…全然分からなかった。

しかし、聞かれたのに答えないわけにもいかず、口を開く。

「倒れていた私を助けてくださった上に、こうして休む場所まで用意してくださって、お優しい方だと思います」

（倒れていたのを助けてくれたことには感謝してもいいと思うけど、連れがいるかもしれないのに、違う町まで連れてくるなんてちょっと常識がない人だと思います）

「その後も気遣ってくださいまして、お話やらお風呂に食事など…至れり尽くせりで、申し訳ないです」

（無駄に美辞麗句を並べ立てて、今後どうするかの話もしてくれないといういか…。お風呂と食事に関してはともありがたいと思うけど、タダほど高いものは無いって言うし、この後どうなるのか？）
（とても心配です）

心の声と口から出る言葉はどうしても違う。

言っていいことと悪いことってあるよね？と微笑みに全てを隠した。

「そうでございますか。…お聞きづらいことなのですが、外見적으로는？」

「は？…はいっ！… 貴公子のような方です…ね？」

（整った顔をしているとは思っけど、どこぞのお金にものをいわせた感じの典型的なお坊ちゃんって感じですよ…）

なかなか心の中は手厳しい。

そろそろ引きつってしまいそうな口の端を気にしながら、由岐は答える。

くう

「！」

お腹がとうとう不満の声を上げてしまった。

恥ずかしくなって俯いてしまう。

「おお！これは大変お邪魔をしてしまったようです。申し訳ございません」

「い、いえ」

申し訳なさそうな声にもう部屋を退室してくれるのかと思いきや、セイドはなかなか立ち去らない。

ソロソロと顔を上げると、由岐をじっと見る視線とぶつかってしまった。

「あの？」

「…失礼ですが、お年は？」

「この前16になりました」

（こんな状態で聞くことなの？）

「そうですか…スタンリー様は御年21になられるのです」

「はあ…」

（それぐらいでしょうね…とつか、それがどうしたのかしら？？）

「ちょうどよいくらいだと思いますか？」

「？そ、そうですね」

わけが分からないながらも、強い視線と共に返事を促されて、意味も分からず返事をする。

すると、由岐の返事に満足したのか、とてもよい笑顔をセイドが顔に浮かべた。

「お食事の途中にかなり長居してしまいました。わたくしはこれにて失礼させていただきます。今日はごゆっくりこの部屋でお休みくださいませ」

「ありがとうございます。お言葉に甘えまして、お部屋を使わせていただきます」

また深々と礼をして、セイドがやっと退出していく。

十分な時間が経ってから、由岐は盛大なため息をついた。

「本当にわけが分からないわ」

結構な時間が経ってしまっで、冷えてしまった食事を前にもう一度ため息をつくのだった。

第12話 意見の相違は多々あることで…（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第13話 一歩進んで停滞中（前書き）

活動報告を更新前に書くようにしました。
更新が不定期になりそう予感がするので、
よければ参考にしていた
だけだと思います。

第13話 一步進んで停滞中

トントントントントン…

「……」

トントントントントン…

「……」

トントントントントン…

「……」

部屋にある唯一ひとつのテーブルを人差し指で叩く音が聞こえる。規則正しく、一寸の乱れも無い。

部屋の中で聞こえるのはただそれだけだった。音の発信源は、フェイである。

ローはそれを一步…4、5歩離れた場所で聞いていた。もちろん背中にも大量の冷や汗をかきながら。

ローがこの部屋を出てすでに5刻ほどが経つ。待てど暮らせどローからは連絡がない。

いや、1度連絡はあった。

フェイたちが現在滞在している町 プティリスを出発する時に。

正確に言えば、宿を出て半刻経たないうちに準備が出来たとの連絡があり、転移陣の発動。

転移陣にてリーをアルデンへ送ってから、4刻半ほどが経っているのであった。

目的の場所には、とつくの昔に到着しているはずだった。しかし、リーからの返事はまだ無い。

トントントントントン…

終わることなく音は部屋の中に響く。

ローがとうとう我慢できなくなって口を開く。

「…フェイ様、テーブルを叩くのをおやめください。行儀が悪いかと…」

トントントン……

テーブルを叩く音が止まる。

「ロー」

「はっ…い！」

1オクターブ低い声に、ローの声がひっくり返りそうになる。

「今度は誰の仕業だと思う？」

「は！…はい？」

「リーン兄上か？」

「え…ええと」

「それともレンファ姉上か？」

「さ、さあ…」

「セイか？」

「あのっ」

「もしや…ルイなのか？」

「フェイ様っ！」

先ほどまでの無言が嘘のように言葉がフェイの口から流れ出す。
ローは答えにもならない声を出すだけでフェイの疑問に答えられない。
い。

だが、フェイは別にローの答えなど期待していなかった。

そんなフェイにローが悲鳴のような声で遮る。

フェイはハッと目をしばたいて、口を閉じる。

「お、落ち着いてください」

「悪かった」

心なしか、しょんぼりと肩を落とすフェイに、ローは苦笑した。

「もうこんな時間です。食事にしましょう。少々お待ちください」

ひと声かけて、ローは部屋を出る。

普通宿屋というものは、1階に食堂がある。

大抵は、宿泊客のためだけじゃなく、泊りじゃない客もご飯が食べられるようになってる。

いわばお食事所だ。

リーが宿屋を出たときにはまだ明るかった空も日が沈み、暗くなっていた。

連なるように並ぶ店の明かりが通りを照らす時間。

ローが1階に下りると、案の定食堂は大変賑わっていた。階段から下りてきたローを年若い女が目ざとく見つけて、近寄ってくる。

「ローさん、夕食ですか？」

「ええ、そうなんです。申し訳ないのですが、今日は部屋のほうで食事を取らせていただきたいのですが」

口元に笑みを湛えて丁寧に喋るローに、女は頬を染めた。

この宿屋の名前は『駒鳥亭』

宿屋のランクとしては中の上ぐらいである。

駒鳥亭は、プリティスに来た時に必ず使う宿屋で、ローたちは常連といわれるぐらいには利用している。

なので、女とも顔見知りだ。

「分かりました。出来たらすぐにお持ちします！」

先ほどよりも弾んだ声で返事が返ってくる。

ローはちよっと困ったように、口を開く。

「今の時間帯はとてもお忙しいのに、そこまでして頂くわけにはいきません。自分で運びますので」

「そんなっ！ローさんにそんなことさせられませんよ！」

女は必死になって言い募ろうとしたが、無常にも厨房から声がかかる。

「ローラ！2番テーブル！」

「！は、はい！！！」

厨房からの怒鳴り声に慌てて返事をする女。

「それでは出来上がるのをそこに座って待っていますので、お願いします」

「…分かりました。じゃあちよつと待っててくださいね！すぐに用意してくれるように言っておきます」

「ありがとうございます」

女 ローラはまだ何か言いたそうにしていたが、ローは気付かず、端っこの空いた席に座った。

ローラはたっぷりとため息を零して厨房に移動していった。

「フエイ様、お待たせしました」

ローラのおかげでそんなに待たずして食事を用意してもらったことが

出来た。

ローはお盆を持って部屋に戻ってくる。

部屋の中では相変わらず窓の外の景色を見ているフェイの姿があった。

「……」

「まずは食事にしてください」

そつとテーブルの上に食事ののったお盆を置く。

これがリーだったらドンと置かれて、食器がこすれる音が発生したことだろう。

ローの言葉と共に部屋に視線を戻したフェイ。

「お前も一緒に食べろよ」

「もちろんです。俺もお腹が空きました」

2人は食事に取り掛かる。

「……」

カチャカチャ…

食器のぶつかる音が部屋の中の唯一の音だった。

2人は無言で食事を進める。

しかし、そんな無言を破ったのはフェイだった。

「今後のことだが…」

「はい」

「選択肢は3つ。ひとつめはリーを置いてあいつを捜しに行く。ふたつめはリーをお前が連れ戻しに行く。ちなみにオレは単体で、あ

いつの居場所を捜す。みつめはお前がここに待機してリーを待ち、オレがあいつを捜しに行く…どれにする？」

頭痛がするような気がして、ローは頭に手をやった。

「聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「それは冗談ですか？」

「？こんな冗談など言わないが…何か問題があるか？」

「…問題大あります」

テーブルに何ものつてなかったら突っ伏していた。それ程にフェイの発言はいただけなかった。

「ロー？」

「…」

「ロー。返事をしろ」

「…はい」

「オレは少しでも早くあいつを捜しに行きたい。分かるか？」

「はい…」

「十中八九、リーを足止めしているのはあいつらの中の1人だ。いや、下手したら犯人は複数かもしれない」

苦渋に満ちた顔でフェイが喋る。

「…」

「あいつらに足止めを食らっているのなら、リーでも絶対今日中には帰ってこられない。断言できる」

「…」

「それが分かっている、ここでただ待つことは出来ない。…オレは時間を無駄にしたくないんだ」

「フエイ様…」

フエイが眉根を寄せて喋る。

「分かってくれるな、ロー？」

「許可できません。…気持ちとは分かりますが」

「ローの鬼っ！」

己を見てキラキラとした期待いっぱい目で問いかけられたが、ローは一言の元に断った。

すると、同情を引くような体でいたフエイが一転して怒りに燃えた目で罵る。

それに答えず、ローはジッとフエイを見つめる。

「フエイ様」

「なんだっ」

「一度、フエイ様も戻られてみては…」

「馬鹿野郎！一度でも戻ってみろ、当分外に出れるわけ無いだろうがっ！！」

「ですが…」

「そんなに戻りたいなら送ってやるぞ」

怒りに満ちた目でローを睨み、手を前にかざす。

その途端、あたり一面を魔力が漂う。

それも少々ではない魔力が。

ギョッと目を見開き、慌ててローが立ち上がる。

「ま、ままま待ってください！すいません！！軽率な発言でしたっ

！もう戻れなんて言いません！？」

身体の前で大きく手を振りながら必死に言い募るロー。

「本当に？」

手を下ろさぬまま、フェイが問う。

「わが名に誓って！」

「ふんっ」

力強くローが答えると、フェイが手を下ろす。
部屋一面に充満してた魔力が消える。

ドサッ

力が抜けて、椅子に腰を下ろす。

「……今後の行動ですが、やはり1日は様子を見て頂けませんか？」
「……」

恐る恐る提案する。

フェイは無言。

「1日待ってもリーから何も連絡が無ければ、フェイ様の命令どおりに行動します」

「……」

「リーを待つ間に、俺は明日行動できるように魔力を少しでも回復させてきます」

「……」

「もしリーが帰ってこなければ…いえ、リーから連絡が来て帰ってきたとしても、最悪、魔力を回復できないかもしれませんので、魔力を少しでも回復させる時間を頂きたいと思います」

ローの言葉に、フェイがピクリと身動きする。

「あいつらがオレの指輪に移した魔力を使っていると？」

「はい…真に遺憾ではありますが、その可能性は高いかと」
「確かにな…」

腕を抱え込んで考え込むフェイを見て、こっそり息をつく。
嵐は去ったようだった。

「犯人はセイ…か？」

「それはなんとも。…リン様もレンファ様も可能性が」

言いにくそうに付け足す。

「足止めにはルイも関わってる可能性があるな」

「ルイリーラン様がですか？」

「そうだ。多分、リーを足止めしてお前が帰ってくるのを待っているのだろう」

「俺を…ですか？」

訳が分からず首をかしげるローに、フェイはこれ見よがしにため息をついた。

「他人の好意に鈍感な奴め」

「フェイ様？」

「なんでもない」

もう全てが面倒くさくなって、フェイは椅子に座って行儀悪く足を投げ出す。

「兄も姉も弟も妹もオレの邪魔ばかりしやがって…今度潰す」

フェイの口から物騒な言葉が飛び出す。

ローは青ざめて口を閉じたり開いたり。

「ロー」

「は、はい」

「明日の朝まで待つ。それまでに出来るだけ魔力を回復させる」

「はっ！」

フェイは言いたいことだけ言うと、足を投げ出したまま、目を閉じたのだった。

第13話 一歩進んで停滞中（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第14話 行動あるのみ（前書き）

またまた評価してくださった方たちがいました。

ありがとうございます！

更新がままならなかったりしますが、きりのいいところまでいけるよう頑張ります！！

第14話 行動あるのみ

「ごちそうさまでした」

運ばれてきたものを全て平らげて、手を合わせる。
由岐は満足だった。

「食後の一杯に緑茶が飲めたら完璧だわ」

…満足にはちょっと足りないものがあつたらしい。
そしてちよつとお婆ちゃんくさい。

コンコン

「失礼致します。食器を下げさせていただいてよろしいですか？」

頃合を計っていたのか、侍女が食器を片付けにやってきた。

「お願いします」

「紅茶はいかがでしょうか？」

由岐の言葉が聞こえていたのではないかと疑いたくなるほどにタイミングよくお茶を勧められた。
お茶はお茶でも紅茶であつたが。

「ありがとうございます！」

飲めるのならこの際紅茶でもいいと、にっこり笑う。

綺麗に片付いたテーブルに繊細な茶器に注がれた紅茶が置かれる。

「では、失礼致します。何か御用がありましたら、そこにあるベルを鳴らし手ください。参りますので」

「ありがとうございます」

侍女は部屋を出て行く。

紅茶の香りを楽しみながら、食後の一杯を楽しむ。

「…おいしい」

椅子に寄りかかって力を抜く。

そのまま眠りに誘われそうになる。

身体はなんだかんだいって疲れているらしい。

（これといって動いた覚えは無いんだけど…精神的に疲れてるってことよね）

瞼を閉じたことで、一層重くなったような身体に渴を入れる。

傾きかけていた茶器をテーブルに戻す。

椅子から立ち上がり、上に腕を伸ばした。

「う~~~~~ん」

伸び上がった後は少々ひねるように横に腕を伸ばす。

ゆっくりと身体の硬くなった場所を解きつつ、身体の色んな部位を

伸ばしていった。

「おしまいっ」

伸ばしていた腕を定位置に下ろし、瞼を開ける。
先ほどの疲れが少しではあるが、消える。

「よし、行動を開始しますか」

言葉と共に出入り口である扉に近づく。
慎重な足取りで。

「……」

扉に耳を寄せて廊下の気配を探る。

普通的女子高生は気配なんて探らない。

というか、探れない。

探る必要なんて無いから。

しかし、由岐は今まで願ってもいないのに、問題ごとに巻き込まれてきた。

ストーカー事件しかり、誘拐騒ぎしかり。

由岐は望む望まぬを別にして、問題を自分で解決できるスキルを習得しなければいけなかった。

由岐の母と父は由岐のために護身術を習わせていたのである。

（いない）

扉の外には人の気配がなかった。
そつと扉を開く。

探ったとおりに、見える範囲に人の姿は見えなかった。
左右を注意深く見て、少しだけ開けた扉の隙間から廊下に抜け出す。
位置を確認し憶えつつ、移動する。
目的地は情報が得られる場所だ。

（情報収集と言えば、侍女とか従僕？とか集まってる場所がよさそうよね…）

人は集まれば口が開く。

今日の料理のこととか、使える主人の身の回りのこと。

そして 今日あった出来事など。

今日あった出来事 それは由岐がこの部屋に運ばれたことが一番の出来事に違いない。
由岐はそうにらんだ。

何回か角を曲がり、下におりていく。

思った以上に大きな屋敷に、そろそろ道程が怪しくなってきた、由岐は冷や汗をかく。

（これ以上は…！）

これ以上は迷ってしまうと引き返そうとした瞬間、由岐が来た道の方から人の歩く音が聞こえてきた。
それも1人ではなく複数だ。

咄嗟に辺りを見回し、手近の豪華なカーテンの後ろに身を隠す。
間一髪、見つからずにすんだ。

そんな由岐を尻目に、廊下を歩いてきたのは、侍女2人に従僕が1

人の合計3人だった。

何か運んでいる最中なのか、それぞれに腕に持ち通り過ぎる。

由岐は早く立ち去ってくれるように願っていたのだが、話はそう上手くいかなかった。

由岐が隠れているカーテンより少し進んだところで、侍女の1人が運んでいたもののうちの1つを落としたことで、3人の歩みが止まってしまったのだ。

使用人の部屋など屋敷の主人などが立ち入らないスペースに知らずうちに入り込んでいたようで、侍女たちはその場で立ち話を始めてしまったのだった。

（ちよつと）

焦る由岐。

しかし、そんな由岐の悪運か、彼女が知りたいと思っていた情報が手に入ることになる。

望んだ情報以上の、情報だったかもしれない。

「さつき、執事長見た？」

「え？見てないわ。何かあったの？」

「ああ！オレ見た！」

「喜色満面の笑み」

「ええ？！嘘っ！最近すごい調子悪そうだったじゃない」

「そうなのっ！昼までは最近ずーっと消えなかった眉間の皺が、急にスタンリー様に呼ばれて屋敷を出て行って帰ってきた時にはもう綺麗さっぱりなくなっていたのよ」

「何で？」

「そりゃあ、執事長が帰ってきたときに一緒に運び込まれたお嬢様がいたじゃないか。あのお嬢様が原因だろ」

「ああ！あの奇妙な服を着たお嬢様」

「そうなのよ！スタンリー様もすごい機嫌がよくて、マーサが今日ちよつと失敗しちゃったらしいんだけど、全然怒られなかった」

「嘘~~~~っ!!」

「そりゃすげえな」

「でしょ！あのお嬢様のお世話はエリザが全部してるからどんな方が分からないんだけど、運ばれてきたときに見たんだけど、それはもう綺麗なお嬢様だったの！」

「ええ！お嬢様の顔見たのかよ。いいな」

「で、他の子から聞いた情報なんだけど…聞いて驚かないでよ」

「何？」

「何だよ。早く喋れよ」

「しー！！大きな声出さないでよ！」

最初は小さな声で話していた3人組だったが、話しているうちに興奮してきたのか、声がかなり大きくなっていった。

侍女の1人が自分を置いというて嗜める。

他の2人も言われて気付いたのか、ハッと声を潜めた。

「で？」

「なんなの？」

辺りを見回して、誰もいないことを確認しておしゃべりは続く。

「さつき執事長がそのお嬢様のところに行って、帰ってきたところを見かけたらしいの」

「へえ」

「それで？」

「そ・れ・で、あの執事長が弾むような足取りで廊下を歩いていたみたい」

「ええ！」

「驚くのはこれからよ！で、執事長がこう零していたんだって…」

「…」

「…」

聞き役になった2人がじつと次の言葉を待つ。

「『スタンリー様にもやつと春が来た』って…」

「「！？」」

3人の話を聞いたのはそこまだった。

由岐は頭の中が真っ白になる。

気付かないうちに噂話に話を咲かせていた3人は姿を消していた。由岐もどう戻ったのか覚えてなかったが、部屋に戻ってきていた。幸いなことに、誰にも見咎められずに。

「春？」

ポツリと零す。

理解できなかった。

いや、理解したくなかった。

「春…春の季節なのかしら？春は桜が綺麗よね…」

決定的な言葉を自分で言いたくなくて、どうでもいいことを口にする

る。

由岐もあそこまで聞いて分からないほど鈍くも無い。しかし否定してしまいたかった。

けれども、それで物事がよい方向に進むはずも無い。

「春が来たって…あの『春』よねえ…」

「…昼間に連れて帰ってこられたのって私…よねえ…」

「……執事長って多分…セイドさんだよ…ね」

どんどん眉尻が下がっていく。

ぼうつとなった一瞬後、ブンブンと頭を振る。

何かを想像しそうになって、慌ててかき消したのだ。

「無理」

窓辺に寄って、空を見る。

空にはたくさんの星が輝いており、由岐の住む世界よりも綺麗だった。

でも心は全然晴れない。

「絶対無理っ！」

髪の毛に指を差込み、ぐしゃぐしゃとかき回す。
プチパニックだ。

由岐は心の命じるままに叫んだ。

「何もかも無理……………!!」

十数分後。

由岐は直ちにこの屋敷を出るために、部屋の中を物色していた。どうしてもスタンリーとの未来など描けるはずもなく、屋敷から逃亡することを決める。

幸いにも荷物という荷物も無く、身一つでいい。

由岐はそう思いながらも、何か役に立つものはないかと探していたのだ。

下手に目立つ物を取っていつてしまったら追いかけられる可能性があると思う、上に羽織る程度のものしか手に入らなかったが。

「よしっ」

気合を入れてベランダに出る。

由岐がいた部屋は階にして3階ではあったが、降りられないことはない判断された。

豪華な屋敷なので、ところどころに取っ掛かりがある。

下まで行くためのルートを思い描きながら、手すりにギュッと捕まる。

その時だ。

金木犀のような香りが由岐を包み込む。

「え?...いい匂い...!!」

匂いに動きを止めて集中すること数秒、急に身体力が抜けていく

のが分かった。

慌てて手すりを掴もうとしたが、掴む力が足りず空を掴む。
ゆっくりと傾いていく体を意識したのを最後に、由岐の意識は消えていった。

第14話 行動あるのみ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第15話 従者の心得として（前書き）

評価を下さった方、ありがとうございます！

拙い文章ではありますが、読んでくださる方がいるかぎり、頑張る所存です。

よろしく願います。

第15話 従者の心得として

「怒って飛び出してなければいいのだが…」

早朝と言ってよい時間帯。

教会への道のりを辿りながら、思いつめた表情をした女が1人歩いていた。

歩いているといっても、速度はかなり速い。

しかし、早朝であるため、これといって視線を集めることも無かった。

女は更に速度を上げようと走り出そうとしたが、声を掛けられて止まる事を余儀なくされた。

ギツと声のしたほうを睨むように振り向いた。

さながら悪鬼のように。

「…リー！　っ！…!?」

声をかけた男は女　リーの視線の鋭さに一瞬にして固まった。

ザツと血の気が下がる音が聞こえたような気がした。

「ウィリアム」

「や、やあ…」

名前を呼ばれて男　ウィリアムはぎこちなく挨拶をする。

そんな挨拶を無視してリーが口を開く。

「何か用か？」

「いや、ただ」

「見かけたから声をかけただけとか言ったら潰す」

「ギエー!!？」

男はギョツと目を見開き、ここまで早く動けるのかというほどの速度で3メートルほどその場から離れた。

「…で？」

「は、はい…」

目に見えてうるたえるウィリアムに、リーは容赦なく答えを促す。ウィリアムはうるたえるだけで口をパクパク開けるだけだった。

「潰す…!!」

ゆらりと黒いオーラを放出しながらリーはウィリアムに近づこうとしたが、ぴたつと止まる。

怒りに燃えていた瞳が思案気に揺れる。

「…」

「リ、リリリリーさんっ!???」

どもりつつも黒いオーラが唐突に消えたので、なんとか声をかけることにウィリアムは成功する。

名前を呼ばれてもなお、リーはジツとウィリアムを見て無言で佇んでいた。

蛇に睨まれたカエルのようにウィリアムも動けない。

しかし、それも唐突に終わりを告げる。

にーっこり

先ほどのまでは幻だったといわんばかりに、優美な笑顔を向けられたのだ。

「ここでお前に会えてよかった」

リーの口から出た言葉も先ほどの態度からは180度くらい違ったものだった。

笑顔のまま近づいてくるリーに、ウィリアムはやっぱり動けなかった。

そんなウィリアムの腕に自分の腕を絡ませて、動くように促す。意のままに動くウィリアムを大通りから横にそれた小道に移動させる。

「リ、リー？」

「ちよつと協力しろ」

「は？え？…ええっ！！」

言葉と共にウィリアムの身体を引き寄せる。

リーは、ウィリアムの背中に腕を回した。

微かに見えるふたつの影がひとつになる。

ウィリアムは何が起こったのか分からず、硬直する。

自分の身体に押し付けられた柔らかいようなしなやかなような感触を感じながら。

「ほら、手を回せ」

ややぞんざいに声をかけて、手を背中に回させる。

自分からもぎゅうつと身体を密着させながらリーはウィリアムの背中に回した右手の中指に付けた指輪に意識を集中する。

(…本当に半日でどうやったらあれだけの魔力を使ってしまうのか聞きたいものだ)

中指に付けている指輪は、例のフェイの指輪だった。

中に移されたとされた魔力は現在5分の1も残されていなかったが。

リーはフェイの命令どおりにまっすぐにフェイの指輪のある部屋に向かった。

しかしそこで待っていたのは指輪だけではなかった。

男1人に、少年が1人。

そして部屋を埋め尽くすかのように茨が存在していた。

花のひとつも無く、ただただ茨が部屋のいたるところに巻きついていたのである。

ある程度は予想していたつもりだったが、部屋の状態は予想以上だった。

動揺しながらも、必死に顔に出ないように取り繕い、部屋に居た男たちに視線を向けると、男はにっこりとエレガントに微笑んでおり、少年は泣きそうな顔をしていた。

「やあ！リー。聞いてくれ」

悪びれもせず、話し出した男に、ビクツと縮こまった少年を思い出す。

とても見慣れた……フェイの兄弟たちだった。

記憶を回想しそうになったリーを背中に回った腕が止める。

ただ置かれていただけだった腕に力がこもったのだ。

「ウィリアム？」

「……」

声を掛けてみるが、ウィリアムは無言。

ますます力を入れられたが、リーにとって好都合だったので、そのまま放置することにした。

（この時間にここら辺を歩いているということは、昨日が夜番だったということだ）

昨日のことなどいくらでも、どこでも思い出すことは出来る。

今思い出さなきゃいけないことでもないと思い、リーはウィリアムについて考える。

（ということは、帰宅途中ということで、魔力を搾り取ってもさほど支障はないはず…）

実はリーは今、ウィリアムの魔力を指輪に移す作業をしていた。

本人の意思を無視して。

ここは、魔法・異能・召還ありの世界。

この世界は接触によって力を増幅・貯蓄して魔法を使う。

だから、この世界での最強とは魔力を多く貯蓄できる者とされる。

接触によって魔力を人から貰うことが出来る世界だからこそ、リーは今こんな状態だったりする。

リーは減ってしまった魔力を少しでも補おうと、ウィリアムの魔力を貰い分け、貯蓄していた。

接触：抱きつくことによって。

魔力の受け渡しによって貯蓄できるといっても、通常、勝手気ままに魔力を人から奪うことなど容易ではない。

強引に貰い受けるためには、上級の技とちょっとしたコツが必要だった。

が、リーはこれといってそんな技を使ったわけでも、ちょっとしたコツを使ったわけでもない。

答えは簡単。

フェイの指輪だ。

指輪はフェイの手作りで、簡単に魔力を移行することが出来る特性を持つ。

手作りといっても、この指輪に関していえば偶然の産物であるが。

（ウィリアムはまあまあ貯蓄力を誇るから助かるわ。でもそろそろ…）

しみじみと、ここでウィリアムに会えたことを素直に感謝する。

「なんか…力が抜ける？」

無言でリーを抱きしめていたウィリアムが言葉を零す。

リーは頃合を見る。

自分自身の言葉に何かを悟ったのか、ウィリアムが慌ててリーを見る。

離そうとした身体は、リーによって阻まれてしまったが。

「本当にここであなたに会えてよかったわ」

人の悪い笑みがリーの顔に上る。

その笑みは妖艶と言っても差し支えなかった。

今の状況的に、そんな場合ではないと思いながらもウィリアムの頬が朱で染まる。

「感謝してるわ、ウィリアム」

チュッ

伸び上がって、ウィリアムの頬にキスをする。

驚きを表現することも無く、ウィリアムは意識を手放してしまった。

ずるずるずる…

抱きしめていた腕が力なく背から落ち、体が支えをなくして倒れていく。

リーはそんな身体を受け止め、出来るだけ丁重に路地の壁に寄りかかるように下ろした。

意識を失ったウィリアムをほんの一寸見下ろした後、小道から抜け出す。

（守護の印は残してきたから起きるまで無事でしょ）

大通りに戻ってまた速い速度で歩きながら、リーは思う。

最後のキスが実は守護の印。

守護の印とは、その者が他者に脅かされないための魔法で、リーのよく使う魔法の1つでもある。

限界まで搾り取ってそのまま放置してきたのだ、それぐらいのアフターフォローくらいリーでもする。

「…全く、主のご兄弟は手間がかかるわ」

指輪に内在していた魔力は、部屋で出会った兄弟によって使われてしまった。

今にも泣き出してしまいそうな主の弟君とあの茨が思い出される。ため息をひとつ零し、指輪を見る。

指輪の表面には血のように赤い石がはめ込まれており、それを囲むようにして複雑怪奇な文字が刻み込まれていた。

石がきらりと輝く。

そっとその表面を撫でて、リーは思う。

（従者はどんな時でも最善を尽くさないかね。…あと何人が通りかからないかしら？）

主のためならちょっと？くらい酷いことをしても許されるとリーは思っていた。

少々物騒なことを考えながらリーは教会に急ぐ。

…この日、何人の男たちが路地裏で倒れていたかは秘密である。

第15話 従者の心得として（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

楽しんでいただけたら、幸いです。

リーとローはとーってもフエイが大好きなのです。

たまに行き過ぎなときがあるかと思いますが、暖かく 緩い目？ で
見守っていただけると助かります。

第16話 主と従者は再会する

宿屋の食堂にて朝食を食べているとき、リーは帰ってきた。

ご飯を食べているフェイを見て、リーはほっとした顔をのぞかせる。その表情を見てフェイは、ひょいと眉を上げてフォークを下ろす。フェイの動作に、ローもやっとリーの帰還に気付いたようだった。

「リー」

「遅くなりました」

「本当にな」

「…」

「…」

リーの言葉に慚然とした表情でフェイが答える。

「主っ！可愛いですっ！！」

ぶすくれる姿が何かのつばにヒットしたのか、リーがガバツと抱きつく。

それに慌てたのはローで、フェイは無言。抱きつかれるままだ。

「リー！」

「もうちょっと！！」

「…公共施設だぞ」

「ローはうるさいな…」

仕方無しにフェイからしぶしぶ体を離し、空いた席に座る。周りが注目していたが、全ての視線を無視する。

少しすると、みな自分の食事に戻っていった。

ローが深々とため息を吐く。

リーはちゃっかりローのご飯を横から奪い取り、食べ始める。それを見ていたのか、ローラがもう一食分持つてあらわれた。

「リーさんてば相変わらずね」

クスクス笑って、テーブルに持ってきた食事をのせる。

ローが弱弱い笑顔で礼を言くと、頬を染めてローラは去っていった。

「罪つくりなやつ」

「はい？」

「言ってもこいつには分かりませんよ、主」

旺盛な食欲を見せながらリーが述べる。

肩をすくめてそれに同意してフェイも食事を再開した。

取り残されるのはローだ。

疑問符が頭の周りを回っていたが、答えがもらえないことは分かっていたので、疑問を脇に捨ててローラが持ってきてくれた食事に手をつけた。

カチャカチャ

少しの間、フェイたちのテーブルでは食べる音や食器などが擦れた

音がその場を占拠していた。

「誰に会った」

唐突にフェイが喋りだす。

「リーン様とセフォイド様にお会いしました」

「…そうか」

「お部屋がとっても斬新に飾られていましたわ」

「ほう」

「主は茨がお好きですか？」

「…よりによって茨か」

差し支えない程度の会話で昨日の状況を聞く。

自分の部屋が茨によってデコレートされていることを聞いて、げっそりとする。

「前回よりはマシなような気もしますが…」

「何を言っている」

「そうだぞ、ロー」

「見たかぎり普通の茨ではなかった。…早く帰ってくるためにそのまま放置してきてしまったがな」

「仕方がない。帰ってから何とかしよう」

「…」

部屋の窮状を思い浮かべながら、3人とも憂いの視線を宙にやった。その後、黙々と食事を平らげて、部屋に移動する。

フェイが椅子に座ったのを合図に、リーが恭しく指輪を差し出した。指輪を受け取ったフェイは、少し目を見張った。

「魔力が5分の1程度も残ってるじゃないか。珍しいこともあるものだ」

昨夜冷静になつて考えてみれば、指輪に魔力が残ってなくてもおかしくはないと考えていたのだ。

しかし、それはいい意味で裏切られていた。

喜びも束の間、リーの台詞に肩を落とす。

「いえ、魔力は5分の1も残っておりませんでした。ここにくる道中で集めてまいりました」

リーの言葉を訳すなら、「そこらへんにいた人間から奪い取りました」ということだ。

「…ご苦労だった」

リーの道中を思つて涙が出そうになる。

リーにはではない。

リーに会つてしまった不幸な男たちに対してだ。

リーは子ども女には無体なことはいらないから。

「無いよりはマシだな… 2人とも手を出せ」

指輪を右の親指に装着して、左手と共に前に突き出す。

その手をローとリーが各々片方ずつ重ね合わせる。

フェイの右の親指にはめられた指輪についた赤い石が輝きだす。

それと共にフェイの手のひらに重ねたローとリーの手にも絡みつくように赤い粒子が漂った。

次々とあらわれる赤い粒子は、2人の手に吸い込まれるように消え、

最後の1粒まで2人の手の中に消えたところで終わりを告げた。

「どうだ？」

「はい、十分です。半分以上は魔力が回復してます」

「こちらもです」

お互いに手をワキワキと閉じたり開いたりしながら、2人が状態を告げる。

「ローが、昨日少しでも多くと魔力を回復させていたからな…半分以上回復したなら上々だ」

満足そうにフェイが言う。

リーが驚いたようにローを見る。

「ローが魔力を回復させに行ったのか?!」

貯蓄力がこの世界による魔法の源のあり方とすると、それに伴い魔力を人に分け与えるのを生業とする組織が存在していたりする。その組織は大きいものから小さいものまで。

魔力さえあれば誰でも出来る簡単な商売だったりするのである。

リーの驚いたといわんばかりの視線を真っ向から受けて、ローは居心地悪く視線を逃す。

「昨日は楽しんできたのか？」

「リーッ!! 慎みつてものがお前には無いのかっ!!?というか、魔力を回復させるための場所を花街に絞るのをやめろっ!!!!」

悲鳴のように上がるローの言葉に、リーとフェイが揃って耳を押さえた。

接触によつて魔力を受け渡すことが出来るこの世界。

何処の社会でもひっそりと存在する夜の花。

その夜の花も本来の仕事に付け合わすように、魔力を回復させることを生業としている者がたくさんいた。

しかし、だからと言って全ての人間が夜の花とされる者たちがいる花街に行つて魔力を回復させるわけではないのだ。

そしてローは堅物だった。

ついでに言つと、人との接触を苦手とする。

「ははっ。分かっているよ。我が半身にそんなことは出来るわけがないって」

「半身言うな」

「別に間違つてないだろう？双子なんだから」

「…」

「で、何処で回復してきたんだ？ローのことだから教会辺りか？」

「…ああ」

「そりゃあ、そんなに回復できないわけだ」

「…」

好き勝手に言われてローは黙り込む。

まだ続けそうなりーをフェイが手で止める。

「それ以上言つてやるな。ローにしたら大変な精神的負担だ」

「まあ…そうですね」

「…」

「結局、その教会でも無駄にべたべたと触られてげっそりとした顔

で帰ってきたんだ。労わってやれ」

「フェイ様っ！」

「わっかりました！ロー！よく頑張ったな！！」

フェイの言葉と共にリーがローに抱きつく。

ローが非難の声を上げるが、助けてくれる者はいない。

何とか引つpegがそうとあれこれ努力したが、離すことが出来ず、諦めたローがいたとかなんとか…。

第16話 主と従者は再会する（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第17話 追跡再開その前に

「報告は以上です」

ローをからかい倒した後、借りている部屋に戻って昨日のことをリ
ーは報告した。

フェイは眉間に皺を寄せて話を聞いていたが、リーが報告し終え
るとねぎらいの言葉をかけた。

「ご苦労だった。やはりリーに行かせて正解だったようだ」

「ありがとうございます、主」

嬉しそうな顔をしたリーを見て頷き、そのまま口を開く。

「…これからのことだが」

「はい」

「どうするのですか？」

「うん…あれを使ってまずあいつの居所を見つけ出す」

フェイの視線を追って、2人の視線が動く。

2人が視覚に捕らえたのは、花の上にひっそりと存在する蝶の姿だ
った。

蝶と言っても本物の蝶ではない。

廊下からテラスに続く道に残っていた、魔力の残滓をフェイが集め

て形にしたものだった。

なので、花に留まったままちらりとも動かない。

フェイが手をスツと動かす。

その途端、動かなかった蝶がふわりと羽を動かし、飛んだ。

フェイのもとへ。

静かにフェイの指先に留まる。

「探索の魔法を使うのですか？」

「ああ」

「…何処で行われる予定ですか？」

それなりの魔力を使うので、宿屋でやるなどもってのほかなのだ。

しかし、昨日ワングレイルという組織に狙われたばかりだ。

下手な場所では身動きが取れなくなってしまう。

リーは尋ねる。

「昨日の草原はどうかと思う」

昨日の草原 それはワングレイルと対峙した場所。

ローとリーの2人が同時に難色を示す。

「私は反対です」

「俺も反対です。昨日の今日で、あんな人気の無い場所に行くのは危なすぎますよ」

「…多分、あの草原が一番あいつの気配が残っているはずなんだ。捜す相手の気配が出来るだけ残っているとこの方が探しやすい」

「！」

「！そ、そうかもしれませんが…」

フェイの言うことにも一理あって、2人は強く反対することが出来なくなる。

そんな2人にフェイが、にやつと笑って言う。

「オレがあいつを捜している間はお前たちが守ってくれるのだろう？」

「「！」」

「当たり前です！」

「全力であなたを守って見せます！」

「だったら心配することなど何も無い 行くぞ」

勢い込んで返事を返してきた2人を満足そうに見やった後、フェイは2人に背中を向けて部屋を出て行く。

それを2人は眩しそうに目を細め、フェイの後を追う。

「主のあんなところが好きだ。ローもそう思うだろう？」

「…ああ。俺たちはフェイ様を信じて後に続けばいい」

「適度に諫めながら？」

「確かにそれもたまに必要なことだな」

「ふふっ」

フェイの背中を追いながら、2人は目を合わせ笑いあう。

後ろの2人が遅れていることにフェイが気付き、立ち止まる。

「オレから離れてどうする。とつと来い」

呆れたような顔をして自分たちを待つフェイに微笑がとまらない。

2人は、離れてしまった距離を急いで埋めるのだった。

草原。

ここであつた出来事は少し前のようにも、かなり前のことのようにも思える。

風に揺れる名も無い草花を見ながら、フェイはそんなことを思おう。

その姿を目に捉えたのは少しの間。

生まれて今まで過ごしてきた時間を思えば、ほんの瞬きをするような時間だ。

しかし、フェイにはとても大切な記憶になっていた。

彼女の居た岩場にそっと近づく。

彼女がいる筈がないことは分かっていたが、どうしてもずかずかとその場に立ち入る気にはなれなかったのだ。

彼女が寝ていた岩場を覗いて、寂寥感を感じる。

分かっていたことだ。
理解していたことだ。

しかし、心はそれを認めたくないと主張する。

キラリ

太陽の光に反射して、何かが光った。
フェイは気になり手を伸ばす。

チャリ…

手が触れて、微かな音がたつ。
手に確かな手ごたえを感じ、持ち上げる。

それは珍しい形をしていたが、手首につける装飾品だとフェイは思った。

色とりどりの石が散りばめられており、その中でも1つだけ大きな球体をした石が装飾品を少し異質に、そしてただの装飾品ではないと思わせた。

フェイがよく見てみると、透明な石の中に、金の筋が入っていることを発見した。

「これは…！」

もつと間近で見てもようと顔を近づけてあることに気付いた。
彼女と同じ気配を放っているのだ。

「あいつのものなの…か？」

口にしなから、確信する。
これは彼女のものだと。

そつと握りこむ。

「やはり…ここに来て正解だな」

口元に笑みが広がる。

「これを渡したら…笑ってくれるだろうか」

始めからあの騒ぎだ。

彼女の寝顔と泣き顔と怒った顔しか見ていない。
自業自得とはいえ、その3つでは納得がいかない。

後ろから賑やかな声が聞こえてくる。

いつの間にかかなり先行してしまっていたらしい。

リーが楽しそうに笑い、その後ろを歩くローは何故か葉っぱがいたるところについていた。

「フェイ様ーっ！そんなにさっさと行かないでくださいよ」

「主のせいにするな、ロー。ボーツと歩いているから縛ってある草に足をとられたりして遅れたんだろうが」

「なんで縛ってある草って分か…　リーお前かつー！」

「ははははっ！」

「笑い事じゃないっ！」

憤慨してリーを追いかけるロー。

笑いながら逃げるリー。

2人の声に今の状況を思い出す。

しかしそれにしたって…。

「オレもあいつ等もどれだけ緊張感がないんだか…」

見つけた戦利品を無くさないようにしっかりと懐に入れる。

未だに追いかけて続ける2人を止めるために、フェイは動き出すのだった。

第17話 追跡再開その前に（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
楽しんでいただけたら、幸いです。

第18話 夢なら覚めて！

雲ひとつ無い空。

窓から差し込む日の光。

全ては素晴らしい1日を予感させる。

（それなのに…）

由岐は思う。

（何でこんなことになってるのよ……っ！！）

由岐はたくさんの侍女に囲まれながら悲鳴を上げる。
否、悲鳴をあげたくてもあげられなくて、心の中で。

ベランダで気を失ってから、気付けば朝になっていた。

そして身体は一切、由岐の思い通りにならなくなっていたのである。
そして今、由岐の身体は由岐の意思に反して侍女たちの言いなりだった。

「こちらがいいのではない？」

1人の侍女が豪華なドレスを掲げる。

「それもいいけど、やはりこれですわ！」

そうすると、他の侍女が違うドレスを前にして主張する。

どのドレスも細部にまで意匠をこらしたもので、とても素晴らしい。
だが、どのドレスも白一色だった。

その意味はつまり……。

「出会って次の日には婚姻を決めるだなんて夢物語のようですね！」

「そんなに急がなくてもと思いますけど、スタンリー様が一刻も早くって仰ったとか」

「素敵ですわ」

「ここまで情熱的にスタンリー様に求婚されたら断れるはずありませんわね」

侍女たちは由岐の前で好き勝手喋りながら装飾品などを出していく。由岐は口元に笑みを浮かべることにしか出来ない。

というか、顔の表情が笑みの形で固まっているのだ。

由岐の本意ではない。

「まあ、急な話ですから、きちんとした式はまた後ほど盛大なものをするとか」

「今回は近隣の方や親しい方だけを呼んで教会での誓いとささやかな宴をするとか」

「執事長が張り切って動いてますもの。絶対今日の式もかなりの人数が来られるに決まっていますわっ！」

「ユーキ様はお幸せ者ですわ」

キャッキヤと笑顔で騒ぐ侍女たちに心の中で罵倒する。

（なら代わってあげるわよっ！！誰が幸せなもんですかっ！スタンリー？あの自分本位まっしぐらの自意識過剰男と誰が結婚したいなんて思うか~~~~~っ！！？）

由岐の罵倒は終わらない。

（というか、駄目でしょ！あの人の服装とかっ！！絶対あんな服を

日常的に着ている人と一緒になりたいなんて思えないわよっ！そもそも私は同意もしてないというか、結婚の申し込みもされてないく
~~~~~！！）

まだまだ続きそうな由岐の罵倒は部屋をノックする音に中断される。

「失礼するよ」

入ってきた人物は、由岐の罵倒を一身に受ける男　スタンリーだった。

侍女たちも先ほどまでの賑わいはなんだったのかといわんばかりに口を閉じて、一列に並んだ。

由岐の側までに至る道を作って。

（道を作らないでっ！というか、近寄らせないでっ！！）

由岐は必死に心の中で言い募るが、残念ながら誰にもその言葉は届かない。

スタンリーが満面の笑みで歩いてくる。

気絶したいくらいだったが、次に起きたときには教会だったということになりかねなくて、意識を放棄することもままならない。

侍女たちが一礼して部屋を出て行く。

（嘘っ！2人にしないでっ！！）

心で必死に願っても侍女たちは一筋の乱れも無い動きで消えていく。無常にも扉が閉まる。

いつきに部屋の中は人口密度を減らした。

スツとスタンリーが椅子に座る由岐の前に膝をつく。

由岐の右手を取り、口を寄せる。



（いや~~~~~!!お母さ~~~~ん!!?）

悲鳴と共にとうとう母に助けの声をあげる。

スタンリーはその姿勢で由岐を見上げる。

「ユーキ、手荒なことをしてすまない」

（許せるか~~~~~!）

「君をプティリスの町で見かけたとき、僕は君に一目惚れしてしまったんだ」

由岐の気持ちを知ってか知らずか、スタンリーは切々と自分の気持ちを述べる。

「これはもう運命だと思ったよ!! だからといって、昨日の今日で婚姻を結ぼうとする僕に君は驚いていることだろう。でも、分かって欲しい! 僕の気持ちをつ!!」

（いや、それは無いでしょ…）

スタンリーの言葉を聞いてパニックになりかけた気持ちが急激に冷める。

スタンリーの言っていることの意味が由岐には分からなかった。

『一目惚れした』

これは分かる。

…分かりたくないが。

『昨日の今日で婚姻』

これはないだろう。

由岐はこうなる前にスタンリーに告白されたわけでも、プロポーズされたわけでもないのだ。

ただ、プティリスで倒れていたところを助けられ、ザラウェイにあるスタンリーの屋敷に運び込まれた。

そして美辞麗句を並べ立てられ、スタンリーの執事なるセイドという男に意味の分からない質問をされた。

どうしても馴染めない……信用できない雰囲気、欲しい情報を調べるために屋敷に仕える者たちの噂話を聞こうと勝手に屋敷内を探索し、聞きたくない話を聞いてしまった。

なので、なにかが起る前に逃げようとしたが、よく分からない手段で意識を奪われて脱走を阻止された。

目が覚めてからは身体がいうことを聞かず、起こしにきた侍女の指示のもとに体が勝手に動き、今に至るわけだった。

要約するとこんなもので、スタンリーが告白してきたなどという出来事は一切入っていない。

他人の口から好意を持っていることを聞かされただけだ。

由岐が自分の中で一連の出来事を整理している間にもスタンリーの懇願は続いていた。

そして言い尽くしたのか、口を閉じる。

その表情はなぜか確信に満ちており、由岐が自分を受け入れるだろうと顔いっぱいに書いてあるかのようなだった。

思いつき拒否がしたい由岐だったが、制限された由岐の表情では

それも適わない。

口には依然笑みが浮かんでいるのだ。

「約束しよう。僕は君をこの国一番の幸せな花嫁にしてみせるよ」

自信満々に言い切ってもう一度手に唇を落とし、立ち上がった。

「僕もそろそろ準備をしてこないといけないから、また後で。君の純白のドレス姿を楽しみにしているよ」

言いたいことだけ言って、スタンリーは出て行った。

(…)

ぽつんと部屋に残される由岐。

しかし、1人の時間もわずかばかりであろう。

その間も由岐の心情に反して口元の笑みは消えない。

身体は一向に由岐の望むように動いてはくれない。

(夢なら覚めてよ…)

そんなはずは無いと分かっているながらも、心の底から由岐はこれが夢であることを願うのであった。

## 第18話 夢なら覚めて！（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
楽しんでいただけたら幸いです。

第19話 探しものは

全ては巡る

悠久のときを

しかし全てのことわりは

紛うことなく

道を示し

ただそこにたゆたう

草地を削るように書かれた円陣。

円の中には複雑な紋様が輪に沿うように刻まれている。

そしてそこに立つは1人の少年。

少年を中心に、光は集まり、纏わりつく。

光は一定の量より増えることは無く、明滅を繰り返す。

少年は瞳を閉じていた。

時折、眉間に皺がよる。

何かを手探るかのように手が空を動く。

少年は探索の魔法の真最中だった。

「苦戦しているな」  
「ああ……」

少し離れたところから周囲を警戒しつつ、リーとローは少年 フェイの様子に深刻な顔になる。

この場所を訪れてからもう2刻ほどが経つ。

当初、探索はすぐにでも終わるものと思われていた。

しかし、簡略化された探索の魔法では目当ての人物は見つけることが出来なかった。

見つけることが出来ない それは、フェイたちの探している人物を隠している人物の側にそれなりの力を持った魔法使いが居ることを示していた。

何度か探索の魔法を試してみたが、一向に見つけることが出来なかった。

そして今に至る。

簡略化された探索の魔法が利かないのであればと、フェイは古から伝わる魔法に切り替えたのだ。

手ずから地面に円陣 魔法陣を書き、長い詠唱にはいる。

簡略化された魔法とは違って、手ごたえはあったのか、フェイが閉じた瞳を開くことは無い。

しかし、それでもそのまま時は無常にも過ぎていつている。

「主の手を煩わせる者などすべてこの世から消え去ってしまえばいいのに」

「をい…物騒な台詞を吐くな」

フェイの様子を見ながらだんだんと鋭さを増す双子の片割れの台詞に、冷たい汗が背中を流れていくのをローは感じる。

「見つけた暁には朝日はもう拝めないようにしてやる」  
「勘弁してくれ」

ローを無視してリーはギリギリと自分の左手を右手で握り締める。  
リーのどす黒いオーラにそっと側を離れようとする。  
しかしそれは失敗に終わる。

ガシッ！

「リ、リー?!」

「ローも手伝ってくれるよな?」

「ぐっ!?!」

につこりと恐ろしいまでの笑みが迫るのにローは血の気が引いていくような気がした。

「忌々しいッ!!」

離れた場所から聞こえたフェイの声に、2人はハッとして視線を戻す。

フェイの瞳は閉じたままだ。

しかし眉間の皺は先ほどよりしっかりと刻まれていた。

声と共に一定の量を保っていた光がいつきに輝きを増す。

「フェイ様っ!」



「主っ!？」

とつさに、2人は叫ぶようにフェイを呼ぶ。

しかしフェイはそんな2人を無視して口を開いた。

「我、リオーレの血を引く者なり。我が誓いは血の誓い……」

フェイの言葉と共に光は粒子となり、フェイの身体を中心に縦横無尽に暴れまわる。

傍から見ると小さな台風のようだった。

さしずめフェイは台風の目と呼ばれる場所に立っていた。

「……我が前を阻むものを排斥せよ!」

言葉が終わると同時に粒子と化した光の粒は魔法陣に吸い込まれるように消える。

反対に、魔法陣が強い光を発する。

気付けば最初の魔法陣から形がだいぶ変化していた。

「無茶苦茶だ……」

「こんなの主くらいじゃないわね……」

変化した魔法陣の上に立ち、光を下から浴びながらフェイは探索に戻ったようだった。

リーは毒気が抜けたのか、どす黒いオーラが消えていた。

「ねえ……」

「……ん」

「これはもう私が手を下すところ無いわよね」

「やめてやれ…そんなことしたら死ぬしかなくなるだろう」  
「だわね…」

フェイは最後に『排斥せよ』と言った。  
フェイの邪魔をした魔法使いの末路はもう決まったようなものだった。

「よし」

その後、それほど時間もかからず、探索の魔法は終了した。  
満足そうに口元に笑みを湛えてフェイが瞼を開ける。

「何処です？」

端的にローが聞く。  
言葉は最低限でいい。  
フェイの気分が高揚しているのだから。  
リーも黙ってフェイの次の言葉を待つ。

日の光を反射して瞳がキラキラと輝く。  
その瞳を眩しそうに2人は目を細める。  
フェイの口が開く。

「ザラウェイ」

行く場所は決まった。

## 第19話 探しものは（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

楽しんでいただけたら、幸いです。

そろそろ再会しそうな2人。…とかいいながら、簡単にはいかない  
んだろうなと思いつつ…。

早く会えるように頑張ります！

## ある男の言い分として（前書き）

載せようか載せまいか悩んだのですが、載せることにしました。  
読んでいただけたら幸いです。

ある男の言い分として

彼女が僕を魅了した。

まず、あの風が戯れるように揺らす柔らかな髪が視界に入った。

ついで、光を吸い込んだかのようにキラキラと光る瞳に視線を奪われた。

細い首も手も足も … 全てが僕を魅了する。

彼女は这个世界で僕に存在を知らしめるようにそこに居た。

プリティースにその日出かけたのは偶然。

最近気に入った服飾の本舗がプリティスにあり、この日は新しいものはないかと気まぐれを起こし寄った。

普段だったら店の者を屋敷に呼んでいるところだったが、この日は何故か店に足を運ぶ気きになって行っただ。

しかし、だからこそ、彼女との出会いは運命なのだと分かるのだ。

ここに来たからこそ彼女に… ユーキに出会えたのだから。

「ぼっ… スタンリー様」

いまだに僕のことを坊ちやまと呼んでしまいそうになって、慌てて言い直すのは執事のセイドだ。

小さいころから僕に仕えている。

「セイドか。何だ？」

「はい… 実は、カマスター殿からの連絡が入りました」  
「それで？」

「やはりユーキ様を探す者の力を感じるそうです。… 今のところはカマスター殿のお力で妨害して下さっているようですが」

「そうか… やはりさつさと誓いを済ませてしまわねばな」

「はい… しかし、少し強引ではないかと思うのですが」

「僕に逆らうのかい？」

「いえ…」

「セイド、お前の言いたいことは分かる。しかし、事は急を要する。僕はユーキと出会ってしまったんだ。僕を一瞬で魅了してしまった

彼女を狙うやつはたくさんいる筈だ。僕は彼女を誰にも譲るつもりがない。ではどうしたらよいか？」

「……」

「それは名実共に僕のものにしてしまうしかないということだよ。絶対ユーキは僕のが好きになる。いや、好きにしてみせる！」

話すうちに力がこもってしまった。

そのままセイドを見る。

セイドは何もいわず僕を見る。

「僕を好きになるのは確実だ。しかし時間がない。だから、先に周囲を固めてしまう。ユーキを手に入れるために」

スツとセイドが頭を下げる。

「スタンリー様の仰せのままに」

セイドの台詞に僕は満足する。

状況が変わったのは数刻後。

彼女の部屋を訪れて、その姿を目におさめる。

彼女が着ていたのは彼女のために急遽取り寄せたドレスの中のひとつ。

自分的には少々シンプルな形のドレスだと思っていたものを彼女は着ていた。



しかしどうだろう。

シンプルなドレスが予想外に彼女を惹き立たせており、更に僕を魅了した。

本能の赴くままに彼女の前に膝を下ろし、手の甲に口を寄せる。

熱っぽい視線で彼女を下から覗き込むように見た。

どの角度で見ても彼女は美しかった。

意識せずとも出てくる言葉に、残念ながら彼女の表情はかわらない。それは仕方がない。

彼女には悪いと思っではいるが、魔法を施させてもらっているのだ。彼女が分かってくれることは確信しているが、その為には誠意を持って言葉を言い募る時間が必要なのだ。

しかし、今その為の時間はない。

忌々しいことに。

表情はかわらないとはいえ、彼女の微笑を見るだけで今は満足だ。美しい彼女の横に相応しい姿で立つために、彼女と居る時間を惜しみつつ、僕は部屋を後にした。

「スタンリー様っ！」

僕の高揚とした気分をかき消すようにセイドが慌てたようにやってくる。

珍しいことだ。

セイドという男は、いつも執事長として皆のお手本となるようにこんな慌てた姿など見せないのだ。

そんなセイドが慌てていることで、何か不測の事態が起こったことを知る。

「どうした」

「カマスター殿が重症を負いました」

「何?!」

「どうやらユーキ様を探している人物は、カマスター殿よりも力のある魔法使いか、魔法使いを雇っているようです。再三探る力に對抗したらしいのですが、相手方がもつと強力な魔法を使ってきたようです…」

「ということは、場所を知られたということか」

「はい。…幸い、詳細な場所までは知られてないと思いますが、時間の問題かと」

「分かった。式を早めるように手配しろ」

「はい」

「招待客にも他の魔法使いを使って連絡を入れろ」

「分かりました」

指示を聞いてセイドが足早に去っていく。

ギリリと手を握る。

「ユーキを渡してなるものかっ!」

早く準備をしなければならない。

自分の部屋に向かいながら、彼女の先ほどの姿を思い出す。

絶対に誰にも渡すものか。

彼女は僕のものだ!



## ある男の言い分として（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

第 話とつけようかと思ったのですが、やめました。

勝手な男の言い分ですが、少しでも話の内容が広がればなと思い載せてあります。

…意味無いかもと冷や汗をかきつつ。

## 第20話 時は止まることを知らず（前書き）

読んでくださってる方たちがいると思うと、書こつて気になりますね。

見せ場に向けてまっしぐら！…といきたいところですが、どうなることやら（汗

歩みを止めないように頑張りますので、お付き合いください！

## 第20話 時は止まることを知らず

荘厳なる建物。

その場所特有の神聖性。

この場所を訪れる者は、全て敬虔なる気持ちになることだろう。

光を取り込むかのように存在する天窓。

正面に配置されている窓はステンドグラスで、その場の雰囲気になんか役どころか何役もかっている。

ここはザラウエイで一番大きい教会だった。

今、この教会にはたくさんの人が詰め掛けていた。

男は礼服に身を包み、女は見事なドレス と言っても、夜会に出て行くような華美なドレスではなく、もう少し抑え気味な色合いのドレスを着て。

彼らが教会を訪れているのは何のためか？

それは神に祈りを捧げるためではない。

では、何のためにここににいるのか？

こたえは、今日この日、急遽決まった大貴族の誓約の儀 婚姻 が行われるためであった。

ザラウェイに住む貴族だけでなく、近隣の町という町に住む貴族たちが詰め掛けているのだ。

それ程に、今回誓約の儀を行おうとしている貴族は、この国ではなかなかの影響力を持った家柄であった。

今日の主役となる貴族の名はフライゲラ。

現当主は、この国の王の側近の1人。

今日の誓約の儀は、そのフライゲラの現当主の息子であるスタンリーのものだった。

実のところ、フライゲラの現当主は教会にはいない。

この誓約の儀が急遽決まったことが原因であったりする。

しかし、王の側近であるフライゲラという大貴族との繋がりを望む者にとって、この誓約の儀に参加しないという選択肢は存在しなかった。

次期当主はスタンリーの上にいる兄ではあるが、どうにかして縁を繋ぎたい者にとってこれはひとつの顔つなぎの機会であった。

教会に今もなお集まる貴族たちを少し離れた場所から見る者たちがいた。

「凄いですね」

「……」

「本当。昨日の今日なのにね」

「……」

言わずもがな、フエイたちである。

探索の魔法を行使した後、3人はすぐさまザラウェイに移動した。しかし、ザラウェイに移動してからも妨害する魔力に邪魔をされ、捜査は難航した。

仕方無しに、町をくまなく移動して情報を集めることに変更するとある貴族が急に教会で婚姻 誓約の儀を行うという情報が入ってきたのである。

最初、3人ともその情報を自分たちには関係ないものと無視していたが、詳しく情報が入ってくるごとに考えを改めさせられることとなった。

フライゲラの次男坊が急に相手を伴って帰ってきたとか。

プリティスで出会って一目で見初められ、次の日には花嫁となる幸運な少女の話とか。

その少女は、腰まではある焦げ茶色の髪をもち、綺麗な顔をしていただとか。

情報が入ってくるたびに、フエイの気配が重く鋭くなっていくのに、従者であるローとリーの2人は戦々恐々としていたのだ。

誓約の儀は正午に行われるとのこと、慌てて教会のあるこの地区に移動してきたのだった。

「どうするのですか？」

「教会に攻撃魔法でもぶつけてやりますか？」



「……リー」

「冗談だ、ロー」

どうしてもシリアスになりきれない一行である。  
そんな2人を無視して、フェイは無言で教会を睨む。

「フェイ様？」

「……攻撃魔法をぶち込んでやりたいところではあるが、罪の無い一般市民を巻き込むわけにはいかないからな」

物騒な台詞にひやりとしながらも、冷静なようだったので、ローは開きかけた自分の口を無理やり閉じた。

「しかし……おかしいと思わないか？」

「何がですか？」

「見てないのか？……教会を包む魔力についてだ」

「え？」

「！」

ジツと教会を見つめるフェイの視線に、リーがハッと息を呑み込み、教会をつぶさに見る。

何かが見えたのか、リーも勢い込んで口を開く。

「おかしいです！確かに」

「……再三、オレが探索の魔法を使っていたからな。妨害などに対しての外に向けた魔法陣が展開されているのは予想の範囲内なんだ。しかし……」

「はい……外だけではなく、中に向けても魔法陣が展開されています。あれは……」

「そうだ。あれはマリオネット……特定の人物を、魔法をかけた人物

が思い通りに動かす魔法だ」

「！それはどういうことですかっ！」

「ロー、静かにしろ。…主、私が中を探ってまいります」

「…」

「私の方がいくらかマシです。今の主なら中で想像通りの状況だったとしたら歯止めが利かず、大事にしてしまうでしょう？」

「…いつて来い」

「はっ」

無駄口をそれ以上挟むことなく、リーが群衆にまぎれていった。

「フエイ様…」

「大丈夫だ」

気遣わしげに自分を呼ぶローに力強く返事を返す。  
さすがにそんなことは無いはずだとフエイは自分自身に言い聞かせる。

ファライゲラの現当主は、勤勉であり、実直だ。  
だからこそ、国王の側近足り得る。

しかし、フエイは知っている。

どんなに素晴らしい当主がその家を治めていようと、同じ血を引いた全ての者が素晴らしい資質を引き継いでいるわけではないということ。

幸い、次期当主たる長兄は、現当主の資質を継いでいる。

だが、その弟は分らないのだ。

この後の展開によっては、ファライゲラ家は大変なことになるう。

無意識に左腕を掴む。

最悪な状況を想像してしまいそうになり、慌てて思考を中断する。どっちにしろ、全てはリーが帰ってくれば分かることだった。

フェイは気持ちを切り替えて、教会を覆うように展開されている魔法陣に目を向けた。

「そんなことよりも、あの展開されている魔法陣をどうにかする」

「はっ」

「あれは何人がかりで展開させているんだろうな…手当たりしだいなような気がするが…」

手当たりしだい。

フェイの言葉は、的を得ていた。

魔法陣というものは全て同じではないのだ。

どうしてもその魔法陣を展開する魔法使いのクセというものが出る。教会を覆う魔法陣たちはそれぞれに違った形をしており、何個ずつかそれぞれの魔法使いが展開させたもので間違い無かった。

「強い魔法使いはいないようだな…つまらん」

「そうそうにフェイ様のおめがねに適う者がいたら大変です」

「…それはオレを褒めているのか？それとも貶しているのか？」

「どっちでもありません。事実を述べているだけです」

「…まあ、こんなところで魔法合戦は確かにまずいからな」

「はい」

じと目でみやるフェイの視線をなきものとしてスルーする。

「この後の行動を考えると、今壊してしまうには都合が悪いですね

「？」

「そうだ。どっちにしろ、あいつを連れ出すときに一気に消し去る」

「では、今から仕込んでおくということでもいいですか？」

「ああ…これからひとつずつ打ち消しの魔法陣を用意する。お前はそれを指示する魔法陣に重ね合わせる」

「了解です」

行動が決まってからの動作は速かった。

2人は協力して、作業をしていった。

「フエイ様」

「なんだ？」

「早くお会いしたいですね」

「…ああ」

フエイの前には色々と問題が山積みになっている。

しかしそれを横において、彼女との再会に思いを馳せてしまうのは、いけないことなのだろうか…。

フエイは自分の責務を思いつつ、彼女と再会に胸を騒がせるのであった。

## 第20話 時は止まることを知らず（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

前にも書きましたが、活動報告にて更新日について載せてあったりします。

誤字脱字の発見報告。そして感想などいただけたら大変嬉しいです。  
よろしく願います！

## 第21話 不安の中

（不安は的中か…やはり私が来て正解だったな）

自分の存在を限りなく薄くする魔法を施して、リーは教会の内部にいた。

人に見えなくなる程のものではないので、慎重に動く必要はあり、ところどころで身を影に寄せる。

姿を見せなくする方法もあったりするのだが、存在を薄くする魔法に比べて、そこそこの魔力を使うのだ。

教会にはたくさんの術式が展開されており、その網に引っかかる可能性が高かった。

リーは何人かの魔法使いと警備の者を見た。

それぞれに周囲を警戒しており、厳重に守られている方向に向かって足を運ぶ。

なにことも大切な『もの』は厳重に守られているものだから。

人の心理は大抵一緒。

たまに逆を突く者がいたりもするが、この場面でそうする利点は多くはない。

リーは確信を持って奥へ進んでいった。

警備する者たちを上手いことやり過ごしながら奥に進んでいくと、

同じお仕着せを着た女が数人立っているのを見つけた。

（侍女たち…か？）

そつと近づく。

ちようど近くの部屋から出てきたところだったのだろう、手に荷物を持ち、奥へと進んでいく。

（ちようどよい。紛れ込ませてもらおう）

口元にかすかな笑みを浮かべ、侍女たちの後ろをそつとついていく。今は存在が薄くなっているの、そつと後ろをついて行く分にはこれといって支障がなかった。

少し進んだところで、1人の侍女が口を開いて喋りだす。声を潜めて。

「…ねえ」

「何？」

「…ちよつとおかしくない？」

「何がよ？」

「ユーキ様よ。…朝から口元に笑みを浮かべて何も喋らないし」

「…私たちがお願いする時以外は身じろぎひとつしないとか？」

「そうなの？」

「…しっ！声が大きいわっ」

「ごめん…」

1人の侍女が、わけが分かってない風に普通の声で喋ると、声が廊下に響いて他の侍女が咎めるように言う。  
咎められた侍女は首をすくめて謝る。

辺りをそつと見回して、周囲に自分たち以外がないことを確認してまた喋り始める。

「…なんというか、執事長も機嫌が良かったと思つたら、今はすごいピリピリしてるし」

「それは誓約の儀の準備で気を張っているからではないの？」

「違うわ。執事長なら大きな行事が急に入ろうと、いつもの顔でやり遂げてしまうわ」

「確かに…それに今回は、きっと喜び勇みはしても、ここまで緊張した顔はしてないでしょうね」

「スタンリー様の婚姻を強く望んでいたしね」

同意する侍女たち。

「やつぱりこれって…」

「それ以上は言わない方がいいわ」

「!？」

前方から飛び込んできた声。

話をすることに夢中になっていた侍女たちは、一様にびっくりした顔をして進むべき道に視線を向けた。

そこには、同じお仕着せを着た女が1人立っていた。

「エリザ…」

「口にしない方がいいことは色々あるものよ…これからもここで働きたいのなら」

「ッ！分かったわ。…これ以上は何も言わないわ」

「ええ！」



おしゃべりをしていた侍女たちは慌てて謝る。

エリザと呼ばれた女は表情を変えず、微かに顎を引く。

「さあ、もうすぐ時間だね。最後の仕上げをしてしまわねばなら  
いわ」

「ええ」

「そうね！来賓の方々が目を見張るほどに飾り立てなければいけ  
いわ」

「ユーキ様は今のままでも美しいけど？」

「フライゲラ家の婚姻式ですもの。それに見合った格好というも  
のがあるのよ」

「そうそう。早く行きましょう」

エリザを先頭に、侍女たちが歩いていく。

ついて行くことをやめて、リーはその侍女たちの一団の姿が小さく  
なっていくのを見ていた。

必要な情報は今の侍女たちのおしゃべりで得ることが出来たのだか  
ら。

今日の花嫁の姿を確認する必要はない。

『ユーキ』という名前の少女が自分たちの探し人だと確信できる。

「それに…私が先に彼女を見つけてしまったら、絶対主が怒ってし  
まう」

ふっと肩をすくめて、踵を返す。

フェイの元へ帰るのだ。

「あのエリザって娘…他の侍女たちとは違う…」

思い出すは赤毛の髪を結い上げた女。  
顔はわりと整っていたが無表情に近く、それが彼女に冷たい印象をもたらしていた。  
侍女たちの中でも別格なのが分かる。

（主人に忠実？しかしそれにしては…）

リーは何か得体の知れない雰囲気を感じていた。

場所は変わって教会の外。

早々とやるべき下準備が終わり、フェイとローは少々手持ち無沙汰だった。

「フェイ様」

「…なんだ？」

「これが終わった後はどうするのでしょうか？…お帰りになるのでしょうか？」

ローの心配事は全てが終わった後のことであつた。

フェイは空を眺めていて、ローには何を考えているのかいまひとつ分からない。

「…どうするかなあ…」

「フェイ様っ！」

「騒ぐな。…一度帰るしかないだろうな」

「…」

「一応退けたとはいえ、オレを狙った奴の動向を把握せねばならん」  
「はい」

「兄上と弟の仕出かした後始末もせねばならん」  
「…はい」

ローの眉がハの字になる。

「これが一番の重要な件だが…」  
「？」

「父上と母上に結婚の了解を得ねばならんしな！」

「フェイ様っ！？今教会に居るフライゲラ家の次男坊と同じことしかけてますよっ！同意っ！まずは彼女の同意を得ることが先決です！！分かってらっしゃるんですか？！」

「分かっている。ちゃんとあいつの同意は得るぞ。お前はオレを何だと思っているのだ？」  
「…」

何かを言いかけるが、ローは無理やり口を閉じた。  
両手で。

それを見たフェイの雰囲気が悪くなる。

「ほお？どうやらお前とは話をきっちりつけなければならないようだ」

「…！？」

ローは慄いて、うしろに後ずさる。  
フェイはその分、前に足を進める。  
しかしそれも数秒のことだ。  
フェイの雰囲気は元に戻る。

「フェ…フェイ様？」

「遊びはここまでだ。リーが帰ってきた」

ローが教会の通りに視線を戻すと、何食わぬ顔でリーが帰ってくる姿を捉えた。

合流したリーはフェイに頭を下げ、次いでローを見やる。

そして…

「また主に遊ばれていたのか？」

「！」

ひどい台詞を吐いた。

## 第21話 不安の中（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

## 第22話 交叉するもの

結び上げられた髪が痛い。

純白のドレスは平素だったら感動もののひとつではあるが、今はただ重い。

履いているのは繊細な細工の施された細いヒールの靴で、足も痛い。

そんなことを思う私は、現実から目をそらしているのだろうか？

現在、由岐は教会の廊下を歩いていた。

着ているのは純白のドレス 今日のような日に着るこのドレスは、日本でならウェディングドレスと呼ばれるもの。

ドレスのその清廉な雰囲気を阻害しないように気を使いながらも、

フリルがふんだんに使われており、ダイヤや真珠といった宝石がところどころについている。

結い上げられた髪の上からは薄いベールが全身を覆うように取り付けられている。

付き人のように、1人の侍女が由岐の斜め後ろを歩いている。

歩いているわたしたちの前と後ろには、がっしりとした体躯の男たちが帯剣をして、存在していた。

（どうしたらいい…？）

現実逃避がしたい由岐。

しかし、本当に現実逃避した日には、許容できない結果がついてくると分かっているのに、現実逃避する思い切りの良さは残念がない。

（これが私の運命なの？…お母さん）

ついつい母に助けを求めてしまう。

心の中に浮かぶ母は、大輪のような笑顔で笑っている。

いつもは勇気付けられるその笑顔も、今日ばかりは挫けてしまいそうな自分を笑っているようにしか思えなくて、違う意味で負けられないと下唇を噛む力を与えた。

そう、唇を噛んだ。

（なんとか口元は動くようになった…多分時間がたてば身体も動くようになる。でも…）

朝から自分の意志では動かすことの出来なくなった身体は、やっと

正午に近いこの時間帯になって、少しだけ由岐の意思の元に帰ってきた。

運命の時が、カウントダウンをとりながら近づいてきてはいたが。

今、由岐は聖堂に向かっているのだ。

（体が動くようになったときにはもう……いいえっ！絶対諦めないんだからっ！！わたしはいいなりに結婚なんてしない）

ベールが由岐の顔を隠していてくれて助かった。

由岐の表情は、反意を浮かべて強い意志を秘めていたのだから。

気持ちを新たに、由岐は誰かに操られるままに廊下を進む。  
聖堂への扉はもうすぐだ。

心を決めた由岐は、口元を笑みの形に維持する。  
身体が自由が戻りかけていることがばれて、最悪の事態にならないようにするためである。

口だけでも自由であれば、出来ることがある。

由岐の心を知らず、一行は扉の前に到着する。  
最後のチェックとばかりに、侍女が裾の弛みをのばしたり、全体の出来栄を見る。

満足したのか、由岐から一步離れて頭を下げる。  
すると、前と後ろを固めていた男たちも横に避ける。



これから扉が開く。

花嫁の側に余計なものがあつてはならない。

「扉が開いたらお進みください」

侍女はそう言うと、中から見えない場所まで離れた。

是の声を上げる必要はない。

操られているのだから、そんなことは求められていないのだ。

準備が全て整い、一テンポの後、威厳ある佇まいの扉が音もなく開かれていく。

天窓から部屋の中に取り込まれていた日の光が眩しくて、少し目を細める。

聖堂の中には大勢の人たちがいた。

（すごい…人が多いのだけど…）

心の中で冷や汗を浮かべる。

しかし、身体は相変わらず他人の支配の下。  
怯むことなく動く。

ゆっくり、ゆっくり。

それをつぶさに見る人たち。

由岐は人に気付かれないように、ヴァージンロードを囲む人たちを視線だけを動かしてこっそり見る。

（？…！）

由岐にとって、ここは自分のいた世界ではない。

これはもう変わることはない事実として由岐の中にある。  
だからこの世界で知っている顔を見かけるはずがない。  
由岐の視界に、1人の人物が入ってくるまではそう思っていた。

燃えるように煌めく瞳。

由岐を捕らえて離さない強い…強い視線。

幼い外見を裏切るような大人びた雰囲気。

全ては、この世界に来て、少しの間だけ一緒にいた少年を形作った。

視線がぶつかる。

由岐の視線が自分を捉えたことに、少年の口角が上がる。

『みつけた』

少年の声が聞こえたような気がした。

そして少年の笑みを見て、何かが崩れるような気がした。  
鼻がツンとする。

慌てて決壊しそうな感情を堰きとめる。  
由岐にはこの感情を表す言葉がなかった。

（言ってもいいのだろうか…）

そんなことを思う。

そして少年に視線を返し

「遅い」

微かな声で呟いた。

少年は目を見開き、破顔した。

## 第22話 交叉するもの（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

## 制御できるものとできないもの

リーの報告を聞いた後、オレたちは急いで身だしなみを整え、教会の中に入っていく貴族たちの流れに紛れ込んだ。

この時、リーとローには自分の側から離れているように言った。2人が異を唱えてきたので、強めに命令した。

2人は目立ちすぎるのだ。

何のために紛れ込んでいるのか分かっているのかと怒りなくなった。しかし、2人は呆れたような顔をして同じことを言った。

「オレのせいにしないでください」

「私のせいにしないでください」

全くわけがわからない。

オレのどこに問題があるというのだろうか。

悩んでも答えは出そうにないので、早々に考えるのをやめた。

オレがそんなことを考えている間に、2人は顔を寄せて話をしていった。

2人は、確かに自分たちが側においては問題があるかもという結論に達したのか、しぶしぶ了承して離れていった。

そんなこと考えてないで、オレの意見に従ってればいいものを。心の中でそう思う。

思う反面、自分の意見に唯々諾々と従わないからこそ自分の従者たりえるのかとも思った。

「大人しくしといてくださいね！」

「何かする前に必ず呼ぶんですよ！」

離れて行き際に残した言葉に血管が切れそうになったが。

オレを子ども扱いするなと常々言っているのにあの2人は…。

ブツブツと文句を垂れ流しにしている間に、招待された貴族たちはあらかた聖堂内に入り終わったようだった。

後は主役の登場を待つばかりだ。

近くの貴族の声がオレの耳に飛び込んでくる。

「しかし、本当に急なことでしたな」

「そうですね…。聞きましたか？此度の花嫁のことなのですが、昨日会ったばかりの娘なのだから」

「なんとっ！しかし、それは無いのでは？」

「いやいや、どうも本当のことのようですよ。フライゲラ家のスタンリー殿の一目惚れだとか」

「ほほう！それは凄い。少しでも顔つなぎになればと今日は来たのですが、予想外に今日はいいものを見られそうですな」

ある貴族の台詞に怒りがこみ上げる。

恰幅がよいと言ったらあれだが、胸の代わりに見事な腹を張りながら、笑うどこぞの貴族たちを睨んでしまった。

（いいものとは何だっ！あいつは『モノ』ではないぞっ！）

怒鳴りつけてしまいたかったが、なんとか我慢する。

きつとこんなところで問題を起こしてしまえば、あの2人に何を言われるのか予想がつく。

それだけは阻止しなければならない。

やっぱり一緒にいますと言われたら困るし、何よりあの生暖かいような視線はいただけない。

しかし、一目惚れ…。

フライゲラの次男坊のことをオレは笑えない。

オレも一目惚れなのだから。

だからと言って、いい趣味をしているとは褒めてやりたくない。

奴はオレの元からあいつを奪っていったのだから。

それも無理やり婚姻を結ぼうとしている。

あいつはオレの『つがい』だ。

初めて会った時から感じているもの。

そして、日増しにその感覚は強くなる。

（全てが済んだ暁には、髪をむしって丸坊主にしてやろうか…）

物騒な気持ち湧いてくる。

いつの間に静かになっていたのか、扉が開いて、誰かが歩いてくる靴音がした。

音は祭壇の前で止まる。

なんとか人ごみから抜け出し、誓約の儀のときに使う特別な布を使  
って作ってあるロードの前に移動する。  
祭壇の前には1人の男がいた。

（あれが噂の次男坊か…）

一目見て、すぐに意見が絶対に合わないと確信した。  
顔はまあまあ整っている。

しかしあの服装はなんだ。

これでもかと、フリルが使える場所という場所に使われており、見  
ているだけで頭痛がしてくる。

きつと刺繍も凄いのだろう。

幸いなことに遠めなので見ることは適わないが。

オレにはあんなものは着れない…というか、絶対着たくないぞ。

胸をそらして祭壇に背を向け、扉のほうを向いて立つ。

あの顔に泥団子でもぶつけてやったらさぞ楽しいことだろう。

そうして待ちに待った花嫁の登場。

聖堂にいる者のすべての視線が花嫁に注がれる。

怯んでもおかしくないところだ。

だが、花嫁は怯むことなくひらかれた道を歩む。

息が止まりそうだった。

自分が一生懸命探していた存在が歩いてくる。

誓約の儀で使われる純白のドレスが日の光を受けて輝く。

眩しいはずなのに目を逸らすことは出来ない。



いや、逸らしたくなかった。

豪華なドレス。

全てを覆い隠しながらも全てをそつと見せるベール。

全身真っ白で、誰も踏んでない初雪を思わせた。

そこには犯すことの出来ない清廉な雰囲気纏って彼女がいた。

オレには何も聞こえなくなっていた。

横で息を呑んだ音も。

人々がもつとしつかり見ようと動いたせいで発生した衣擦れの音も。

五感の全てが抜け落ちたような気がした。

そして…感情が戻ってきたときにはオレの中は大嵐だった。

何故、彼女はあそこに居る？

何故、彼女は真っ白なドレスを着ている？

何故、特別なときにだけ使うあのロードを歩いている？

何故…。

何故？

何故！

何故、オレはこんなところで彼女を見ているんだっ！！

彼女があそこに立つのは今日この時じゃないっ！！？

オレの心が悲鳴を上げる。

ギュッと胸の辺りを掴んで押さえる。

目の前が怒りで赤く染まる。

ここ数日、感情の蛇口が壊れてしまっているようにしか思えない。  
コントロールできない感情に吹き飛ばされそうになるのを後一歩の  
ところで踏みとどまりながら、彼女を見つめる。

しかし、オレの中で吹き荒れる嵐は、彼女の視線がこっちにきたこ  
とで唐突に消える。

彼女はオレを捉えた。

微かに目を見開いたのを見た。

訳の分からない感情が湧いてきて、押さえ込もうとするが、口角が  
上がるのは抑えることができなかった。

言葉に出さずオレは言う。

『みつけた』

彼女はオレから視線を離さなかった。

オレの音のない言葉が聞こえたのか、瞳が揺れるのを見つける。

そして  
…

「遅い」

確かに聞こえた。

きつと他のやつらには聞こえなかっただろうが、オレには聞こえた。  
あれはオレだけに向けられた言葉だったのだから。

オレは驚き、我慢できず笑ってしまった。

## 制御できるものとできないもの（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

山場に突っ込む前に花嫁聖堂入場前後を別視点にてお送りします。

もうフェイの正体とかってバレバレなのかなあ〜と思いつつ、まだ秘密のベールはかけたままです。

どこかでいい意味で予想を抜けたらいいいなと思いつつ…。

楽しんでいたただけなら幸いです。

## 第23話 マジでキレた5秒後（前書き）

評価、お気に入り登録ありがとうございます！  
続きを気にしてくださる方がいるんだと実感させてくれます。  
頑張ります！！

## 第23話 マジでキレた5秒後

（大丈夫…）

先ほどまでの弱った気持ちは何だったのだろう。

そう思うほどに、由岐は落ち着きを取り戻していた。

由岐は今、祭壇の前。

身体は未だ由岐の意思の元に帰ってきてはくれない。  
歩き続ければ、どうしたってゴールは近づいてくる。  
つまり、そういうことだ。

身体は促されるままに、スタンリーの横に立つ。  
することは地球での結婚式と同じようだった。

祭壇の前には神父が立っている。

粛々と誓約の儀は進む。

そうして、由岐にとっての戦いの場が近づいてきた。

「共に歩み… あなた方は 神に誓いますか？」

神父がお決まりの文句を言う。

地球とは少し文面が違うような気がするが、意味は一緒だ。  
意気揚々とスタンリーが胸を張って答える。

「誓います」

次は由岐の番だ。

そう思つて、由岐は心の準備をする。  
しかし、それは適わなかった。

「よろしい」

神父がスタンリーの言葉を聞いただけで誓いの言葉を終わらせてしまった。

先ほどの言葉を思い返してみれば、神父は『あなた方は』と言つた。

誓約の言葉がまとめられていたことに気付く。

急に鼓動がバクバクと鳴り始める。

（嘘っ！どうするの！どうしたら…！？）

「ではここにお集まりの方々も異議が無いようなら、拍手をもって」

「オレはその誓約に異議を申し立てる」

「私はっ！神に誓わないわっ！！結婚なんてしないっ！？」

どちらの言葉が先だったかは分からない。

由岐は神父の言葉に思わず叫んだ。

そして、あの少年は、このタイミングを待っていたらしい。  
どちらの声も、聖堂に高らかと響いた。

聖堂は静寂に包まれる。

それも一瞬の静寂だった。

スタンリーが怒声を上げる。

「何を言っているんだっ！君は僕と一緒にいるんだっ」

由岐の肩を捕まえて、顔を寄せてくる。

由岐には分かった。

これは誓約の儀の最後にする誓いの接吻だと。

スタンリーは、無理やりにも誓約の儀を成立させるつもりらしい。

『機は満ちる。その身は御身のもの… 全ては御身に返される』

音にならない声。

でも由岐には聞こえた。

それと同時に、身体が戻ってきたことを知る。

由岐は心の命じるままに



ボグッ！

…スタンリーを殴った。

鈍い音が鳴る。

手のひらではない。

握り締めた拳での見事な右ストレートだった。

「ギャッ！」

悲鳴を上げてスタンリーが吹っ飛び、床に尻餅をつく。

聖堂は先ほどと違った静寂に包まれる。

しかし、その静寂もすぐ破られたのは一緒だった。

「はははっ！いい拳だ」

愉快そうに笑うのはあの少年。

それを視線の片隅に見て、すぐさまスタンリーに視線を戻す。

スタンリーは呆然と由岐を見ていた。

息を吸い込む。

そして、由岐は一気に吐き出した。

「結婚はお断りよっ！！」

力強く宣言をする。

「ぼ、僕に恥をかかしたなっ！」

呆然としていたが、我に返り、スタンリーは顔を怒りで赤黒く染めて立ち上がった。

「恥って何よ！結婚するのも了承してない娘を無理やりこんな場に立たせたのはあなたよっ！」

しかし由岐も負けてはいない。

唇を無理やり奪われそうになったのだ。

それだけでもう由岐的には万死に値した。

「~~~~！！？誓いは半ば終わっていた！簡単には取り消しはできないぞっ！！」

由岐の告げた台詞に何も言わず、自分の主張を通そうと唾を飛ばしながらスタンリーが叫ぶ。

その言葉に余計に怒りのボルテージを上げられた由岐がスタンリーを睨みつける。

「そう！じゃあどうしたら誓約の破棄が出来るのっ！！言ってみなさいよっ！」

売り言葉に買い言葉だ。

「破棄するつもりなら髪を切れっ！！！！」

引っ込みがつかなくなったのか、スタンリーも叫ぶように条件を突きつける。

招待を受け聖堂に集まっていた貴族たちは、スタンリーの台詞に息を呑む。

場の展開速すぎて目を白黒させていた女性たちの反応はもつと顕著だった。

ところで小さな悲鳴が上がる。

由岐はそれに気付かない。

怒りで周囲の反応など意識外だった。

「分かったわよっ！」

由岐は周囲を見回す。

聖堂の中でいきなり起こった騒ぎに詰め掛けていた警備の男を見つけるとその男に近づき、腰の剣に手をかける。

男は展開についていけず、あっさりと剣を奪われた。

由岐はすばやくその場から離れて結い上げられた髪を無理やり下ろす。

「おいっ」

少年の慌てた声が聞こえた。

しかし、由岐は止まらなかった。

下ろした髪をまとめて掴み、剣を下から当てる。

そして…勢いよく振り上げた。

バサッ

髪と髪を掴んでいた手が頭から離れる。  
はらりと幾筋かの髪が床に落ちた。

何度目になるかの静寂。

しかし今度は誰もそれを妨げない。

由岐は剣を床に放った。

カッシャーッ！！

聖堂の床に落ちた剣の音は思った以上に響く。  
それを冷めた目で見つめた後、由岐はスタンリーに手を突き出した。  
手には今さっき切ったばかりの髪の毛が握られている。

「これで誓約は破棄できるのよね」

固まって、動かないスタンリーに由岐は一步步近づく。  
その途端、スタンリーは足の力が入らなくなったかのように床にへたり込む。

それを見て、眉間に皺を寄せる。

由岐は切れと言われたから切ったのだ。

なのに、思ったのとは違う反応。

馬鹿らしくなって、手に持った髪の毛を床に落とす。

（とんだ茶番だわ…）

踵を返そうとする由岐に、声がかかる。

「き、君…は…」

スタンリーが蒼白な顔で口を開いた。  
もう相手をする気もなかったが、仕方なく視線を向ける。

「何 ……許さん」

由岐の問いにかぶせるかのように声が聞こえた。  
それほど大きな声ではなかった。  
だが、なぜかその声は、聖堂の中に不思議なほど響く。

由岐はその声を知っていた。

こちらに来てから初めて聞いた声。

急に消えたはずの由岐を探して、教会に来て『みつけた』と言った  
声。

そして、由岐と同じように、神父の声を遮って、この誓約の儀に異  
議を唱えてくれた声 ……だった。

しかし、どの場面でも聴いた覚えのない抑揚の抜け落ちた声。  
なぜか背筋が粟立つ。

由岐はその場を動くことが出来なかった。

## 第23話 マジでキレた5秒後（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

何回も直しました。何度も読み返してわけが分からなくなった第23話です。

落ち着いたらちょっと直すかもしれませんが…（汗

どうでしょうか？この展開は予想内だったのかなあ…と思いつつ。  
楽しんでいただけたら幸いです。

第24話 救いの神はこんなに…凶悪？

「…許さん」

少年期特有の高めの声。

しかしこの時、声は限りなく低く、語尾が揺れていた。

由岐は声の主を思っ、振り向く。

そこには、視線を床に向けているあの少年の姿があった。

少年の視線は床に散らばった由岐の髪の毛を見ており、動かない。

「あの…？」

少年の雰囲気がおかしいことに気付いて、近づこうとする。  
しかし、それは適わなかった。

「フライゲラ家の…馬鹿息子が…オレを怒らせるか…」

抑揚の欠けていた声が怒りに満ちていく。  
声に乗せられた怒気が伝わってくる。

聖堂に集まった貴族も神父も警備の者も動くに動けない。

少年を中心に、突如突風が吹き荒れた。

聖堂の中は一気に悲鳴の坩堝へと変わった。

人々は風になぎ倒されていく。

出入り口になる扉はきつちりと閉められており、聖堂の外に逃げ出すこともかなわない。

「フエイ様っ！」

「主っ！！」

暴風と化した風に煽られながら2人の男女が暴風の中心に近づいていく。

由岐はその2人組みに見覚えがあった。

男は、少年に付き従うように居たのを憶えている。

女は、泣いていた自分を宿屋に連れて行った。

その場に縫い付けられたように突っ立っていた身体を無理やり動かして、2人に近づく。

男の方が由岐に気付き、足を止める。

「あなたたち……」

「昨日振りです！挨拶している暇がないので、申し訳ありませんっ！」



挨拶している暇は無いといいながらも、2人組みの男のほうが丁寧な言葉をかけてくる。

「ロー、早く手伝えっ！」

2人組みの女の方が怒鳴る声が聞こえてきた。

それに男は慌てて踵を返す。

由岐は思わず男に付いて行く。

「何か手伝えることつてありますか？」

少年の怒りは、自分が先ほど起こした出来事が原因だと思ったのだ。

どうしたあそこまで怒ってしまったのかは分からなかったけれど。

聖堂に吹き荒れる風に翻弄されている人たちも気になる。

由岐はジッと男に視線を注いだ。

「では…お願いしても？」

「はいっ！」

一瞬の逡巡後、まっすぐ由岐を見つめて、男は口を開いた。

それに力強く頷いた。

由岐にはこれを止めなければならないという使命感が湧きだっただけを感じた。

理由は分からない。

けれども、由岐は心の声に従う。

「では、『フエイ』…と彼の名を呼んであげてください」

「へ？」

「『私の元に帰ってきて』と付け足してくれるとなおいいかもっ！」  
「ええっ！」

いつの間にか後ろに立っていた女が付け加えてくる。

2人の言う言葉が何の助けになるのか分からなかった。  
戸惑う由岐の肩に手をかけて、女は言う。

「あなたにしか出来ないの。やってくれるわよね？」

強い瞳。

逆らえないものを感じる。  
そして最強の言葉。

『あなたにしか出来ない』

(…これって殺し文句だね)

由岐は女の瞳を見返す。  
女は満足そうに笑った。

「私はリー。あいつはローって言って、私の片割れ」

簡素に自己紹介をしてくる。

なので、由岐も口を開く。

「私は」

「待つて。あなたの名前は後で聞いわ。主に先に教えてあげてちょうだい」

「主？」

「そう。主『フェイ』様にね」

彼女は謎めいた笑みを最後に、その場から離れていった。

由岐はその笑みに、少しの間その場に突っ立っていたのだった。

由岐は2人組み ローとリーの側近づく。

2人は風に煽られながら少年 フェイの側に行こうとしていた。

「あの」

「は、はい」

それ以上は近づけないのか、立ち止まって何事かしているローのところへ行った。

どうもナイフの先で、床に何か書いている様に見えた。

「あの私…」

「はい、あなたはフェイ様の近くまでいけるはずです。側まで行って呼びかけてあげてください」

「え…！む、無理です！あんなに風が吹き荒れるところ行けませんよ…！」

「気付いてないの？」

「はいっ…？」

ローがこともなげにフェイの側に行けと言う。

由岐は驚いて手を身体の前で振る。

フェイの側はそれこそ強風が吹き荒れているのか、彼自身が全て見えないほどのだ。

そんな場所に近づいて、無事でいられるとは思わなかった。  
否定する由岐の背後から声が聞こえてきて固まる。  
振り向けばまたリーが居た。

「あなたと私たちの違いに、本当に気付いてないの？」

再度リーに言われて、由岐は考え込む。

答えは見えてこない。

考えている時間も惜しく思ったのか、リーが口を開いた。

「見て分かるように、私もローも立っているのに精一杯。ねえ、  
あなたはどうしてそんなにこともなげにそこに立っている？」

言われて気付く。

確かに今聖堂の中で立っているのは由岐とリーとローだけだった。  
それも、2人は時々風に煽られて身体が揺れる。

揺れる身体を支えるように、身体に力が入っているのが分かる。

由岐は自分の身体を見下ろす。

これといって力を入れず、いつものように立っている。

「どうして？」

「そりゃあ、主…フエイ様にあなたを害す気持ちはないもの。あなたを守りたい気持ちはあってもね」

「え？」

「フエイ様はあなたを傷つけない。傷つけられない…なので、側に行っても大丈夫です」

「…」

「主もひどいわ。私たちも守ってくれたらいいのに」

「俺たちはフエイ様を守るために居る。守ってもらってしまったら、  
もう従者とは言えない」

「分かっているわよ」

由岐を置き去りにして2人の会話は進む。

「それにしてもここに来るまでよく保ったなあと思っていたんだけど、最後にこれじゃあ…ね」

「確かに…フェイ様にもガス抜きが必要だったのか…しかし、自分で気分転換されていたような…」

「そうねえ…ま、多分とところでガス抜きしても結果は一緒だったんじゃない？」

「だろうな」

風に煽られながら、よく会話をするものだ。

由岐は何とはなしに聞いていた。

しかし、そんな悠長にしている訳にもいかないのだ。

聖堂のいろんなところで人の悲鳴が聞こえてくるのだから。

「あの」

「はい？」

「じゃあ…私は彼の フェイの側に行って、名前を呼べばいいんですか？」

「はい。お願いします」

「そうそう。それから早く元に戻ってくれるように伝えて」

ローが生真面目に返して、リーがにっこりと笑う。

由岐には自分の呼びかけでフェイが正気を取り戻してくれるかは自信がいまひとつ無かったが、従者である2人組みに言われてしまえば、拒む理由も思いつかない。

しかも、由岐だけがリーいわく、この暴風から守られているのだから。

自分が行くしかないと心を決める。

周囲を見回せば、飾られていた花は宙を舞い、それどころか気付けばスタンリーが風に振り回されているのを見つけてしまった。

整えられていた髪は風に煽られて凄いことになっている。

服も同じだ。

そして、そんなスタンリーを助けようと、強風に倒されながらもセイドが手を伸ばしている姿まである。

「うわぁ……」

聖堂に広がる光景を見ながら、本当にこの世界はファンタジーだと思う。

そして、この世界にきて初めて会った少年の力にも驚く。

自分を救いに来てくれたことは百も承知だったのだが、この状況を見ているとなんとやってよいのか分からない。

招待されてこの教会に来た者たちが大半だ。

彼らもこんな事件に巻き込まれることなど予想もしてなかったことだろう。

彼らこそ守られる…助けられるべきではないだろうか。

しかし、現在聖堂の中で荒れ狂う風から守られているのは由岐1人。

フェイの元へ近づきながら由岐は思う。

攫われた姫を颯爽とヒーローが助けに来る物語。

単純明快なものだけど、だからこそ大衆に好かれる。

だが、これはどうだろうか。

今、暴風の中心にいる人物は確かに由岐を探して助けに来てくれた。しかし、周りの状況は由岐をそんな甘酸っぱいような気持ちにはしてくれない。

由岐はため息をひとつついた。

「救いの神はこんなに…凶悪なものなのかしら？」

第24話 救いの神はこんなに…凶悪？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！



## 心救うは君の声

聖堂の中は吹き荒れる風の音と、その風に巻き上げられた物のぶつかる音。

そして、人々の悲鳴で充滿している。

騒ぎを作った張本人は、吹き荒れる暴風を中心。

騒ぎの張本人は今何を考えているのだろうか。

フェイの目には未だ怒りが。

そして、その怒りに隠れるように悔恨が浮かんでいる。

だが、それを窺うことの出来る者はいない。

彼は今、1人佇んでいるのだから。

想像通り、誓約の言葉が省略されていた。  
誓約の言葉の後に、来賓に向かって形式的な応答があることも知っていた。

それを利用することに決めていた。

ちょうど同じタイミングで言葉が重なる。

上がっていた口の端がもつと上がったのを憶えている。

ファライゲラ家の次男坊が強硬手段に訴えようとする可能性もある  
と思っていたから、すぐにでもマリオネットの魔法を解除できるよ  
うに、その為の魔法陣を教会に入る前に用意していた。

案の定、あの男は強硬手段に訴えてきたので、陣を発動させる言葉を紡いだ。

その後は傑作だった。

彼女の拳が綺麗にあの男に決まり、床に尻餅をつかせたのだから。  
あれを傑作と言わずして何を傑作だと言うのか。

尻餅をついた男の表情もよかった。

つつい声を上上げて笑ってしまったほどだ。

しかし、今思えば、あれはその後の出来事のほんの触り程度だった  
のだと思う。

どうしてあの後すぐに介入しなかったのかと、あの時の自分を殴つ  
てやりたいくらいだ。

ファライゲラ家の次男坊は、恥をかかされたと言いながらも、彼女  
との婚姻にまだ執着していた。

形式的だろうと、あの場に居たオレが異を唱えたのだ。

その時点で、誓約は成立していなかった。  
それも、花嫁たる彼女自身がその誓約に異を唱えていたのだから、  
誓約成立には程遠い。

オレが男の言い分に一瞬呆れたその隙に、彼女は投げられた球が壁  
にぶつかってそのまま跳ね返るかのように男の言い分に噛み付いた。  
その後はあれよあれよと話が進み、最悪の事態が起こった。

「破棄するつもりなら髪を切れっ！！！」

周囲で息を呑む音が聞こえた。

そして、女たちの悲鳴も。

オレもすぐにはその言葉を理解するのが出来なかった位だ。

この世界では、魔力を貯蓄できる能力が大きいほど強いとされている。

しかし、大抵の者は大量の魔力を貯蓄できる能力に乏しかったりする。

貯蓄された魔力が少なくなると、人は体調を崩したり、ちょっとしたことで大怪我をしてしまう危険性などが増える。

魔物にしてもそうだ。

魔力量の乏しい者が真っ先に狙われる。

そこで、人々は様々な危険回避のために髪を伸ばす。

髪とは魔力を宿すのに最も適した場所であるからだ。

貯蓄力の低い者は、髪を伸ばして魔力を貯め、維持するのだ。

古来より、髪には魔力を宿す力があり、とても大切なものとされてきた。

なので、めったなことで髪を切るのは禁忌だとされている。

特に、子どもと女は気をつけねばならない。

子どもの場合は、まだ貯蓄する能力が未発達な上、常に不安定なのだ。

女の場合は、子どもの出産時などに魔力を大量に消費するので、常日頃から最下層の生活をしている者も、名のある貴族も、髪を伸ばすことを日常としているのである。

それ程に髪の毛は常に生活と切り離せないものであり、誰もが髪を切る行為に忌避感を感じていた。

そんな世界だからこそ、あの男は、彼女にぜったい『是』と答えることの出来ない条件を突きつけたのだろう。  
だが… それは大きな過ちだった。

「分かったわよっ！」

恐れ戦く周囲の者たちを放って、彼女は言い放つ。

彼女の視線は鋭く周囲を巡る。

お目当ての物を見つけたのか、その場から足早に移動し、1人の男に近づいた。

男は教会の中を警護する者だった。

聖堂の中が騒がしくなったことで、何事かと中に入ってきたのだろう。

彼女が近づいて来る意図が掴めず、ただ棒立ちだった。  
そんな男の腰から、スルリと剣を奪う。

男は反応できず、ただそのまま剣を奪われる。彼女は剣を奪い返されることを恐れたのか、その場をすぐに離れる。綺麗に結い上げられた髪の毛に剣を持っていないほうの手が伸び、些か強引に髪の毛をほどき下ろした。

「おいっ」

下ろした髪の毛をわし掴む様を見て、ザツと血の気が下がる音がした。

咄嗟に出たのはあんな言葉だけ。

今思うと、何故もつと違う言葉を言わなかったのかと自分を責める言葉しか出てこない。

わし掴まれた髪の毛の近く、生えぎわに剣の刃を当てる。

制止の言葉も言えず、全てをオレは見ていた。

バサッ

髪の毛の何本かはそのまま床に落ちる。

襟元から下の髪の毛が無くなっていた。

カラン……

聖堂の中に驚くほどよく響いた剣の落ちる音。

彼女は自分を凝視するフライゲラ家の次男坊に握った拳を差し出した。

その手には彼女の髪の毛が無造作に握られている。

あの男は呆然とそれを見ていた。  
彼女が近づく。

すると、立つことを放棄してしまったかのようにあの男は座り込んでしまった。

彼女のため息と共に、手から髪の毛が落ちる。

オレは落ちていく髪の毛から目が離せなかった。

彼女の手から滑り落ちる髪の毛は切られる前と同じで艶があり、なぜか夢を見ているような気分だった。

床に落ちて広がる髪の毛。

オレの心から何かが欠けていく。

心は異常なほどに静まりかえっていた。

「き、君…は…」

煩わしい声が聞こえた。

何故あの男の声が聞こえる？

静まり返った心が少しずつ波立っていく。

最初は小さな波紋。

しかし少しずつ波紋は広がり、波立つ。

治まることはなく、反対に波は激しくなっていく。

中心から黒いドロリとしたものが溢れ出てくるようだった。

口を開く。

何か口にしなければ心が耐えられない。

そう思った。

出てきた言葉は余計に心を暗く沸き立たせる言葉だったが。

「…ゆるさん」

心のままに力を解放する。

ぐるぐるといつの間にか吹き荒れる心の嵐を吐き出すように。

それからオレは1人佇む。

周囲の景色は風に遮られ、何も見えない。

どうにかしなければと思う心と、このまま放っておけと思う心。

2つの心に挟まれて、オレは未だそのまま。

コッ…

目の前で何かが止まる。

それを視線の中に入れるが、映すことを拒否したオレの瞳は目の前に止まったものを認識しなかった。

けれどもそれは唐突に終わりを告げる。

どうしてか…。

それは、オレが聞きたかった声が聞こえてきたのだから。

「…フェイ…戻って…きて」

声と共に、手に触れる柔らかく温かいもの。  
オレの心は一気に全てを取り戻す。

視線の先には、心配そうに自分を見る彼女の姿があった。



## 心救うは君の声（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 第25話 心奪うのは

2人から離れて暴風の中心へと向かう。

リーの言った通りに、風は由岐の進む道を阻むことはなかった。あと数歩というところで歩みを止める。

由岐にはしっかりと少年 フェイが見えた。

フェイは暴風の中心で、何をするでもなくその場に居た。

近づいてきた由岐に気付くこともなく、どこかを見ているようだった。

つい悠長にしている時でもないのにフェイをじつくりと見てしまう。

外見は小学校高学年。

身長は由岐より20センチほど低い。

髪の色は青味がかった銀色で、背中の真ん中くらいまでと長い。

後ろのほうだけ伸ばしているようで、紐で縛られた髪の毛はさながら動物の尻尾のようで可愛い。

瞳は紫。

生まれてこのかた見たことの無い瞳の色。

見る角度などによって薄い紫にも濃い紫にも色を変える。

きっと1日眺めていても飽きない色だと由岐は思う。

しかし、そんな紫の瞳も、今の状態で眺めては数分とせずに飽きてしまうことだろう。

眺めても飽きない瞳とは意思の光輝くからこそで、今のフェイの瞳に意思の光など欠片もなく、何も映していないガラス玉のようだったからである。

どこかを見ていると思った瞳は、ただそこに在るだけで、用をなしていなかった。

意思の光浮かばぬ瞳など見ていても楽しいことなどひとつも無かった。

いや、その瞳には2つの感情がちらついていた。

怒りと後悔だ。

由岐はフェイに近づいていく。  
半ば無意識に。

（なんて顔してるのよ…）

ほんの数センチを残して止まる。

目と鼻の先ほどの近くにきても、フェイの瞳は由岐を映さない。  
なぜかそれに由岐はゾツとした。

訳は分らない。

心に急かされるように横に投げ出されている手を握る。

「…フェイ…戻って…きて」

そっと呟く。

思った以上に頼りない声が出てしまい、由岐は恥ずかしくなった。

けれどそれも数秒のこと。

由岐は目を見張る。

変化は劇的だった。

握った手がピクリと動く。

紫の瞳が由岐を捉える。

そして瞳に光が戻ってきたこともすぐ分かった。

フェイが瞳を数回瞬かせる。

ジッと由岐を見つめたと思うと、その視線は下に移動し、自分の手とその手を握る由岐の手をつぶさに見る。

そこまで至って、由岐は今の状態に気付き、真っ赤になって慌てて手を離そうとする。

しかしそれは叶わない。

フェイに手を強く握られてしまったからだ。

「あ、あのっ」

「…名を…」

「え…？」

「名を教えてください」

「ええと…四季川…うん、ユキ・シキガワ…です」

「…ユキ…いや…ユキ？」

「…うん、うんっ…！」

由岐は驚く。

スタンリーに名前を教えたときと同じように、のばされてしまうと  
思っていたのだ。

だが、フェイは言い直した。

これだけで由岐のフェイへの株は上がる。  
嬉しくなって笑みが上る。

フェイが軽く目を見張る。  
すぐに嬉しそうな顔に変わったが。

「オレの名は」

「うん！リーさんに聞いたよ。フェイ君だよな」

「…」

「あれ？」

名前を知っていることを告げれば、憮然とした顔をされた。  
由岐は首を傾げる。

「リーに…ユキは名を教えたのか？」

「え？…うんっ！リーさんが先にフェイ君に教えてあげてっ言  
った…から…」

「そうか！」

満面の笑み。

フェイのコロコロとかわる表情についていけず、由岐の頭の中は疑  
問符でいっぱいだ。

身体の前に移動させられた手をまたギュッと握られる。

「オレの名はフェイリールド。フェイリールド・セファ＝リオーレ。  
フェイと呼んでくれ」

「フェイ君」

「君はいらない。フェイと呼び捨てで頼む…探しにくるのが遅くな  
ってすまなかった」

またまた表情が変わって、今度は沈痛な顔だ。

そんな顔をして欲しくなくて、由岐も握られた手に空いているほうの手を持って行ってフェイの手を包む。

「そんなことないよ！タイミングばっちりだよ！！何処の王子様かと思ったもの！！！」

急ぐあまりに、言っている台詞がおかしいことに由岐は気づかない。

「リオーレのだが」

「へ？」

由岐はフェイの言っていることがよく分からなかった。

変な声が出る。

フェイはフェイで慌てて口を開く。

「あ、いや…そんなことよりその髪の毛…」

片手を離して由岐の不揃いになってしまった髪の毛の先を触る。

フェイの先ほどの視線の意味が分かり、由岐は首を振る。

「フェイク…フェイのせいじゃないよ。私が自分の意志でやったんだもの。それに髪の毛はまた伸びるもの」

笑みと共に伝える。

由岐は気にしていない。

それは本当。

…ちょっとだけ自己嫌悪はある。

（私も喧嘩早いの直さなきゃ…）

髪を切ったことではなく、キレてしまったことに対して。  
フェイの身体が震える。

考え事に嵌りそうだった由岐は、フェイの様子にどうしたのかと見  
つめる。

お互いに握った手をフェイが自分のほうへ引き寄せる。

「あの…フェツ!？」

「ユキを守ると誓う。もしこれから何があったとしても、オレ  
はオレの全力でお前を守りたい」

引き寄せられた手の甲に柔らかな感触。

それはフェイの唇。

驚く由岐をフェイはどこまでも澄んだ瞳で見つめる。

その瞳は意志の光で輝いており、由岐は視線を逸らせない。

由岐はボウツと霞む頭の片隅で思う。

（…1日どころか…この瞳を見飽きることなんてずっとない）

変な核心の下に、由岐はフェイの瞳を見続けるのであった。

## 第25話 心奪うのは (後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。



## 第26話 揺れる髪のその先にあるもの（前）

フェイが正気に戻ったが、未だ風は吹き荒れていた。

由岐とフェイはお互いを見つめたまま、動かなかった。

「主っ！正気に戻ったのなら早くこの風どうにかしてくださいよっ  
！！」

フェイが正気に戻ったことで、多少は吹き荒れる風も弱まっていたらしい。

少し離れた場所から非難めいた声が聞こえてきた。

リーだった。

由岐は現状を思い出して、慌ててフェイから視線と自分の手を取り戻す。

フェイはとても不満そうに離れてしまった手を見ていた。

「フェイ様！」

畳み掛けるようにまた名前が呼ばれる。

ローだった。

苦虫を噛み潰してしまっただかのような顔をして、盛大にため息を吐く。

興味深そうに由岐に見られていることに気付き、フェイは表情を取り繕う。

スツと手を上げて、下に降ろす。

『鎮まれ』

フェイの言葉に従い、縦横無尽に吹き荒れていた風が徐々に治まっていく。

風に振り回されていた聖堂に飾られていた花などの装飾品も風に運ばれてゆつくりと床に降ろされる。

ドスンッ！

「ギャッ!？」

「スタンリー様っ!!」

スタンリーだけはそのまま下に落とされて悲鳴を上げる。

落下場所には誰も下敷きなら無いように配慮がされていたが。

心配そうに見上げていたセイドも慌てて側に寄る。

「…うわぁ」

「どうかしたか、ユキ？」

「…ううん。…なんでもない」

一連の騒ぎの終息を見ていた由岐は、つついスタンリーの扱いの差に声を上げてしまう。

なんとも思わないのか、フェイが不思議そうに由岐を見たのが印象的だ。

そつと目を逸らす。

逸らした目線の先に、リーとローが近寄ってくるのが見えた。

「主」

「フェイ様」

2人はジッとフェイを見て、怪我などないか確認しているようだった。

（いやいや、フェイよりスタンリーじゃない？）

心の中で由岐は突っ込みを入れる。

心の中での発言だったので、そのままリーとローの怪我確認は止まらず、フェイも従者2人のしたいようにさせていた。

「どうなることかと思いましたよ」

「本当に」

「すまなかった」

「まあ、怪我が無いならいいです」

「怪我が無い様で何よりです」

「…」

確認も終わって、2人は表情を緩めて思い思いにフェイに声をかける。

由岐は無言だ。

（すごい過保護だ…ていうか、孫をべろんべろんに甘やかすおじいちゃんとおばあちゃんレベルのような気がする。フェイの慣れたようなあの態度…ぜったいあれがあんの2人のスタンダードだよっ！500円賭けてもいいよ！）

外見上だけ。

しかし、目は口ほどにものを言う。

思った以上に、目で語ってしまっていたようだった。

さすがに由岐のもの言いたげな視線に居心地が悪くなったようで、  
フェイが2人の間を抜けて近づいてくる。

2人はその後ろに続く。

「ユキ…そんな目で見ないでくれ」  
「？」

本人無自覚だったようで、首を傾げられる。

その仕草についてフェイはときめく。

後ろについてきた2人には、背中しか見えないのでそんなフェイの  
気持ちの変化は分からない。

リーがフェイの右側に並ぶ。

ローが左側だ。

リーが笑って口を開く。

「やっぱり効果抜群だったわね」

「ええ？」

「主に言ってくれたんでしょう？ “戻ってきて” って」

「あ…はい」

あの時の自分の頼りない声を思い出し、恥ずかしくなる。

リーはそれに気付かず、由岐の前に手を差し出す。

「本当にありがとう。助かったわ。私の名前はリーイン・ウィズサ  
ーナリー。よろしくね！」

「！…ユキ・シキガワです。こちらこそよろしく申し上げます！」  
「うんうん。あと反対側に居るのが」

「ローウェン・ウィズサーナリーと言います。この度は大変ご迷惑をおかけしまして…」

「いえっ！こちらこそ助けに来てもらって助かりましたからっ」

深々と頭を下げるローに慌てて体の前で手を振る。

会って間もない他人である自分を助けに来てくれたのだから、感謝の気持ちしかない。

お互いに頭を下げ続けるローと由岐に、終わりは見えないと判断したリーがフェイに目配せする。

それを受けたフェイがローの背中に手を当てる。

「うぎ…」

「？…あの」

「い、いえ何も…」

一瞬なんともいえぬ顔をして固まったローに、由岐は何事かと窺う。すぐ笑顔に戻り、なんでもないと頭を振られたので、それ以上の追求は差し控える。

ちようどりーから声をかけられて、疑問は放置されることとなった。

「ユキ、気分は悪くない？」

「え？いえ、大丈夫です」

「そう…それ、思い切ったわね。とても綺麗な髪の毛だったのに」

「あ…ははは…。大丈夫ですよ。また伸びますから」

「その思い切りの良さ、嫌いじゃないわ」

「！ありがとうございます」

「主が選ぶだけあるわ」

「え？」

最後の言葉だけポツリと零す。

由岐にはリーが何を言ったのか分からなかった。

リーは笑みを浮かべるだけで答えなかった。

和やかな場面はここまでだった。

殺気に満ちた視線が和やかな雰囲気をぶち壊す。

由岐たちが話している間に、外に配備されていた者たちも聖堂の中に入ってきていたらしい。

守られるような形で真ん中に立つスタンリー。

本人的には大将のつもりなのだろうが、如何せん、風に振り回されて髪も服もぐちゃぐちゃで、戦う男たちの逞しい体に囲まれている姿はどう見ても、間違って紛れ込んでしまったピエロにしか見えない。

セイドが少しでも身だしなみを整えようと奮闘しているようだが無駄だろう。

「貴様ら…覚悟は出来ているだろうな」

「お前こそ覚悟は出来ているのか？」

「何のことだ？」

「オレの元からユキを拉致していったことについてだ。言わなければ分からないとは馬鹿なのか？」

「何をっ!？」

「フエイ様、本当のことだとしてもそんな風にはつきり言ってしまうのは感心しません」

「先越されたな。ローのくせに…。でもその通りですね。こういう場合はもつと相手を一発で決るような言葉を吐いてあげなければなりませんよ」

「…全然違う」

（漫才トリオなのかしら…）

どうにもシリアスにならない状況に、由岐は感心する。

しかし、由岐は気づいていない。

自分が突っ込み役になりかけていることを。

今のところは脳内だけのことであったが、近いうちに違和感なく3人組の輪の中に入ってしまうことだろう。

知らぬうちに突っ込み役で自分の地位を築きかけてしまいそうなのを知らず、フェイの背中に庇われたまま、事の成り行きを傍観していた。

「あまつさえ、合意も無く誓約の儀に望むとは何事か。ファライゲラ家の名が聞いて呆れる」

ハツと鼻で笑う。

目に見える形で馬鹿にする。

みるみるうちに怒りに顔を赤黒く染めていくスタンリー。

「き、貴様…家名を侮辱するつもり」

「違っだろうが。お前が家名に泥を塗っているのだ」

「泥をてんこ盛りにぶっ掛けた拳句に」

「踏みにじってますね」

（容赦ないなあ…ていうか、やっぱり似たもの同士なのね）

フェイの言葉にすかさず合いの手を入れる2人組み。

冷静に分析しながら由岐もフェイの言葉を否定しない。

ますます不穏になっていく聖堂内。

フェイたちに守られている由岐は特に不安を感じることは無かった

が。

聖堂内と言えば、たくさんいた来賓たちはどうなったのか。ふとそう思っただけで周囲に視線を巡らせる。

由岐の視線の先には空いた空間。

大多数の人が居なくなっていた。

（多分、フェイが風を鎮めてからみんな我先にと避難していったんだろうな…。でも全員ではない…。感じ？ちらほらと残っている人たちが居るけどあれは…）

残っている者たちを観察する。

全体的に年齢がスタンリーに近い若い者たちだ。

面白そうに見ている者。

スタンリーと同じように怒った顔の者。

どうしたらよいのか分からずといった者までその場に居た。

今聖堂の中に残っている貴族たちは実はスタンリーの取り巻き達。

今後の付き合いもあるからなのか、彼らは一様にこの場に留まっているのだった。

由岐にはスタンリーとの関係など皆目検討がつかなかったが。

聖堂内に視線を巡らしている間にも怒りが頂点に達したスタンリーが唾を飛ばしながら怒鳴り散らしていた。

その姿に上級貴族の威厳など欠片も無く、口を開けば開くほどに自分の底の浅さを見せてしまっている。

本人はそんなことに気付いていない。

（もう口閉じた方がいいと思う…）

心の中で助言する。



フェイたちも呆れ顔だ。

どれだけ怒鳴り散らしても答えないフェイたちに、スタンリーの方が限界に近かったようだ。

「もうよいっ！この無礼者どもを捕らえよ！！貴族に逆らう者がどうなるか教えてくれるっ」

「…気が短いな」

「趣味おかしいし」

「よく見れば足が短いですね」

「っ！！！！？」

すかさず火に油を注ぐ行為を実践する3人組に由岐の口からは乾いた笑いしか出ない。

しかし、それどころではない。

もう言葉にならない言葉を喚きながら、スタンリーが周りを固める男たちに命令していたのだ。

フェイの起こした風のことがあるからか、男たちの動作は慎重だ。じりじりと由岐たちを囲むように向かってくる。

「ロー」

「お任せください」

そんな中、フェイたちの言葉はこれだけだった。

一歩前にローが出る。

フェイは悠然と立っている。

リーは違つところからの不意打ちを警戒しているのか、周囲に気を配っている。

ちなみに、由岐はフェイの背中を見ていた。

背中で揺れる髪の毛をみつあみにしたいと密かに思つて、緊張感の

ない自分に笑いがこみ上げるのだった。

第26話 揺れる髪のその先にあるもの（前）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 第27話 揺れる髪のその先にあるもの（後）

勝負は一瞬でついた。

ローが身の内から放ったのは闘気。  
後ろにいた由岐には分からなかったが、前方に向けて放たれた気が  
重力と殺気を帯びる。

一定の力無き者はその場に崩れ落ち、一定の力がある者でもその場  
に縫い付けられ、動けなくなった。  
ただそれだけ。

力をコントロールしたのだろう。

真っ先に闘気にあてられて倒れるだろうスタンリーは、倒れる護衛  
や警備兵たちを他所にその場に立っていた。

何が起こったのか理解できないのか、呆然と倒れた男たちを見る。  
横に付き従うセイドも言葉も無いのか、回りに広がる惨状を見ている  
ことしか出来ない。

「やれやれ。これくらいで気を失うなど弱いにも程がある。まあ、  
お前のお抱えではこんなものか」

スタンリーが呆然としている間に、ローは定位置であるフェイの斜  
め後ろに戻っており、フェイが嘲るように笑っていた。

スタンリーの顔が強張る。

2、3歩後退する。

わなわなと口を開いた。

「き…貴様はいつたい…」

「お前に名乗る名など持たない」

「…」

一言の元に切って捨てられて、スタンリーは口を閉じる。

スタンリーの目には恐怖と憎しみが折り重なるように浮かぶ。

「エリザ！」

「ここに」

スタンリーに呼ばれて、お仕着せを着た女が現れる。  
感情をうかがわせないその顔を由岐はよく知っていた。

「あの人…」

「知っているのか？」

「あの人の屋敷で私の世話を中心的にしてた人」

「ほう…」

エリザと呼ばれた女から視線を外さずに話を聞く。

フェイは興味深げにエリザを観察する。

このタイミングで呼ばれた女。

ただの侍女であるわけがなかった。

こんな場面で呼ばれたにもかかわらず、かわらない表情。  
何かしらの能力を持っているだろうという考えに至る。

「リー」

「はい、主」

「お前に任せる」

「了解です。確かにローは相手が女だと手加減しがちですから私の方が最適ですね」

「……」

反論する言葉がないのか、ローは黙したまま語らず、リーが楽しそうにエリザとスタンリーを見る。

エリザがスタンリーの前に立ち、何かを唱えはじめる。

それと共にエリザの足元が光り、魔法陣が形成されていく。

「あら、魔法使いさんだったのね」

「気をつけるよ」

「分かっているわよ。ローは心配性なんだから」

魔法形成を阻止するでもなく、リーはエリザの行動を見ていた。

魔法陣が完成し光が集まった途端、光は四散し、前に倒れる護衛たちの身体に吸い込まれるようにして消える。

一度身体が光ったと思ったら、倒れていた男たちが次々と起き上がる。

しかし、その男たちの目に意思の光は無い。

不自然に赤く光る瞳が不気味さを演出していた。

「あんたがユキを操っていた魔法使ってことね」

エリザが使ったのはマリオネット　由岐にかけられていた魔法とよく似たものだった。

由岐の場合は、起きている状態で身体の自由を縛る魔法。

男たちの場合は、気絶した状態などの身体を支配し、思いのままに

操る魔法だった。

とてもよく似たような魔法であるが、使用の仕方が違う。

倒れる際に落としていた剣を取り、怪しく瞳を光らせる男たちが構える。

「リー」

「手出し無用」

「…操られているだけだ。殺すなよ」

「それくらい分かっているわ。私に対する認識おかしくないっ？！  
…それに、殺しても意味ないし…ね」

ローのどちらの心配をしているのか分からない言葉にリーが噛みつく。

付け足すように言われた最後の言葉は小さな声だったので、誰にも聞こえなかった。

そう、男たちは死んでも動く。

エリザが使っているのは、そういう魔法だ。  
魔法を使ったエリザを冷たい目で見る。

エリザの口元には微かに笑みが上っている。

この状況を密かに楽しいでいるらしい。

反吐が出るとリーは思う。

人を無理やり操り、殺人兵器にするこの魔法は、昔の負の魔法で、  
禁止魔法の1つに認定されている。

それでもこの魔法は需要があり、使用する魔法使いが後を絶たなかった。

「その魔法…使ったことを後悔させてあげるわ」

どこからともなく薄手の手袋を取り出しはめる。

手袋は真っ白。

これといって何か特徴のあるものではない。

特徴はないはずなのに、手袋は何故か異彩を放つ。

ギュッと握って感触を馴染ませてリーは笑う。

その笑みは艶めいており、聖堂内で散らばっていた残った貴族たちが揃ってドキッとするほどだ。

エリザの合図と共に、操られた男たちが一斉に向かってくる。

リーは笑んでその場で佇むだけ。

操られた男たちがあと少しでリーと接触すると言ったところ。後ろで由岐の小さな悲鳴が上がる。

切られる！

と、いうところで突如リーを中心にして床が光り始める。

魔法陣だ。

「何っ！その女は何も唱えていなかったはずっ」

「ええ。唱えてなかったわよ、私は」

下から光に包まれながら、リーはエリザが思わずもらした言葉に返事を返す。

「私は？…！」



「主使いの荒い従者もいたものだろう？」

リーの後ろ。

離れた場所で、右手に光を纏わせたフェイが立っていた。

「手出し無用って言ったのはローに対してだけだし」

エリザとリーがゆったりと喋れるのはフェイのおかげ。

リーの下で光る魔法陣は依然そのままだ。

そして光に包まれた男たちは一切の動きを止めている。

「停止の魔法ね……でもそれでは私の魔法を止めたことにはならない」  
「ええ、そうね。でも足止めできればもう十分」

動かなくなった男たちの合間をすり抜けて、リーが魔法陣から出る。

「目覚めよ、審判の時間だ」

リーの声が聖堂に響く。

そのままエリザに向かって足を進めながら右手に左手を添える。

高密度魔力が溢れ、右手に集まる。

はめられていた手袋が色彩を変える。

真っ白から真っ黒に。

手袋の細部まで黒く染まり、溢れ出ていた魔力も消える。

添えていた左手を離すと、右手の甲の部分に複雑な文様が刻まれていた。

文様だけが白く輝き、周りの黒に映える。

エリザから愉悦の笑みが消える。

手袋の文様を見て固まり、目に見えるほどに青白い顔になる。

コツリ…

エリザの目前で止まる。

自分を凝視したままのエリザに鮮やかな笑みを返す。

して一転、表情が消える。

「 汝、罪を犯し者よ。汝はリカルド魔法教典第1258条に反した。汝の罪は汝の元に」

「ひっ！？」

リーに腕を捕られ、エリザは恐怖に包まれた表情であとずさるうとする。

だが、動くことは出来なかった。

「我、リカルド魔法協会査問部裁定官の名の下に、汝を裁く者なり」

リーの言葉と共に、文様が光を放つ。

「審判」

文様から黒い茨が出現し、リーの掴んだエリザの腕に絡みつく。

茨は腕から手に移動し、エリザの小指に到達する。

「きゃ~~~~~~~~!!!!」

エリザの悲鳴が響き渡る。

リーの表情は変わらない。

エリザの腕を掴んだまま、終わりを待つ。

「あ…ああ…」

エリザが崩れ落ちる。

エリザから一歩離れて見下ろす。

「汝の左手の小指に刻まれた茨は罪の証。罪を背負って生きていくがいい」

「…」

「言っておくけど、もう禁術指定の魔法を使わないことね。使えば小指の次は薬指と茨は増えていくし、先ほど受けた以上の激痛に苛まれるわ。そして、それでもやめず両手の指が茨で埋まれば」

「

…死ぬのでしょう。どうせ」

床についた手を凝視して、エリザがやけくそ気味に零す。

小指に刻まれた茨を憎憎しげに見ていたが、上から見下ろすリーには分からない。

分かりたいという気持ちもなかったが。

リーは黒から白に戻った手袋を外しながら口を開く。

「いいえ、死ぬなんてまさか。ただ一切の魔力が使えなくなるだけ」

「！？し、死ぬのと変わらないじゃないのっ！！」

「魔力は体内にある。生きていくには問題ないじゃない。というか、また使うつもりなのかしら？ 全部すっ飛ばして魔力使えないようにしてあげましょうか？」

「ひっ」

外した手袋を元に戻しながらリーが平坦な声で言う。

恐怖に満ちた顔であとずさるエリザをそのままに、リーは踵を返し

た。

折り重なるようにして倒れている男たち。

エリザからの支配が途切れたことにより、元の状態に戻ったようだった。

フェイたちの元に戻るために男たちを避けながら歩くりーの髪が日の光をはじいて揺れる。

向かう先は主の下。

フェイの後ろで心配そうに自分を見る由岐を見て笑みがこぼれる。

（これからはこの構図が当たり前になるのかしら）

第27話 揺れる髪のその先にあるもの（後）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
楽しんでいただけたら幸いです。

第28話 終決…にはほど遠く（前書き）

あけましておめでとうございます！  
今年もよろしくお願いします！！

## 第28話 終決…にはほど遠く

目の前で繰り広げられていた光景は、実は、由岐にとって未だに現実の薄いものばかりだった。

屈強な男たちが何故かいつせいに倒れたかと思えば、目を赤く光らせながら立ち上がる。

リーに襲い掛かる男たちに悲鳴を上げかけた。  
いや、実際はしっかりと悲鳴を上げてしまったのであるが。

振り上げられた剣でリーが切られるという所で、リーの立つ場所が光り、男たちがその体勢のまま『停止』した。

その後のリーたちの話を聞いて、それはフェイの仕業だと分かった。

由岐のいた世界には無いもの      魔法。

信じられないでいる自分と、現実は今、『魔法』を目前にしている自分。

ただただ、由岐は全てを見ていることしか出来なかった。

「主」

「ご苦労」

颯爽と戻ってきたリーに、フェイがねぎらいの言葉をかける。  
リーは黙って微笑み、彼女の定位置たるフェイの斜め後ろに移動する。

それを当然として、まっすぐに前を見据えるフェイ。  
視線の先には人形のようにピクリとも動かないスタンリー。

口を開こうとして、俄かに扉の向こうが騒がしくなったのに気付き、口を閉じる。

慌しい音が他の者たちにも聞こえたのか、扉に視線が集中する。  
ワンテンポ遅れて重厚な聖堂の出入り口である扉が荒々しく開かれた。

扉の向こうから現れたのは1人の男。

ザッと見たところ男は20代後半。  
そこそこ整った顔立ち。

かなり急いでやって来たのだろう、髪は乱れ、汗を浮かべている。  
息もそれを証明するように荒い。

「ザイシード様！」



スタンリーの横に居たセイドが驚きの声を上げる。

ザイシードと呼ばれたその男は、その声に反応せず、聖堂の中をぐるりと見渡す。

その動きがある場所に差し掛かって急に止まる。

「遅い」

視線を真っ向から受けて、フェイが言い放つ。

ザイシードは数秒その場で固まったかと思えば、急な動きでフェイたちに近づいてくる。

思わず由岐がフェイの右の袖を後ろから掴む。

視線をそのままに、フェイが安心させるようにその手を優しく包んだ。

リーとローも無言で男を待つ。

ザイシードは5歩ほど離れた場所で立ち止まり、おもむろに跪いた。

「！」

「なぜっ……」

「っ……！」

驚きの声が聖堂のいたる所であるが、当事者たちはそれを無視して話を進める。

「この度は」

「お前からの謝罪などいらぬ」

「……はっ」

「お前 たちに言いたいのは、今回の件を早急にどうにかしろ

ということだけだ。分かったか？」  
「っ！？」

フエイの言いように、何かを察したのかザイシードが後ろを振り向いた。

カツン…

ザイシードの後ろ。

ザイシードの後からやってきたのだろっ、白髪交じりの壮年の男がゆっくりと歩いてきて、ザイシードのすぐ横で立ち止まる。

壮年の男はザイシードに似通っており、血のつながりを感じさせた。顔には感情を窺わせるものは一切浮かんでおらず、心中を察せる者は誰もいない。

「 ファライゲラ家の不徳と致すところ…大変ご迷惑をおかけいたしました」

深々と男が頭を下げる。

ファライゲラの名に、固まっていたスタンリーが反応し、緩慢に首を動かした。

頭を下げる男を見て目を見開く。

「ち…父上っ?! なぜ?! なぜ…ここにっ!」

「口を閉じろ、スタンリー」

「! あ…兄上までっ!」

「 事の経緯は後で聞かせてもらっぞ」

「 ぼ、僕はっ!」

「 言い訳はいらんっ」

「 っ……………」

壮年の男      現ファライゲラ家主はフェイに頭を下げたまま口を開かない。

代わりに、ザイシード      スタンリーの兄である彼が硬い表情の中に怒りを内包した身体を揺らしてスタンリーのほうを振り向く。

表情と一緒に、硬い声で今後を述べる。

兄であるザイシードの言葉に言葉を封じられて、スタンリーは青ざめたまま下を向く。

「っ」

「セイド、お前にも話を聞かせてもらっぞ」

「は、はいっ！」

スタンリーの横でセイドが直立不動になって返事をする。

ザイシードは姿勢を戻して、父親と同じように深々と頭を下げた。

謝罪の言葉はいらないと言われてしまったが、何もしないわけにはいかない。

少しでも申し訳ないと思う気持ちを伝えるために、出来ることはこれしかなかったのである。

しかし、これ以上ここで全てを明らかにするわけにもいかず、頼まれている伝言のために口を開いた。

「      フェイリールド殿カ…様」

「なんだ」

「兄君が早めに帰ってくるようにと」

「分かっている。一度帰らねばと思っていた」

「…」

フェイは伝言を聞いて相手に気付かれないようにため息を零す。

伝言を託されたということは、この事件を兄に知られてしまったと言うことが確定だったからだ。

近いうちに報告が行くことは分かっていたが、こうもリアルタイムに近い情報を知っていそうな兄にため息しか出てこない。

（オレは四六時中見張られているのか？）

嫌な気分になって落ち込みそうになるフェイを苦笑混じりにリーとローが見ている。

後ろに居た由岐も何かを感じたのか、未だに握ったままのフェイの服の袖を遠慮がちに引っ張ってくる。

それにぽんぽんと手で叩いて大丈夫だと伝える。

眉間に出来た皺が消える。

嫌な気分も由岐に心配されるだけで浮上するのだから意外とお手軽だ。

自分にそう突っ込みながらフェイは頭を下げ続ける2人に目を向けた。

「頭を上げる。ここはお前たちに任せる」

「はっ」

返事を聞いて出入り口に向かう。

袖口を掴んでいた由岐の手を手におさめて引く。

少し歩いて立ち止まる。

「？」

「ああ、そうだ…教会を覆う魔法陣は消しておく」

「ありがとうございます」

「別に…本当は派手に破壊してやろうかと思ったがやめておく」

「…本当にありがとうございます」

派手に破壊。

それは魔法陣を展開させた魔法使いに全てをそのまま返すということ。

それをすればその魔法使いたちは術のはね返しで、当分ともに使えない物にならなくなっていたことだろう。

フェイの怒りの一端を感じて、ザイシードはヒヤリとする。

言いたいことだけを言って、フェイは聖堂を出て行く。

いや、出て行こうとしたところで止められてしまった。

スタンリーの叫び声に。

「待てっ！貴様だけは許さんっ！！」

「スタンリー！」

「坊ちゃまつ！！？」

「うるさいっ！うるさいうるさいっ！！ あいつと僕と何が違うっ！むしろあいつの方がユーキには相応しくないだろうっ！！僕の方がユーキの横に並んで違和感がないはずだっ！！？」

スタンリーの子どものような言動に呆れた雰囲気と緊迫した雰囲気  
が混ざりこみ、みな息を潜めて次の展開を見つめる。

ザイシードは青ざめる。

扉をくぐろうとした状態で立ち止まったフェイの背中を恐る恐る見る。

ゆっくりと振り返るフェイを見て息が止まりそうになる。

ハアハアと肩で息をしながらフェイを睨むスタンリー。  
そして、どこまでも冷めた目でそれを見返すフェイ。

「…オレよりお前の方が相応しいだろ？…オレがユキの横に並んでは違和感が…あると？」

フェイの口から漏れた言葉も先ほどとは誓って絶対零度のような冷たさだ。

「そうだ！貴様は自分の姿を見て分からないのかっ！！まだ成人もしていない子どもが僕からユキを奪おうなど笑止千万！？自分の家にも帰って飴でもなめている方がお似合いだっ」  
「っ！！！！？」

スタンリーの暴言の数々にザイシードはクラツと意識が飛びそうになる。

よろけた自分を支える腕に、その先を辿ると父の姿が見えた。  
父も多少青ざめた顔をしていたが、それでも成り行きを見逃さないように見ている姿に、何とか冷静さを取り戻すことに成功する。

「父上、あの…」

「…口を挟まない方がいい」

ザイシードの意を汲んだのか、全てを言わぬうちに止められた。  
答えを求めてジツと父を見る。

「あの御方は…ご兄弟に囲まれていつも兄君を立てて身を引くから大人しく見られがちだが、立派に…ご兄弟様たちと同じ血が流れているのだ。…ここまできたら我らに挟める口など無い」

きっぱりと言われて、それこそ挟む言葉も出ず、ザイシードは成り行きを見守るために視線を戻した。

## 第28話 終決…にはほど遠く（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。



## 第29話 辿り着いた先（前書き）

お気に入り登録・評価、ありがとうございます！  
やる気の源になっております。

## 第29話 辿り着いた先

聖堂は恐ろしいまでの静かさに包まれていた。

「そうだ！貴様は自分の姿を見て分らないのかっ！！まだ成人もしていない子どもが僕からユーキを奪おうなど笑止千万！？自分の家にでも帰って飴でもなめている方がお似合いだっ」

スタンリーの自分勝手な物言いの後… 全ては動きを止めたのだ。

笑みの形で口元を飾ったまま、何の感情も浮かんでいない瞳で、フエイがスタンリーを見つめていた。

その瞳が何よりも恐ろしい。

主への侮辱に、従者の2人も得物に手をかける。  
今にもとびかかれる姿勢をとって睨む。

いつ飛び出してもおかしくない状況だった。

しかし、飛び出したのは3人ではなかった。

「お似合いだったとしてもお断りよつつっ！！！！？」

フェイの手にとられていた手を取り戻し、守るようにあつた背中から躍り出て、そのままの勢いで言葉と共にスナップのきいた右手が繰り出される。

ばっちーーーーー！！！！！！！！っん！！！！！！！！

豪快な音と共にスタンリーの体が後方に吹っ飛ばされる。

由岐だった。

怒りも忘れて由岐の行動を啞然とフェイは見ていた。

肩を怒らせ、荒い息をつく。

聖堂の中の視線という視線が由岐と吹っ飛んだスタンリーを行き来する。

「似合う似合わないの問題じゃないっ！私があなたを嫌だって言っ

ているのが分からないのっ！！どれだけ馬鹿なのっ！！？」

由岐の怒声が聖堂内に響き渡る。

ぶふっ！

フェイと同じように驚いて固まっていたローの横から、突如聞こえた息を噴出す音。

硬直から抜け出し、ちらりと視線をやると、リーが戦闘体勢を解除して身体を二つ折りにして声を殺して笑っているのが見えた。

剣から手を離してローは困った顔をする。

ローにはさすがにリーのように辺りを憚らず笑うことは出来なかった。

そんな従者の行動にも気付かず、ひたすらフェイは由岐の背中を見つめていた。

満足したのか、もう構っていられないということなのか、くると由岐がフェイに向き直り、帰ってくる。

フェイの前で立ち止まり、フェイの右手を両手で握り締めてくる。

呆けたままに由岐と視線を合わす。

真剣な顔をして、由岐もフェイの瞳を覗き込む。

「あんな人の言うことなんか気にしたら駄目だからね！フェイはフェイのまま素敵だと思う。フェイにあって、あの人には無いものいっぱいだよ！！」

フェイが傷ついているかとも思っているのか、由岐の口から出てくるのはフェイを肯定する言葉だらけ。

後ろでまたも噴出すような音が響いたが、フェイは構っていられない。

「オレにあつて、あいつに無いものとはなんだ？」

由岐がなんと答えるのか興味があつたからか、言葉が口をついて出てしまう。

由岐はすぐには答えず、答えをまとめているのか、思考を巡らすように視線が上に行くのが見えた。

フェイは由岐の答えをじつと待つ。

「んと…人望とか…将来性とか？」

「将来性？」

「数年もしたら全てにおいてスタンリーなんか足元にも及ばないと思う」

「…今のオレは奴に劣っている？」

「ううんっ！！そんなこと無いっ！今でさえフェイの方が勝ってるよ！？」

「身長」

「数年もしたらフェイの方が高くなる。絶対！」

「顔」

「フェイの方がカッコいいし、私はフェイの顔の方が好み。それに今はそれにプラスして可愛いもの！断然フェイの勝ち！」

「…じゃあ、オレのことが好き？」

「うん！…ん？」

何か、勢いに任せて返答をしてしまったような気がして、我に返る由岐。

目の前には満面の笑みのフェイ。

「え…ええと、さっきの言葉もう一回言って？」

「オレのことが好き？」

「えと、私？」

「『うん』と言った」

「…！？」

顔を真っ赤にして忙しなく視線を左右に動かす。

リーと目があつて、にっこりと微笑まれる。

その笑顔につられそうになって、慌てて頭を振る。

「あの！うん、フェイのこと好き…だと思っけどそういう意味じゃ

…」

「オレもユキのことが好きだ」

由岐に言われた可愛らしさを前面に出し、嬉しそうに笑って言うフェイに、それ以上言う言葉が出なくなってしまった。

「ごによごによと」「そうですか…」と小さな声で言つて、下を向く。当分、顔の熱は去りそうにない。

気が付けば、先ほどまで広がっていた緊張感は綺麗さっぱり消えてなくなっていた。

しかし、そのまま丸く収まることはなかった。スタンリーが呻きながら立ち上がったからだ。

「うう…親にも叩かれたことがない僕を2度も…」

情けない台詞と共に。

セイドに支えられながらギリギリとした目で由岐を視線に捉える。  
瞳には未だ由岐に対する執着心が消えず残っており、寒気に教われ  
て由岐は後ずさる。

由岐が後ずさったところにはフェイがおり、後ろから支えられる。  
フェイの温もりを感じて、強張ったからだから少し力が抜けた。

「無様だな、スタンリー・ドリード!! フアライゲラ」  
「何っ」

「今のお前は最高に格好悪いぞ。ユキの気持ちはさっき彼女が言っ  
たとおりだ。ユキがお前に振り向くことは万が一にもない」

「ぐっ…」

「そもそもユキはもうオレと約束したようなものだった。そこにお  
前が割り込んだのだ」

「何を…」

「こういうことだ」

言葉と共に由岐の腕を引っ張る。

引っ張られるままにフェイの動きを追っていた由岐は、顔の前が翳  
ったのを見た。

（フェイ近い…え？）

チュッ

唇に柔らかい感触。

記憶の中にある感触を思い出し固まる。

それはフェイの唇だった。

近すぎてばやけて見えるフェイを固まっただま受け止めながら、由岐はこの世界に来てからのことを走馬灯のように思い出していた。

気付かぬうちにフェイは離れて、放心した由岐が残る。

無意識に手を唇に持っていていき、口元を覆う。

「ユキはオレのものだと決まっている」

驚愕。

困惑。

怒り。

憎しみ。

他にも多々ある感情がその場を覆う。

しかし、全てを無視してフェイは由岐の腰を抱く。

抱くといっても由岐の方がフェイより大きいので、かきつくといった方が正しい。

それを囲むようにリーとローが立つ。

地面に魔法陣が現れ、4人を魔法陣から放たれる光が照らす。

「では、失礼する」

フェイの言葉を最後に、彼らは魔法陣と共に消える。

聖堂にはフライゲラ家の者とその使用人。

護衛や警備兵に、その場に残っていた数人の貴族たちが呆けたように立ち尽くしていた。

「最悪の事態は免れたな……」



「は、はい…」

父の言葉に何とか返事を返しながら、ザイシードは先ほどの光景を忘れられないでいた。

固まる息子をちらりと見て、フライゲラ当主は今後を思う。

（フェイリールド殿下に想う相手が出来た…か。      また周囲が騒がしくなるだろうな……）

今から頭痛がしてくる。

そつと眉間を揉んで、気持ちを切り替える。

さすがに息子より生きてきた年月が違う。

先のことより、今回の出来事の收拾をつけなければならない。いつまでも途方に暮れているわけにはいかないのだ。

（…出来るだけ早く王宮に戻らねば）

固まる息子を正気づけながら事態の收拾に対応するべく動き出すのだった。

## 第29話 辿り着いた先（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

一応、更新前に（たまに後に）活動報告に更新について載せてあります。

よろしくお願いします。

### 第30話 再び

一瞬の出来事だった。

気付けば聖堂ではなく、見覚えのある草原。  
ぱちぱちと目を瞬く。

「ここ…」

「ユキとオレが初めて会った場所だ」  
「！」

口をついて出た言葉に合いの手が入り、ギョツとする。  
程近い場所にフェイの顔。

いや、かなり近い。

フェイは腰に抱きつくように手を回し、下から見上げるように由岐を見ていた。

近くにある顔を見て、唇に目が行き、先ほどの出来事を思い出す。  
抱きつくフェイを押す。

力が入っていなかったのか、存外簡単にフェイが離れた。

パシンッ！

草原に突如響く叩く音。

叩かれてきよんとするフェイ。

目を見開いて固まるリーとロー。

そして 手を振りきった状態で動きを止めて、ぼろぼろと涙を流す由岐。

「ユキ…？」

力なく手を下ろして、由岐が涙を流したままへたり込む。

先ほどとは反対に見下ろす形になったフェイは、流れ落ちる涙を啞然と見る。

「う…ふえ…」

嗚咽が流れ出し、由岐の顔が歪む。

慌てたのはフェイだった。

しやがみ込み、由岐の頬に手を当てる。

拒絶されるかと思ったその手は、そのまま由岐の涙を受け止め、濡れる。

「ユキ…泣きやめ。…泣きやんでくれ、頼む」

とても困った顔をして、由岐の涙をすくうフェイの手はどこまでも優しく、余計に涙を誘った。

由岐のしゃくりあげる喉の音が長い間その場を支配する。

「ユキ」

「フェ、フェイのバカァ…」

「何が馬鹿なんだ？」

「んっ… ファーストキ、キスだけじゃなくセカ…ンドキスまで  
勝手に…」

「ふぁーすと？…せかんど？」

嗚咽を零しながら喋る由岐の言葉で聞きなれぬ言葉があり、首を傾げる。

ギョツと顔をしかめて、涙が流れるのをそれ以上はと我慢するような顔をして由岐が頬をぬぐう。

意味が分からぬものだから、フェイは返す言葉が出てこず、ただ困惑する。

「ユキ…すまない…意味を教えてくださいませんか？」

「うう…もついい…カウントしないから」

「何がいいのかわからない。でもそれは駄目な気がするぞ」

「…主」

「なんだ、リー？」

「察するに、ユキの言いたいことは」

「リーさんっ！」

「主とのキスが初めてだったということかと。そして…主とのキスは数に入れないと…」

制止する由岐の言葉は意味を成さなかった。

リーは正確に由岐の言ったことをフェイに伝えてしまう。  
目を最大限に見開き、ついで怒った目で由岐を見据える。  
その強い視線に腰が引ける。

フェイはそれを許さなかった。

「オレとのキスをなかったことにすると？」

「あ…うっ…」

「それは許さない」

「だ、だって」

「だってもない。…責任なら取るから安心しろ」

「…え？」

目元を擦る手を取られて握られる。

フェイの瞳から視線を逸らすことが出来ず、次の言葉を待つ。

「これからずっとお前を守ると誓う」

「えと…前にも聞いた？」

「あれとはまた違う。ユキの一生をオレにくれ。オレの一生はお前のものだ」

「え？…ええー！ー！！？プププ、プロポーズッ！」

「ぷぷぷるぽーず？」

「違うっ！結婚の申し込み！？」

「けっこん…ああ！そうだ。婚姻の申し込みだ」

「！！！！？」

言い回しが多少回りくどかったが、結婚の申し込み　プロポーズ。

由岐の目の前で真剣に見つめてくるフェイに言葉が真実味を帯びていく。

顔に血が上ってくるのがわかる。

さぞ赤くなっていることだろう。

しかし、真剣に好意を伝えてくる目の男は、まだ結婚するにはほど遠い幼い年恰好で。

嬉しく思う気持ちと共に、先ほどのまでの悲しみが消え、笑いがこみ

上げてくる。

別に、由岐はフェイを馬鹿にして笑いたいわけではなかった。心が沸き立つような気持ちでいっぱいになった。

自分のこの感情が分からなくて戸惑う反面、心が何か満たされていることが分かる。

由岐の口元にはつきりとした笑みが上った。

「　　気持ちだけ」

「え？」

「気持ちだけ貰っておく…結婚の申し込み…。その年で一生のことを決めるなんて早すぎるよ。…でも…嬉しかった…ありがとう」

小さく『おませさん…』と由岐は呟くが、別にフェイに聞かせたくて言った言葉ではないので、聞こえていないだろう。

だが、フェイは由岐の返事に納得しなかった。

自分に向けられた由岐の笑顔を見たからか、嬉しそうな、でも怒ったような複雑な表情になる。

ニコニコと笑う由岐にどう言っているのか分からず、口をパクパクと開ける。

言葉は出てこない。

「…もっと大きくなって気持ちが変わらなかったら…あ、あの…もう一回…」

頬を染めて由岐が俯く。

その顔が可愛いと胸をときめかせながら、由岐の言葉を反芻する。

『…もっと大きくなって気持ちが変わらなかつたら…あ、あの…もう一回…』

フェイの目が輝く。

しかし、由岐は恥ずかしがって、俯いているせいでそんなフェイの表情の変化に気付かない。

そっと握った手を離す。

手の温もりが消えたことで、俯いていた顔を由岐が上げる。それに笑みを返して離れる。

「その言葉、忘れるな」

フェイのキラキラと輝く瞳に魅入られ、由岐はその瞳から視線を離すことが出来なくなった。



### 第30話 再び（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

### 第31話 全ては色を変えて（前）

「フェイ様まさか……」

ローが何かに気づいたのか、顔を上げる。  
視線の先、フェイの瞳とぶつかって、その意を否応無しに理解する。  
ため息がこぼれた。

「これからのことは内密に……な」

「……『内密に』って、格好良く言っても要は王と……母君様たちにはばらすなということでしょう」

「分かっているなら黙ってる」

「……」

ローを黙らせて腰元からあるものを取り出す。

取り出したものは何の変哲もない片手を広げたほどの長さの棒。

ただし、そこらへんで採取できる木の棒などではなく、表面はつるりとしていて、六角柱の形の何らかの金属で出来たもの。  
フェイがその表面を撫でると、たちまち形状が変わった。  
手のひらサイズから足元から腰くらいまでの長さに。

目を見張る由岐をそのままに、その棒を使って自分を囲むくらいの大きさの円を描きはじめる。

「主、それは？」

「魔力が外に漏れなくするための魔法陣だ。今回は下手に魔力で陣を形成するわけにはいかないからな」  
「なるほど」

リーの質問に答えながらもフェイの手は淀みなく動き、魔法陣を完成させていく。

「こんなものか」

問題なく完成したのか、棒を上にながめる。

すると、棒は空中でみるみるうちに元のサイズに戻り、フェイの手におさまる。

「…フェイ」

「うん？」

「なあに、それ？」

どうしてもフェイの持つ棒が気になって、由岐が我慢できずに質問する。

フェイは手のひらの上で棒を器用にくるくる回しながら由岐のほうを向く。

「これが。これはオレの作った魔道具のひとつだな」

「魔道具？」

「魔道具とは魔法を使うための補助をする道具とっていただければ良いと思います」

「補助だけではないのだが…まあ今回はそれでも構わん」

ローの説明に不満そうに鼻を鳴らすフェイ。

「主は魔道具を作るのが趣味だったりするの。とても役に立つものを作るのだけど、時たま変なものを作るから大変だったりするのよ」  
「リー」

「本当のことでしょ、主」  
「…」

「それで、今フェイが持っているのはその棒は？」

「これは…これといって大きな能力があるわけではないぞ。大きくなったり小さくなったりするのが基本能力かな」

「基本って事は他にも能力があるってこと？」

「ああ…まあな。だが、そうそう使うような能力ではない」

「ふ…ん？」

「先ほど見た通り魔法陣を描くのや、護身用の剣代わりに使われていますね」

「主はものぐさだから、とてもお似合いな道具です」

「お前等…」

「俺は説明しているだけです」

「一蓮托生だろうが。ロー」

「何が一蓮托生なんだっ！」

「…もういい。やめろ」

「…はい」

「…概ねこんなところだ」

「…ありがとう」

どうしてもシリアスになりきれず肩を落とすフェイに、由岐が引きつった笑顔で礼を言った。

金属棒を腰元に戻し、魔法陣の中にフェイが足を踏み入れる。  
まっすぐな目線に自然と由岐の背が伸びる。

「ユキ、先ほどの言葉忘れるなよ」

「?…うん」

いまいち信用できない反応に肩をすくめてフェイは目を閉じた。  
ゆらりとフェイのひとつにまとめた髪の毛が風も無いのに揺れる。  
一拍を置いて、髪の毛だけでなく、服の裾などが何かに煽られて右  
に左にと引つ張られるように動く。

よく見れば、身体を中心として光の粒子がぐるぐると目まぐるしく  
回っているのが分かった。

どんどんとその粒子の動きが速くなる。

速さだけでなく、光りも大きくなり、今は眩しくて目を細めてみる  
のが精一杯だ。

「無理して見続けない方がいいですよ。少々圧迫感があるかもしれ  
ませんが、魔力じたいはフェイ様の魔法陣の中でおさまっております  
ので、身体に影響は無いかと思えます」

「そうそう。もっと眩しくなるはずだから見続けちゃうと少しの間、  
物が見えなくて困ることになるわよ」

「あ、はい」

2人の助言を受けて素直に目を閉じることにした。

目を閉じても肌で感じるものがある。

びりびりと肌を震わす力と、目を閉じても差し込んでくる光に耐え  
る。

数分のことだったと思う。

しかし、目を閉じていた時間が由岐には途方もない時間に感じられた。

ひととき強い力と光が辺り一帯に弾ける。

何もかもが光に染まった。

耐えている間に全ては終わったようだった。

気付けば確かに、目蓋の裏に射しこんでくる光はなくなり、肌をびりびりと震わせていた力も感じない。

「ユキ」

ゆっくりと閉じた目を開けようとしたところに声をかけられてその動作を止めてしまう。

名前を呼ばれた。

口調も声もフェイのものだ。

由岐はそう思ったが、名前を呼ぶその声は今までと違っていた。

フェイの声だと思ったが、何故か数段低い。

訝しげに眉をしかめる。

止めた動作を再開させて目を開けるが、やはり途中まで光を注視したせいか、視界が霞んでいた。

数回瞬くが、はっきりと景色が見えない。

もどかしくなつて、「うううう」と唸りながら手で目を擦る。

「擦るな。少し待てば治る」

声と共に腕をとられてまた止まる。

由岐は目を見張った。

自分の腕を掴んで止めたその手は大きく、固い感触を伝えきたのだ。フェイの手は外見に見合った柔らかい感触がしたはずだ。

そして、大きな手ではなかった。

色々なことが食い違いを起こし、動揺が胸を訪れる。

動揺を胸に動かなくなつた由岐を上から覗き込む視線。

そう… 上から。

由岐の顔に影がおちる。

時間は由岐の心の揺れも気にせず進み、瞳は景色を露に映す。

瞳に映つたものは。





第31話 全ては色を変えて（前）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

…出してしまいました。如 棒（笑）これからどう使われていくかは、謎でもなんでもないと思います…。

### 第32話 全ては色を変えて（中）

「…え？」

無理して途中まで見ていた光のせいで霞んだ目が治って最初に見たものは、人の顔だった。

由岐の見たことのない顔。

いや、ところどころのパーツに見覚えがある。

「治ったのか？ユキ」

「もう少し早めに目を閉じることを勧めるべきでした」  
「そうね。ごめんね、ユキ」

目の前では1人の青年とローとリーが話をしている。  
リーの謝罪に、青年から視線を離さず頭を振る。

「辺りに影響は」

「見える範囲は何も」

「こちらも」

「そうか」

身長は180を超えている。

スラリとした体躯だが、要所要所にきちんと筋肉がついており、なよとしたところなどは一切見受けられない。

リーたちと話す姿は堂々としていて、なんの違和感もない。

青味がかつた銀色の髪が背中に流れており、瞳は紫。

そう、紫なのだ。フェイと同じ…

「に…」

「主？」

「フェイ様？」

「…ユキ？」

不意に青年が話を途中でやめて、自分のほつを見たことに由岐は息を詰める。

青年に名前を呼ばれたことに目を見張る。

リーは何といった？

ローは目の前の青年をなんと呼んだ？

不思議な色合いを見せる青年の瞳を凝視したまま、由岐は指ひとつ動かすことが出来なかった。

由岐はその瞳を知っていた。

自分の名を呼ぶそのトーンを知っていた。

ものは違えど、目の前の青年を形作るところどころのパーツを知っていた。

それは

「フエイ？」

由岐は信じられない気持ちでひとつの名を呼んだ。

返事なんて返ってきて欲しくなかった。

だが、願いは儚く散る。

「うん？…分からなかったのか」

青年　フエイが微笑んだ。  
笑うその姿はそのままだった。

由岐たちに遠慮したのか、離れた場所でリーとローは居た。

「私としてはあちらの主の方が可愛くて好きなんだけどなあ」  
「リー！」

「ローだってそう思うだろう？元に戻った主は可愛くない」  
「お、俺は…っ！というか、あれが本来のフエイ様の姿だ。俺たち

の好みは関係ない！」

「む…そうだけどさあ」

「…それに、当然あの姿には戻れない。今くらいはフェイ様の我俣を通して差し上げるべきだ」

「確かに。まあ、別にどっちの主も私にとって守るべき大切な御方にかわりはないし？」

「その通りだ。我らの大切な主君だ」

フェイの姿を見て不満そうにリーが言うと、ローが反論する。

言い争いになるのかと思えば、2人して分かり合って頷いている。仲の良い双子だった。

場面を戻してフェイと由岐。

由岐は依然フェイを見たまま固まっていた。

フェイの手が上がり、由岐の頬に行き着く。

優しく頬を撫でた手は由岐の顎を掴み、上に持ち上げる。

持ち上げられるままに顔を上げて、視線を逸らすことも出来ずに、ただフェイを見上げる。

「ユキ」

「フェイ」

名を呼ばれて反射的に相手の名を　口にする。  
更に口端を弓なりにして目を細めるフェイ。

「どうだ？」

「え……」

「ユキ好みにオレはなっているか？」

「っ！？」

言葉を理解した途端、由岐は顔を真っ赤にした。

反応を楽しそうに見ながら、フェイは顔を近づける。

視界いっぱい広がるフェイの顔に、由岐の心は過去に類を見ないほどに揺れ動く。

あと数センチというところで顔を止め、フェイは由岐をじっと見つめた。

「フェ、フェイツ」

「もう一度言おう。」

ユキが好きだ。…お前の一生をオレにくれ」

「！……！？」

返事を返す間もなかった。

いや、すでにいっぱいだった由岐にはすぐに返せる言葉などなかった。

由岐の視界を占めるフェイの顔がぼやけて見えなくなる。

つまりそれは

「んうっ！」

フェイと由岐の顔が重なった。

由岐はフェイのなすがままにキスを受ける。

ギュッと目をつぶってフェイの服の袖を握る。

その仕草にフェイが喉で満足そうに笑うのだった。



第32話 全ては色を変えて（中）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

### 第33話 全ては色を変えて（後）

ゆつくりとフェイの唇が離れていく。

それを呆けたように見送る由岐に、笑みと共にフェイが彼女の口元をぬぐう。

それでも由岐は頭がうまいこと回らず、ぼんやりとしている。

「どうした？もう一度してもいいのか？」

名残惜しげに口元から手を離して、耳元で囁く。

直に聞こえてくるフェイの声に、由岐の体が面白いほどに揺れた。

由岐の手がフェイの身体を押し戻そうとする動きを見せる。  
全然力が入っていないかったが。

「それで返事は？」

「へ…返事？」

その意を汲まず、押す手を無視して喋る。

由岐の体がひっきりなしに揺れるのをフェイは悪いことに、楽しんで  
いた。

震える声で鸚鵡返しに口を開く由岐に、また耳元に声を落とした。

「大きくなったらもう一度云えと言った。騙すような形になってす  
まないが、こちらがオレの本来の姿だ」

「な……」

耐えられなくなったのか、もう一度胸板を押される。  
それに今度は抗うことなく距離を置く。

「これには色々とあつてな……追々話す。もう一度自己紹介といこう。  
オレの名はフェイリールド・セファ¨リオーレ。この世界¨リカル  
ドにて最大を誇る5大国の1つ　リオーレ国現国王が第3子。¨  
それがオレの肩書きだ」

まっすぐ由岐を見据えてフェイが言う。

しかし、混乱している由岐にはすぐに言葉が飲み込めなくて静寂が訪れる。

静寂といっても、野外に居るので、風の音や葉のこすれあう音などが耳を騒がせない程度に聞こえてくる。

「……」

サワサワサワ……

「……」

チュピチュピ……

「……」

銅像のように黙り込む由岐を見守っていたが、いつこうに反応が返ってこずにフェイは困っていた。

「主」

声をかけようか迷っているところに、声がかかって、声のした方に視線をやる。

視線の先にはリーとローが草むらに腰を下ろしている姿があった。

「ユキの頭の整理がつくまで放っておいた方がよろしいかと思ひます」

「俺もそう思います」

「…だからと言ってそれは」

「ずーっと動きっぱなしでしたから、休めるうちに休むべきです」

「今のところ、周囲に危険はありません」

「…」

「フェイ様、ミムの葉のお茶がありますよ」

「主、ミムの実の焼き菓子もありますよ」

「…」

彼らはどこまでもフェイの従者だった。

唐突に思考が戻り、身体に風を感じる。  
パチパチと瞬きする。

視界に広がるのは空と地面。

空には流れる雲が浮かんでおり、地面では草が風に煽られて揺れている。

眉間に皺がよる。

いつもの由岐だったらボウツとその景色を眺めていたことだろう。しかし、今は目に見える景色に不満があった。

そう… 目の前に居るはずの人物がいなかったからである。

フェイが視界の中にいないという事実には、由岐はどんどん不機嫌になる。

だが、一転してその顔が曇った。

不安が由岐を襲う。

動転するばかりで、満足にフェイに言葉を返すこともできず、固まっていたのは自分自身だったことに気付いたからだ。

そして、フェイが自分の前から離れたことでさえ気付かなかった。

由岐はフェイに呆れられたのだと思った。

視界が揺れる。

いや、瞳が涙の海に溺れそうになっていた。

我慢しようとして身体に力が入る。

それでも涙は湧いてきて、瞳いっぱい満たして外に零れ落ちる寸前だった。

「やっと戻ってきたと思えばどうした？」

その指は由岐の後ろから現れた。

そつと目元を触られて目を見開く。

目を見開いた拍子にいつぱいになっていた涙がポロリと零れて、目元に添えられた指を濡らす。

手を辿つてゆつくりと振り向く。

そこには由岐の求めた姿があった。

「ユキ？」

「…う」

「？ユ…ッ！」

顔を歪ませた由岐の前に、フェイの心配そうな顔があった。

フェイの姿がまた消えてしまわないように、由岐は抱きついた。

今度はフェイが目を見開く番だった。

ギユウツと背中の中を握られて皺がよる。

フェイも由岐の背に腕を回す。

「気付いたらオレがいなくて驚いたのか？」

「…」

「…すまない。ユキから離れて」

「ッ…」

フェイの言葉で服を握る手に力が入ったことで答えを知る。  
柔らかに抱きしめて、労わるように背中をさする。

「…で」

「ん？」

「…急にいなくならないで」

「分かった」

「気付いたら…フェイがいな…つくて」

「うん」

「なんでって思っ…て…でもすぐ不安に…」

「…うん」

「わ、私がすぐ…に返事しな…ったか…ら」

「そんなことはない。オレが悪かったからもう…自分を責めないでくれ」

「っ…」

由岐を労わるフェイに背を撫でられて、少しずつ落ち着いてくる。

小さい時のフェイと違って、今のフェイは大きくて、すっぽり包むように抱きしめられて何故か落ち着いた。

落ち着きすぎて、瞼が下がりそうになる。

自分を叱咤して顔を上向けた。

真摯な瞳とぶつかって、固まりそうになったが、意志の力でぐちゃぐちゃになりかけた様々な感情をねじ伏せる。

「フェイ…」

「なんだ？」

「…先に…私の話を聞いて欲しいの」

由岐は落ち着いたことによって、まずは話さないといけないことがあることに気付いたのだ。

自分がこの世界の住人ではないこと。

これが一番の問題だ。

先ほどは驚いて思考回路停止にまで陥ったが、フェイがある国の王子だということは由岐にとってそれ程重要なことではなかった。

王族なぞに関わるということは、思っている以上に大変なことだとは理解しているつもりだ。

だが、フェイに好意を持ってしまった以上、それはもう乗り越える前提にあるもので、恋を諦める理由にはならない。

由岐は、伊達に運命の恋に憧れていた訳ではないのである。



第33話 全ては色を変えて（後）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 話すべきこと（前書き）

ユニークアクセス1万を超えました！  
ありがとうございます！！

## 話すべきこと

私は包み隠さずフェイに話した。  
フェイも口を挟まずに話を聞いてくれた。

今から話すことは、全て真実なのだと一言告げて、生まれた場所やこの世界のことをまったく知らないことなどを出来る限りわかりやすく伝えたつもりだ。

話した時間は長かったのか、短かったのか私には分からない。  
一言付け加えるなら、側に居たはずのリーさんとローさんが話す前から居なくなつて、話し終えても帰ってくる気配を見せないことだけ。

伝えるべきことを伝えて、私は彼を見つめる。

やはり見飽きることなど到底出来ない紫色の瞳。  
どうしてこれ程までに私を魅了するかなんて分からなかったけど、そんな理由なんてこの瞳を見ていられる時間を削ってまで考える必要性を感じなかった。

飽くことなく見ていたら　笑われた。

笑ったときに細められた瞳にまた囚われて、「ああ…重症かも」な  
どと声無く呟いた。

そういえばと気付く。

話したことへのフェイの感想を聞いていなかった。

「どうした？」

私の表情が変わったことを目ざとく見つけたフェイが聞いてくる。

限りなく優しい声。

いたたまれなくなつて、耳が熱くなる。  
きつと赤くなつてる。

隠したい衝動を何とか引き止めて、口を開く。  
だけど、喋ったのはフェイの方が先だった。

「耳が赤いぞ」

余計なお世話だ。

耳だけでなく、顔中が熱くなっていく。

今度は隠したい衝動を止めることなど出来なかった。  
ぱっと両手で顔を隠す。

その途端、フェイの笑い声が聞こえた。

むかつく。

でも、手をどけて反撃するなんて今は出来ない。  
歯を噛み締めて唸る。

余計に大きくなる笑い声。

本当に……どうしてくれようか。

復讐方法を1つ2つと考える。

やばいことに10以上は軽く考えられそうだった。

笑い声が急激に止まる。

なんで?と思った矢先に、手首を掴む感触と共に目の前が光で覆われる。

目をつぶって開いてみれば、そこには意地悪そうなフェイの顔が間近にあった。

「!!!!?」

驚いた驚いた驚いたっ!?

慌てて自分の手を引き戻して距離をとろうとした。

でも阻まれてそのまま。

ワタワタと腕を動かすが、いつこうに思うようにならない。  
悔し涙が浮かぶ。

唸って睨みつける。

私を拘束している犯人は、ジッと私の顔を見てニヤリと笑った。  
今までで一番悪そうな笑みだった。

顔が寄ってくる。

顔を俯けて視線から逃れる。

でもフェイは止まらなくて、耳元に呼気を感じた。

「ユキの泣いた顔もいいな」

固まった。

本当に見事なほどに固まってしまった。  
涙もひっこむってもんだ。

そんな私の耳に零すようにフェイは言葉を落とした。

「ユキがこの世界の住人じゃなくても構わない。      オレはユキが  
好きだ」

## 話すべきこと（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

リーとローがどうしていないのかは前の活動報告内にてちょっと記載してあります。よければお読みください。

### 第34話 かえってきたもの

フェイと由岐は、初めてであつた岩場で座り込んで、色んな話をした。

由岐がフェイをまともに見ることはなかったが。

フェイの何度目かになる告白に、羞恥心メータが振り切れてしまつたらしい。

始終、顔を俯かせたまま、由岐はフェイの話に相槌を打ち、自分のことや疑問に思つたことなどを質問したりした。

そんな由岐に、フェイはニコニコと笑みを崩さず疑問に答え、とても機嫌がよかった。

1時間以上は過ぎたころ、リーとローが木々の中から姿を見せる。

2人はとても疲れた顔をして、やって来る。

「帰つたか」

フェイの言葉に由岐も2人の帰還を知る。

2人のぼろぼろの姿に目を丸くする。

これといって破れているところなどは無いが、いたるところがくたびれていたり、汚れていた。

ついでに言えば髪の毛もかなり乱れている。



いや、グシャグシャといった方がよいのかもしれない。

「リーさん…ローさん…」

「ただいま帰りました」

「遅くなり、申し訳ありません」

由岐の疑問だらけの視線に、そつと目線を落とすことで、お願いだから聞かないでくれと声無き声で伝えて、2人は膝をつく。

フェイは鷹揚に頷いて、由岐の方を振り向く。

フェイが振り向くとは思っていなかったので、咄嗟に視線を逃がすことも出来ず、2人の視線ががちりと合う。

まだ恥ずかしさが残る由岐は、また顔を俯かせてフェイの視線から逃げようとした。

が、フェイに顎を掴まれてしまい、視線を逃がすことに失敗する。あっちへこっちへと動く目線を眺めて、フェイは優しく話しかける。

「そろそろ慣れる。慣れないなら慣れるまでキスして、由岐の好き<sup>よ</sup>ところを褒め称えてみようか」

話し方は優しくても、言動は全然優しくなかった。

「！わ、わわ分かった！頑張る！！」

「ユキはよい子だな」

「…」

もし小学校高学年にしか見えない姿で言われていたら、キレていたかもしれないが、フェイは今、由岐より年上の姿だ。

怒るよりも子ども扱いされたことにちよつと悲しくなった。

由岐の微妙な変化に気付いたフェイが口元にささやかな笑みを刻むが、何も言わなかった。

「ユキとの話は終わりましたか？」

「ああ。…いや、終わってはいないな」

「え？」

「…まだ会ってから少ししか経っていないんだぞ。お互いが満足できるほどの話をあれだけの時間で話し終えるなど、無理があるだろう」

「…」

「オレはユキをもっと知りたいし、オレのことをもっと知ってもらいたい。どうだ、ユキ？」

「うん…私も…フェイのことをもっと知りたい」

由岐の返答に目を細めて、もたれていた岩肌から離れて立ち上がる。由岐の手を取り、由岐の身体も起こした。

チャリ…

フェイの胸元から金属の擦れる音が微かに聞こえる。由岐の手を引つ張った体勢でぴたりと動きを止める。音の正体を思い出してフェイは胸元を探った。

「ユキ」

「？…それ！」

「お前のものだろうか？」

「うん！何処にっ」

「ユキが連れ去られてから、ユキの気配を辿る為に、この場所にもう一度訪れたときに見つけた」

フエイは、話しながら由岐の手のひらの上にのせる。  
無意識に震える指でそつと手の上の物を触った。

チャリ…と、擦れる音。  
固い感触と冷たさ。

由岐はその感触に瞳の奥が熱くなるのを感じた。  
つうつと涙が一粒頬を滑り落ちる。

フエイから渡されたのはブレスレット。  
由岐のものだ。

それは、ただのブレスレットではなく、母に16歳の誕生日に貰った特別なものだった。

色とりどりの 様々な種類の石が、1つだけ、他とは比べ物にならない大きさの石に寄り添うように配置されている。

石はただの道端に落ちているような石ではなく、全て、色も種類も違う宝石。

金額は教えてもらっていない。  
でもそんなことは由岐にとってどうでもよいこと。  
ただ それは母が、母のお母さんから譲り受けたものであるということだけが大切なこと。

母 離亜は言った。

「次は…由岐が好きな人と結ばれて、子どもが出来て、その子が16歳になったときに渡してあげてね」

いきなりの出来事にすっかりその大切な存在を忘れてしまっていた罰当たりな由岐。

どうして忘れることが出来たのだあろうと自分を由岐は罵りたくなる。

自分の元にかえってきたブレスレットの重みに、確かに足りなかったものが戻ってきた喜びを今、ひしひしと実感していた。

手のひらの中に包んで、顔を寄せる。

その間、フェイも、リーも、ローも、口を挟まず由岐を見守っていた。

閉じた目元からポロリとまた涙が落ちる。

「フェイ…ありがとう」

目を開けて、由岐は感謝の意を述べる。

その時の顔をきつとフェイは忘れることは無いだろう。

ブレスレットを渡したときにきつと見せてくれるだろうと思った笑み以上の笑みが、その場に在ったのだから。

由岐は天使のような清らかな笑みを湛えていた。



### 第34話 かえってきたもの（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

### 第35話 時は流れて進みゆく(前)

「今後のことなのだが … ユキ」

「うん？ なあに？」

「…リー」

「ぶふっ… はい、主っ！」

「…」

初めて出会った草原から移動して、今は宿屋の一室。皆椅子に座って話をしているところだった。しかし、全員違った表情で向き合っていた。

フェイは仏頂面で。

ローは苦笑いを。

リーは口元を押さえて噴出しそうなのをこらえて。

そして、由岐はニコニコと満面の笑みだった。

なぜこのような状態になっているかというところ…。

「もう駄目ですっ！ぐっ…はっ！…あはははははははっ！…」

リーがテーブルを叩きながら悶絶する。  
それを無然として見下ろすフェイ。

「不敬罪」

フェイの言葉と共に唐突にリーの笑いが止まり、テーブルの上に突っ伏す。

「？リーさん??」

突っ伏したまま動かないリーを由岐が覗き込もうとするが、ローによって止められた。

「そのまま…置いてください」

目線を斜め下に逸らして。

若干青ざめていたのだが、由岐は気付かない。

「ユキ」

再度フェイに呼ばれて振り向いて、やっぱり笑みが上がるのを抑えることができず、由岐は笑ってしまう。

フェイが複雑そうな顔をして、盛大なため息をついた。

どうして由岐が笑うのか。

そして、フェイが不機嫌な顔になるのか。

それは、フェイの姿がまた小さくなっているせいであった。



時間を遡ること50分ほど前。

由岐がフェイに母から誕生日に貰った大事なブレスレットを返して  
もらってから少し経った後のこと。

今後の行動について話し合うことになり、移動することになった。

最初は、そのまま草原でという意見もあったのだが、時間的にもそ  
ろそろ気温の下がる時間帯に差し掛かるということで、駒鳥亭に移  
動と相成った。

場所を決めて、さあ移動するぞといったときに、歩き出そうとした  
フェイをローが止めた。

「ロー？」

「フェイ様、街に戻る前に元の姿にお戻りください」

ピシリと空気が固まる。

フェイを中心として。

「ロー……」

「フェイ様のお気持ちお察しますが…そのお姿で街を歩きますと  
問題があります」

「そうですね。主、ちゃっちゃんと元に戻りましょう！ここは今のと  
ころ余所者の気配はありませんので大丈夫ですが、この後も大丈夫  
かと問われたら保障できかねます。…本当はそちらの姿に戻ること  
は禁止されているのですよ？これ以上の不利になりそうな行為はお

「慎みください」

「リー……」

「フエイ？……その姿に戻ることはいけないことだったの？ご、ごめんね……私のせいで……」

「違うっ！オレがこの姿に戻ってユキに想いを伝えたかったから戻っただけだ。ユキのせいではない。オレが決めたことだ」

「でも……理由は分からないけど、その姿でいたら危ないのしょう？フエイに何かあったら……」

「……分かった。もう元に戻る」

ローとリーにかわるがわる言われた上に、由岐に心配されて、フエイは不承不承元に戻ることを了承する。

由岐の顔に安堵の笑みが上るのを見て、ほっとする。

フエイはいつでも由岐に笑って欲しいと思っていた。

由岐たちの見守る中、先ほど使用した魔法陣の中に入る。

一度使ったもののため、ところどころ消えかけていたが、フエイにとって問題は無かった。

先ほど元の身体に戻るために使ったということが重要だった。

魔法陣の中心にて足を止め、魔力で新しい魔法陣を展開させる。

先ほどの魔法陣に重なるように展開させた魔法陣を合わせた。

一瞬強い光が現れるが、すぐに光はなりを潜めて消える。

フエイを囲むように展開された魔法陣は融合し、紋様をもつと複雑なものに変えていた。

「！」

由岐はフエイの頭上に輝くものを見つけた。  
それはエメラルド色の茨。

途切れることなく伸びていて、フェイの頭上で円を描くように絡み合っていた。

茨を怖いと思う反面、透き通って儚げな茨は幻想的で、由岐の視線を奪う。

だが、その思いもそこまでだった。

フェイの頭上を旋回していた茨はシュルシュルとその身を解き、フェイの身体に絡み付いていく。

足。

腰。

腕。

手。

そして 首。

由岐は悲鳴を上げかけた。

「ユキ、大丈夫」

いつの間にか側に来ていたリーが肩を寄せてきて、ソツと囁かれた。

「あれは痛くないから。よく見て頂戴。主は痛そうな顔をしている？」

「…うつん」

よく見てみるとフェイは平然とその場に立っていた。そのことに由岐も平静さを取り戻す。

「ごめんなさい…取り乱して」

「いいのよ。私も最初は驚いたし、心配したわ」

ウィンクしてくるリーを見て、無駄に入っていた力を抜く。

空中にあった茨もあと少しで全てフェイの身体にまきつくといったところだった。

「次の方がもつと衝撃的よ」

「へ？…ひっ！？」

全ての茨がフェイの身体に。

エメラルド色の茨は一気にその身を深紅へと変える。

禍々しさなんて一筋も無い。

しかし、ぞつとするほどの赤さだった。

知らず、一歩あとずさってしまう。

由岐の目にその赤さを焼き付けて、茨はその姿を消した。

ハッと正氣に戻ったときには、目の前に幼い姿のフェイが立っていたのである。

そして、初めて出会ったときの小学校高学年くらいの姿のフェイと共に宿に戻り、今に至るのであった。

「ユキ…お前は本当の俺よりもこちらのオレの方が…好きなのか？」

幼い姿に戻ってからずっと笑みの絶えない由岐に、フェイが我慢できなくなつて聞いてしまう。

数秒もしないうちに聞いたことを後悔する。

「え……いや……そんなこと……は」

口ではこう言いながら、由岐の顔が全てを物語っていた。  
がつくりと肩を落とす。

「自分が恋敵……か」

フェイは、リーの横に突っ伏すのであった。

### 第35話 時は流れて進みゆく(前)(後書き)

読んでくださっている方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

### 第36話 時は流れて進みゆく(後)

「最初に謝っておかなければならない」

フェイはそう言って口火を切った。

その言葉と共に、部屋の空気がピンと張ったような気がした。

ローとリーも真剣な顔。

由岐も皆の様子に促された形で、背筋を伸ばした。

「オレはユキを城に連れて行くと言ったが、今の城はオレにとって安全なところとはいえないのだ。…オレはリオーレ国王の子どもの1人で、王位継承権は第3位だ。上に兄と姉が1人ずつ、下に双子の弟と妹がいる。わが国では男も女も王位継承権を平等に持っているが、継承権2位の姉がこの度結婚することに相成った。結婚することで姉は王位継承権をなくし、順繰りにオレが継承権2位に上がる。多分これが原因の元だと思う。いや、前々から水面下では色々あったのだが…まあ、激化したんだ。」

「激化？」

「ああ。オレを排斥しようとする輩の動きがな」

「！」

「はつきり言っておレには王になる気が無い。しかし、そんなオレを王位につけたい輩も存在する」

「ことあるごとに言いますものね。主は」

「王位継承権を返上すると国王に言いましたね…」

フェイの言葉に裏付けるようにリーとローが口を挟む。

「今はもうそんなことは言っていないだろう」

「どうして？」

「オレが継承権を返上してしまえば、弟と妹のほうに飛び火してしまうからな。弟たちはまだ幼い。自分にふりかかる火の粉を振り払う力はまだ無い」

「フェイ……」

「今のところはオレを王位につけようとする輩どもは身を潜めているようなものなのだが」

「？」

「そう！その理由こそが今の主の姿なのよっ！」

「……フェイ様がこの姿になられてから奴らは周囲を窺っている状態だ」

「フェイ？」

「そういうことだ」

ハア。

大きなため息をひとつ。

フェイは冷めかけたお茶を口に運んだ。

「どうして今の状態になったのかというと、弟のせいだな」

「お、弟？」

「弟君はセフォイド様と言います」

「そう、セフォイド様」

「弟は魔法の練習中に魔力を暴走させてしまったんだ」

「よくあるのよ」

「セフォイド様は制御がまだ上手くなくて……」



「最悪なことに、あの時は大掛かりな魔法陣を組んでいな…。魔力の暴走と魔法陣の組間違いでまったく新しい魔法が出来上がった」

「よく暴走するんで、上級の魔法使いがいつも何人かついていますが」

「あの時はある事故とやらで上級魔法使いが出払っていたものだから、主がセフォイド様の練習に付き合っていたんですね」

「…」

「あの時は圧巻だったぞ。先ほど見たと思うが、魔力で出来た茨が部屋中を覆いつくし、今にも部屋の外へ出て行こうとしていた。咄嗟に部屋から魔力で出来た茨が出て行かないように結界を張り、茨の外への流出を止めた。だが、そこで予想以上の魔力を消耗してしまった弟が倒れてしまつてな…部屋を出ようとする動きしかしていなかった茨が突如として不可解な動きを見せ始めた。まあ、弟が倒れたことにより、わずかばかりであつた制御の力が失われたせいだと思つ」

「主は部屋中を覆い尽くしていた茨を自分の身の内に全て受け入れた」

「それしかすぐに収めるすべがなくなつてな」

「そんな無茶するところが、主が主たる所以ですよ」

「で、今に至るわけだ」

「はあ…」

聞くだけで精一杯だ。

由岐はなんとか頭の中で手に入れた情報を整理しようと努める。

「この姿では王位を頂くのは無理だろう」

にやりと笑うフェイ。

「主はすぐにも解除しようとしてましたけどね」

「元に戻るのっ!？」

「先ほど戻っておられたでしょう。しかし、王に王妃に…いえ、王族の方々が全員でそれを止めたのです」

「ど、どうして…」

「それは」

「今の主が可愛いからですっ!」

「…」

「…」

力いっぱい力説にその場が沈黙する。

リーの瞳がキラキラと輝いている。

ソツと輝く瞳を視線から外す。

「自分の仕出かしたことは自分で解決させるようにと王妃様が仰せられたのです」

「我らリオーレ王家の家訓の1つというわけだ」

「自分の尻は自分で拭けということね」

「何だそれは?…いや、意味合いは分かるが、女性が使う言葉ではないというか…」

「ええと…ごめんなさい」

「いいのですよ!確かにその通りです!!ですが、今回のことは」

「」

「ちよつと黙っている、リー」

「むごごー!」

まだまだ瞳を輝かせて口を開こうとしたリーをローが諦めに近い顔をして、口を塞ぎにかかった。

「この身体では色々と煩わしいこともあるが、それ以上に煩わしい

案件が少しの間とはいえ、この身から去るのならばと諦めた」

フェイはリーをちらりと見て目を逸らし、苦笑いで由岐に説明する。フェイの表情を見て、テーブルの上にあるフェイの手に自分の手を重ねる。

「フェイ……」

「ユキの手は暖かいし、柔らかな」

「……」

「この身だからこそ王城を飛び出してユキに会うことが出来た。良いこともあったからいいんだ」

「うん」

「しかし、この身だとユキと色々と出来ないから残念だ」

「うん…うん？」

何かが引つかかって思考が止まる。

前にはいい笑顔のフェイがいる。

いや、近い。

チュツ

頬にやわらかい感触。

温かい呼気を感じる。

「お前との未来のためにオレはこれから動こうと思う。これ以上のこともしたいしな」

「！！！？」

顔に集まっていく熱と共に帰ってくる思考。

慌てて距離をとろうとフェイの手を離そうとするが失敗する。

フエイにしっかりと手を握られて、伸ばせるギリギリまで腕を伸ばす。

少しの距離しか離れることが出来ない。

「フエ、フエイ！」

「ユキ。オレはもうお前を手放せない。すまない」

「フエイ……」

「何かあれば何でも言って欲しい。気に入らないこと、嫌なこと、して欲しいこと。遠慮なく言ってくれ。ユキの望みを叶えることはオレの喜びとなる」

「……」

「だが、聞けない願いがあつたときは、率直にオレも駄目だと言うだろうが、それはまあ……諦める」

「聞けない……願い？」

「離れたいとか、キスしないで欲しいとか」

「っ！」

「オレはオレの好きなようにする。だから、ユキもユキのしたいように……自由なままでいて欲しい。オレはユキを手放せないが、その為ならどんな努力も惜しまない。……憶えておいてくれ」

言いたいことを全て吐き出したのか、フエイは口を閉じて握った由岐の手にキスを1つ落とした。

そのキスは誓いの儀式のように、厳粛なものに見えた。

顔を真っ赤にしたまま、それを受け止める。

「フエイの気持ちは分かった……言いたいことは言うようにする」

「ああ」

「あの……」

「うん？」

「もう少し……の間……こ、こういうのは控えめにして……ほ、欲しい」

「…善処する」

握った手を離してフェイは笑う。

『少しの間』

由岐がそう言ったから。

第36話 時は流れて進みゆく(後)(後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

### 第37話

日は完全に落ち、闇に満ちた世界を月の光が淡く照らし、人の用意したランタンが道端の所々を照らしただけとなっている。

大半の人々は、明日のために早々に寢床に着いており、夢の中だ。今はそんな時間帯。

しかし、すべての者が夢の中を彷徨っているわけではなく、やはり起きている者もいるわけで…。

駒鳥亭の一室。

小さな明かりが部屋の中をぼんやりと照らす。部屋の中には2つの影があった。

「で、どうされるおつもりですか？」

「どう…とは？」

「彼女のことです。この国の者ではないとは思っていましたが、この世界の者ではないとはさすがに想像外というか」

「オレにとっては瑣末なことだ」

「…フェイ様にとってはそうでしょうが、これから王城にお連れするのに」

「異なる世界の者だと言っても、誰も本気にはしないだろうな。何か他に思惑があるかと勘ぐられる可能性は高い」

「どうするおつもりですか？」

そう、部屋の中にはフェイとローの2人が居た。由岐とリーの姿がないのは、もう寢床に入っているからだった。

いや、先に寝に行かせたというのが正しい。

今後の予定を話した後、食事をして身を清め、明日も早いといって寝ることを促したのだ。

由岐もいろいろあったせいか一気に疲れを思い出し、抵抗することなくベッドのある部屋へと移動していった。

おやすみなさい

フェイに眠そうな笑顔と言葉を残して。

笑顔を返して頷き、リーに共に行くように目配せをして部屋をさがらせた。

リーも文句を言うわけでもなく由岐についていった。それも当然だった。

前回のようなこと 1人で寝かせていて拉致されたことがもう一度、起こらないようにとの保険だった。と、いうことで今起きているのは2人だけだった。

ローの再度の問いかけにすぐに答えることもなく、フェイは口を閉ざしていた。

「フェイ様」

少し強く名前を呼ばれて視線をローに移す。

ローはジッとフェイの答えを待っていた。



「…異世界の者だということは隠すしかないだろう」

「はい」

「どうしたって外から連れ込む事実は変わらないのだから、勘ぐられるのも仕方あるまい」

「そこなのですが、1度俺たちの家に来ていただいて、それなりの肩書きを整えてから王城のほうへ上がっていい」

「嫌だ。待てない」

「…」

言葉を最後まで言う前に否定される。

なんと我侭なと、ローは呆れる。

ムスツとした表情は、現在の幼い外見に似合いすぎててきつとこの場にリーがいたら大騒ぎだったことだろう。

「それに、ある意味ちようどいいかもしれないぞ」

「どういう事です？」

「第3継承権を持つオレが身分のない娘を妻にしたいと言えばどうなる？」

「そ、それは！」

「事態はさくさくと進みそうじゃないか」

「ユキを起爆剤にでもするおつもりですか！！」

「そうなるか？」

「フエイ様っ！？」

「うるさい。喚くな。ユキが起きてしまったらどうする」

「…」

「ユキはオレが守る。何か不安があるか？」

「…」

不安だらけですと、目は口ほどにものを伝えていた。

しかし、フェイは無言の抗議を鼻で笑う。

「そろそろこの茶番劇をどうにかしたい。オレにはやるべきことがあるしな」

「…」

「セイのやつをせっついて解除魔法を作らせなきゃならん」

「セフォイド様ですか…」

「ユキとの婚姻を認めさせるために、ぜったい邪魔するだろう兄上を迎撃する準備をせねばならん。姉上も」

「…やらなきゃいけないこといっぱいですね」

乾いた声で応えるローに真剣に頷きながら、フェイは今後のことを思う。

由岐とのバラ色の生活を送るためには物事を早めに進めるに越したことはない。

考えれば考えるほどに、フェイを急かす気持ちは溢れ出てくる。

「まあ、だからと言ってユキの側にいることが最重要事項だ。…他の事は…適当に何とかするさ」

「そう…ですか」

あれこれと言ったにもかかわらず、最後には『適当に何とかする』。

ローは思う。

フェイならばきっと最後のこの言葉の通りにどうにかしてしまうのだろうと。

そしてその『適当に』で、自分とリーが馬車馬のごとく働かせられるのだらうと確信と共に笑いがこみ上げてくるのだった。

馬車馬のごとく働かせられると分かっているのにもかかわらず、それを嫌とは思わない自分が可笑しくて。

「どんだけフェイ様が好きなんだろうな、俺たち…」

ポツリと言葉を零す。

「？何か言ったか」

「いいえ…忙しくなりそうですね」

「ああ、お前等の働きに期待している」

「人の使い方が上手すぎですよ、フェイ様」

「何年一緒だと思ってるんだ」

「ははは」

夜は更けていく。

フェイたちのいる部屋ではまだ少し、話し声は途切れることはなかった。

### 第37話（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

### 第38話 発見！

フツと意識が浮上する。

ゆっくりと瞼を開けると、日の光と共に、見慣れない天井が視界に映る。

(…え？)

頭がうまくこと回らなくて、緩慢に辺りを見回した。

少しずつ頭が回り始める。

「ああ…そっか」

由岐は思い出した。

今まで生まれ親しんだ世界から、全く違う世界に来てしまったことを。

そして フェイと出会ったことを。

色々思い出して気付く。

今、部屋には由岐しかいなかった。

寝るときに一緒にいたリーの姿が見えない。

身体を起こし、ベッドから降りる。  
何も考えず続き部屋のドアに手をかけた。

「ユキ、起きたのか」

開けたドアの先にはフェイが椅子に座って、紙の束を机に広げ読んでいた。

ドアの閉開音で気付いたようで、手に数枚の紙を持ったまま視線をくれる。

「…」

「ユキ？」

返事をしない由岐に、フェイが首を傾げる。  
しかし、由岐にはそれどころではなかった。  
視線はフェイの顔にピタリと止まっている。  
数秒、無言でお互いを見つめる形になった。

「ユキ、本当にどう」

「取っっちゃ駄目っ！」

言葉だけでは埒が明かないと思って、手に持った用紙の束をテーブルに下ろして眼鏡を外そうとした姿でフェイが固まる。

そう、眼鏡なのだ。

フェイは眼鏡をかけていた。

細い銀フレームのシンプルな眼鏡。

由岐の制止に固まるフェイを由岐はじつくりと見る。  
ゆつくり丹念に、熱い視線で。  
それはもうフェイが赤くなりそうなほどに。

由岐は眼鏡フェチだった。

「…素敵」

頬をばら色に染めて、潤んだ視線を向けてくる由岐に、フェイのほうも何か忍耐の糸が切れたような気がした。  
気付けば身体は動き、本能のままに近づく。  
自分を見たままポーツとなっている由岐の腕を掴んで、由岐の出てきた部屋に移動する。  
フェイはドアを押す。  
勢いのまま、ドアは閉まった。

「主？」

手ぬぐいで汗を拭きながら、リーとローは部屋に戻ってきた。

朝起きて鍛錬。

これが大抵、2人の日課だった。

ここ2、3日はしている暇もなかったなので、今日はいつも以上にたつぷりと時間をかけた。

たまに、この鍛錬にフェイが参加してくる。

今日は由岐を1人部屋に置いてくるわけにはいかず、不参加だったが。

部屋の中にはいるはずの人物がいなかった。

部屋の中を見渡すと、テーブルの上の紙の束が散らばっている。それに眉をしかめる。

紙の束。

それは、報告書類や様々な内容のもので、このようにテーブルに放置してよいものではなかった。

フェイもそれは承知しているはず。

なのに、目の前の状況は、それを裏切っていた。

「フェイ様：おられないのか？」

同じように辺りを見回し、廊下に視線をやるロー。

2人の視線は必然的に隣の部屋へと辿り着く。

お互い顔を見合わせて、アイコンタクトでどうするか語り合う。

ひとまずといった感じで、テーブルに近づき、放置された書類の束をまとめて、整える。

「どうする」

「出てくるまで待つしかないじゃない」



「しかし」

「部屋に入る勇氣ある？」

「…」

「まあ、今の主じゃたいしたこと出来ないから大丈夫よ」

「リーッ!!」

「本当のことじゃない。だって今の主は見た目どおり10代前後の身体だからね」

「…もつと憤みを持ってくれ」

さめざめとローが泣く。

リーにとってそんなものは無視だ。

冷静に言われれば言われるほどにローの精神にはダメージが来るのだが、リーには分からない。

分かつとする気持ちもない。

キィ…

ドアの開く音。

2人はハッと視線をドアに向ける。

そこには満足げなフェイの姿。それだけ。

「ユキは？」

「寝た」

「『氣絶した』の間違いでは？」

「そうとも言つかもしれない」

「フェ、フェイ様…」

「どんな想像がお前の中では繰り広げられているのかある程度想像はつくが、キスしかしてないから安心しろ」

「そ、そうですね」

へたり込むローを見て、リーは鼻で笑う。

近くまで移動してきたフェイの顔につと手を伸ばす。  
そして眼鏡を外した。

フェイもそれを当たり前のこととしてされるがまま。

「眼鏡を外す余裕もなかったのですか？」

「ふ」

リーの言葉にフェイが笑う。

その笑みは少々 いや、かなり今の幼い顔には似合わない艶のある  
ものだった。

「ユキは眼鏡が好きらしい」

フェイの台詞に、リーは合点がいったようだった。

クスリと笑いを零す。

フェイの満足そうな顔を見て嬉しそうな顔をする。

「では、違う種類の眼鏡を数点見繕っておきます」

「ああ」

「…」

2人の台詞を聞いてローは思う。

（ユキ、2人を止めるすべを持たないオレを許してくれ）

100パーセント企んでいる顔の2人に分からねように合掌する。  
しかし、夢の中を彷徨う由岐には、どちらも意識の外の出来事だっ

た。

### 第38話 発見！（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

今回、由岐の眼鏡フェチが知られてしまいました…。  
どうなることやら、私にも分からぬことのようにです。

### 第39話 おとぎ話

目覚めて、朝ごはんを食べて、宿屋を出た。

今は、フェイとリーとローと由岐の4人で街道を歩いている。

空は雲ひとつ無い晴天具合。

でも、由岐の顔には曇り空が広がっていた。

「もう機嫌を直せ」

「…」

「甘いものでも食べるか？」

「…」

「あそこの焼き菓子美味しいぞ」

「…」

「ほら、あつちにある店は美味しいお茶を出す店だ」

「…」

「ユキ」

返事をしない由岐に、ほとほと困ったのか、フェイは眉根を寄せた。  
宿屋での一件が尾を引いていた。

「…嫌がってなかったくせに」

ポロリと零れ落ちた言葉。

由岐が劇的に表情を変えた。

一気に顔が赤く染まり、羞恥に目に涙をにじませる。

あわや喧嘩勃発かというところで、2人の間に割り込んだのは笑顔のリーだった。

「はいはい。主、ユキをいじめたら駄目ですよ。ユキも、主も反省しているからそろそろ許してあげて」

「…」

「…」

お互いを見たまま黙り込む2人。

リーは、とりなすように、ピツと人差し指を立てて口を開く。

「とはいえ、主は反省するべきですね。ユキ、何か欲しいものは無いの？今なら何でも買ってもらえるわよ」

「…」

「…悪かった。欲しい物を言え」

「…何でも？」

「ああ。宝石でも何でも言え」

「宝石なんていらない。…      なんかお話して」

「話？」

「そう。おとぎ話」

茶目つ気を含んだリーの言葉と、フェイの謝罪の言葉にやっと口を開く。

地面に視線を落とし、ついでどこか遠くを見るような仕草をする。そして、由岐は小さな声で願いを口にする。

それはお金で用意できるものではなくて、フェイには予想外の言葉で、声が途切れる。

手を握られる感触に意識を戻せば、フェイが口元を弓なりにして微笑んでいた。

「では、誰でも知っているだろうおとぎ話をしよう。だが、その前に移動するぞ」

優しく手を引かれて、抵抗せずについていく。

2人の後ろをリーとローが口を挟まずついていくのだった。

むかしむかし、1つの小さな国があった。

その国は世界の中心とされる場所にあり、いたるところに花々が咲き乱れ、1年中春の女神のおわすような場所だった。

この国には、この世界を創ったとされるリカルド神の息吹が強く存在していた。

そして、この世界を支える柱となる女王がおられた。

この国では女王しか存在しない。

王様はおられない。

世界を支え、赦し、全てを包むことが出来るのは女王だけだったから。

何代もの女王が生まれ、育ち、その地を　この世界を支えてくださった。

民から笑顔が絶えることは無く、光に満ちた国だった。

それは、ずっと続くものだと、誰も疑いも無く生きていた。

だが、それはある日突然終わりを告げる。

瞬く間のことだった。

世界を支えていたこの国は、消え、国のあった場所には大きな湖が出来ていた。

国が消えたのを　なくなってしまったのを見た者は1人としていない。



湖面を揺るがす風だけが、変わらずそこにあるだけだった。

1年が経ち。

10年、20年と経ち。

もう数百年。

この国が消えてから世界は色を変えた。

何かが少しずつ崩れ落ちてく。

人々の心には欠落が出来た。

人々は何年経とうとその国を忘れない。

しかし、人の口からその国の名が紡ぎだされることはない。

ただ… その国を『光ある国』とよぶ。

フェイが口を閉じると同時に、一陣の風が2人の間を吹きぬける。咄嗟に閉じた目を開けると、目の前に一輪の花を持ったフェイの姿。無言で耳元に飾られる。

フェイの目が満足げに笑うので、由岐ははにかんで目を伏せる。それを視界におさめながら、フェイは言葉を続ける。

「人々は信じている」

「何を？」

「いつか、『光ある国』がすがたを現すのを。だから……」

「だから？」

「それまで、『光ある国』の名を口にしないと誓い、今もなお、それは続いている」

「……」

『その国の名前をフェイは知っているの？』

口にしようとして、結局そのまま口を閉じる。聞いてはいけないことのような気がしたから。

この世界で初めて聞いたおとぎ話は、由岐の胸の奥にころりと落ちてきて、収まった。

由岐の好きなハッピーエンドのお話ではなかったけど、由岐は聞けてよかったと思うのだった。

### 第39話 おとぎ話（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

次がエピソードとなります。（そのはずです！？）第一章？出会い編が完結です。終わりが見えて本当にほっとしてます。はい。

## エピソード

お話をしてもらった後、軽食を口にして、今は街道を歩いてる。

本当は、フェイの力で簡単に帰ることが出来ると言われたのだけど、お願いしてリカルドという世界の一部を観光しながらゆっくりと目的地に向かっていく。

と、言っても、この街の教会から正規の手順を使って城下町に転移するそうで、何日もかけていくわけではないらしい。

なので、本当を言ってしまうえば今は寄道中ってこと。

フェイには色々としなければいけないことがあるようだったから、ちょっとだけでいいって言ったのだけど、フェイは笑って大丈夫だと言ったから甘えてしまった。

私の世界とは全然違うこの世界。

すごいので、時間がゆったり進んでいる気がする。

あっちの世界は、右を向いても左を向いても忙しそうにせかせかと動く人ばかりだから余計にそう思うのかもしれない。

うん、こっちの世界を好きになれそう。

…家族のことを考えると、やっぱりもやもやと考えてしまうけど、私の手をひく温もりが、落ちてしまいそうな私の心を優しく救い上げてくれる。

今は、前だけに向いて進もうと思う。

私を優しい目で見てくれるフェイがいてくれる限り大丈夫だと思うから。

「ユキ」

名前を呼ばれて意識を向ける。  
意識を向けた先には笑顔のフェイ。

「なあに？」

微笑み返して続きを問う。

「さつき話した『光る国』の跡地の湖なのだが」

「うん」

「片付けねばならない件がすべて片付いたら、一緒に見に行こう」

「え？」

「あそこは未だ神に愛されている土地でな。リカルドで一番、神の息吹を感じられる場所だ。リカルドの民は、何か大切な誓いを立てるときに、あの場所を訪れる」

「…」

「すべての問題が片付いた暁には、オレはユキと一緒にになりたい」  
「っ！」

「あの湖で、オレは神に… ユキに誓いを立てる。覚えておいてくれ」

強い、強い確固たる意志をもった視線に射すくめられる。

口の中が気付けばカラカラで、声が上手いこと出ない。

何回か口を開いて、声を出すことに成功した。

「も…う、い、いっぱい誓いはもらって…るよ？」

「足りない。誓いを何回立てようと、ユキに立てる誓いが多すぎるなんてことは無い」

きつぱりと言い切られて、それ以上は言えることなんて無かった。

だけど、ここまで言われて何も返さないなんて出来なくて、勇気を振り絞ってフェイの腕を引いた。

引っ張られるとは思わなかったのか、存外簡単にフェイの体が私に傾いてきた。

ギュウツと抱きしめる。

この時ほどフェイが小さくてよかったと思ったことはない。  
ここは人の目がある外だ。

お日様だって見てる。

成人男性であるフェイを自ら抱きしめるなんて破廉恥すぎる。

まあ、元の身体 of フェイだったら、私が引つ張ったくらいではびくともしなかった可能性の方が高い。

やはり、それでも恥ずかしいのは変わらなくて、顔に熱が上がってくるのを感じる。

それでも、私の気持ちが伝わるように、思いの丈を込めて抱きしめた。

固まった身体から力が抜けて、頭をすり寄せられる。

その仕草にグツときて、すり寄せたせいで乱れた髪の間から見えたおでこに震える唇を落とした。

その瞬間、背中に手が回り、ギュウウウツと抱きしめられた。

ちょっと苦しかったけど、我慢する。

フェイの喜びが伝わってきたから。

そして、私の思いが伝わったのが分かったから。

私たちはローさんのいたたまれなさそうな、そして申し分けそうな声に中断されるまで、ずっと抱きしめあったのだった。

拝啓 お母さん

世界を飛び越えちゃったけど、『運命の恋』、見つけてしまった模様です！！



## エピソード（後書き）

これにて出会い編終了となります。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

本当にありがとうございました！！

## 寄り道の途中で？（前書き）

続きを書こう書こうと思いながらも、完結させたことにより、筆が止まってしまい、間が空いてしまいました。

嬉しいことに、続きが気になると言って下さった方がおり、ちよつくら頑張ってみるかなというか、現金なものでやる気になり、完結マークを連載に戻させていただきました。何話が続くものになりそうです。お付き合いいただけたらと思います。

## 寄り道の途中で？

「ねえ」

「どうした、ユキ？」

長閑な街並みを進みつつ、由岐はフェイへと声をかけた。  
すぐにも返ってきた声に、なんと返していいのかと一瞬口ごもりながら、由岐は先ほどから気にかかっていたことをフェイに相談することに決めた。

「なんか私、変なのかなあ？」

「うん？ユキは相も変わらず可愛らしいぞ」

「いや…そんなことを聞いてるんじゃないくて…」

「？」

「さっきから道行く人の視線が痛いといつかなんといつか…」

「ほう…オレの許しもなくユキを嘗め回すように見る輩がいるとは」  
「」

「ちよっ！その嘗め回すとかおかしいからっ！！」

「どっちにしろ、オレのユキを不快にさせるような輩どもは八つ裂きに」

「待ったっ！ごめんっ私が悪かったからっ！！」

極端から極端に走るフェイの言動に、由岐が早くも白旗を振る。  
そんな彼女に救いの手が。

「主っ！あの輩などがとても不愉快な視線を送っておりましたわ！」

入るはずもない。

「一言お命じ頂けたら、誰に気付かせることなく闇に葬ってみせませうわ」

それ以上に酷い。

「リーさ~~~~んっ!!!?!」

「よし、い」

「駄目なの~~~~~!」

「…フェイ様それくらいで。リーも悪ふざけをするな」

「ローさん…」

今度こそ本当の救いの手に由岐の目から涙が。

ローの言葉に、フェイとリーがつまらなそうな顔をするも、すぐに元の顔に戻る。

「それで、どういうことだ?もう少し詳しく話せ」

「そうですね。視線が痛いってことだったけど、私たちが街道を歩くときって、それなりに視線は付き物だから、これといって気にしてなかったのだけど、何かそんなに気になるものでもあった?」

「…」

先ほどのあれは白昼夢かなんだといわんばかりに、普通の2人がいた。

そつと肩を叩かれて、視線をやれば、ローの力づけるような視線が落ちてくる。

それに心の中で涙をのみながら、何とか気持ちを切り替える。

「そういう風に言われちゃうと、ちょっと自信なくなるんだけど…なんていうか、私を見た人の視線が唐突に固まって、かなりの時間そのまま動かなくなるというか…」

「ふむ」

「もうちょっと歩いた先に美味しいお茶を出すところがあります。そこまで様子を見てみてはどうでしょう？」

「そうだな…全員で周囲を警戒しては余計に目立つ。リーとローに任せる」

「「御意」」

「ユキ」

「は、はいっ」

「落ち着け。これといって危ないものを感じない。それこそ、危険なものがあればオレたちが気付いていたはずだ。すぐにでも解決してやるから、お前はオレだけ見ている」

「う、うん！…え？…ええ！」

「他に視線をやる暇など与えたつもりはなかったのだがな。俺もまだまだだ」

「うえ？な、なんかち、違う」

幼さを感じさせるはずの大きな目をフツと細めて流し見るその仕草に、ドクンツと胸が大きく鳴る。

思わず胸元を押さえる。

押さえたことで、押さえたところを中心に服に皺が寄った。

由岐の動揺を知ったのか、フェイがフツと口の端が上げて笑った。またそれを視線に入れて、由岐の頬が染まる。

満足そうなフェイの顔から視線を逸らして歩みを再開させる。

置いていこうという意図は無い。

ただ、それ以上そこでフェイと話しても、からかわれるだけだと由岐には分かっていたので、話は終わりだと伝えるために動いたのであった。

フェイもそれが分かっているからすぐに由岐の隣に並ぶ。

手を握られて、ピクリと反応しながら、由岐は何も無かったかのよう

うに歩く。

手に自分のではない温もりを感じながら。

先ほどまで気にしていた視線も、今は由岐にとって気にするものはなくなった。

先ほどフェイが言った通りに、手の温もりに心を持っていかれてしまったのだから。

5分ほど歩いたところにあつたリーのおススメの店に入った。

そのお店は、お昼時ではなかったがそれなりに人が入っており、賑わっていた。

ちょうど奥まったところにある4人掛けのテーブルが空いていたので、そこに座る。

座つてすぐに水を持った店員が笑顔で近づいてきた。

たまに顔を出すのだろう。

リーが、その店員と親しそうに挨拶するのが見える。

2、3言葉を交わし、店員は去っていった。

「せっかくなので、私のほうでおススメを何点か選んで注文しました」

につこりと笑って言われて、否やは無い。

それだけでなく、由岐にはこちらの文字は分からないのだ。

そう、言葉は問題なく話せたのに、文字は読むことが出来なかった

のである。

いや、もしかしたら、言葉自体も本当は同じ言葉を喋っているわけではないのかもしれない。

しかし、由岐にはそれを調べるすべは分からなかったので、深く考えるのをやめた。

分かるときには分かる。

そうすっぱりと割り切ることにしたのだった。

「で？」

「はい。確かにユキの言ったとおりです」

「そうですね。最初は私たち全体に視線を向けてくるのですが、ユキを見たところでギョツと目をむいて固まる輩は多々ありました」

「ほお……」

「……」

ローとリーの言葉に目を細めるフェイ。

先ほどとは違って、甘さはない。

目に見えるのは鋭さだけだ。

「結局のところ、どういふことが分かったか？」

「はい」

「え？」

あっさりと頷かれて、声を上げる。

由岐にとっては、歩いている間ずっと見られては驚かれて、通り過ぎるまで見られるということが続いたが、その驚かれることの意味



について、全然分からなかったのだ。

なのに、少しの間、周囲を警戒して見ていたリーたちにはそれがどうしてなのか分かった。

少しだけ、由岐の中で不満があがる。

自分には分からなかったのに、どうしてリーたちには分かったのか。

もやもやとするものを感じながら、由岐はリーの次の言葉を待った。

「ユキ」

「リーさん……」

優しい声音で名を呼ばれて、もやもやが薄まる。

机の上に投げ出していた手に、重なる重さと温かさを感じる。  
この温かさを知っている。

「フエイ……」

「ユキ、そんな顔するな。ここはお前の生まれた場所とは違うところだ。来たばかりのユキには分からないことだってある」

「……うん」

「知らないなら、これから知っていけばいいんだ。」

ギュッと手を握られてもやもやは完全に消えた。

気負いかけていた肩の力がフツと抜ける。

いつの間にか落ちてしまっていた視線を上げれば、3方向から優しい笑みが向けられていた。

つられて笑みが上る。

「話を続けてもいいか？」

「うん。リーさん、よろしくお願いします」

「はい。よろしくされます」

由岐の言葉に、リーがにっこりと笑って頷いた。

寄り道の途中で？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 寄り道の途中で？

話を再開しようとして、口を開いたが、そのまま話し出すことなく口を閉じた。

由岐はわけが分からなくて、どうしたのかと問おうとしたが、問う前に先ほどの店員がテーブルに近づいてくるのが視界の隅に入り、同じように口を閉じた。

「お待たせしました。当店のおススメ、『花妖精の王冠』でございます」

「うわぁ！」

由岐の口から歓声が上がる。

それもテーブルに置かれた物を見れば誰しも納得する。

様々な果物がふんだんに盛り付けられ、『花妖精の王冠』の名も納得の彩りも豊かなケーキが置かれていた。

「いつもは1人分で注文するから完成型は見られないんですよ。今日はせっかく人数が揃っているし、ワンホールで頼んじやいました」片目をつぶって言うリーは満足そうだ。

それぞれの前にお茶が置かれ、お代わり用のポットも置かれる。よく見れば、ケーキはすぐに取り分けられるように4等分に切られ

ており、後はそれぞれのお皿に移動するだけとなっていた。

見た目にも楽しいケーキをそのままの姿で持ってきてもらったようだった。

店員とリーが視線を合わせて頷いたのが見える。

ケーキが目の前で取り分けられていく。

断面を見れば、何層かにわかれていているのが分かった。

中のほうもかなり凝っているらしい。

全てのケーキを取り分け終わり、店員が頭を下げて去っていく。

「話は後にして頂きませんか？お茶も今が一番香り高い時ですし、美味しいときに食べないと勿体無いですよ」

「そうですね。リーの言うとおりです。せっかくのケーキです。美味しく頂きましょう」

「ああ」

「うん！」

リーの提案に各々が同意の声を上げる。

由岐はまず目の前でいい匂いを漂わせているお茶に手をつける。

甘酸っぱいような匂いに、笑みが上る。

口に含んで驚いた。

甘酸っぱい匂いに反して、口にしてお茶は口の中を爽やかに通り過ぎる。

次いで控えめにだが、フルーティな味が口いっぱいに広がった。

「おいしい…」

思わず出た言葉を受けて、フェイが横で微笑む。

「気に入ったのか？」

「うん！このお茶とっても美味しい！！」

「そうか。では茶葉を買っていくか」

「そうですね。このお茶はこのお店独自の配合ですから、他ではこうはなりませんし」

「そうなんだ…いいの？」

とても気に入ってしまった由岐は、フェイにお伺いを立てるように首を傾げる。

笑顔と共に頷かれて、由岐の顔にも満面の笑みが上る。

「ありがとう！フェイ」

「ユキの願いを無碍にするなどありえない。お前が喜ぶ顔が俺の幸せにつながるのだからな」

「…そう、ですか」

フェイの台詞に顔が熱くなる。

再会してからずっと、フェイの言葉は由岐の心を高鳴らせてばかりだ。

これでは心臓がもちそうにもないとやや心配になりながら、目の前に広がる魅惑のティータイムにいそしむのであった。

花妖精の王冠に関しての感想としては、由岐とリーが言葉を紡ぐこともできず感動で打ち震えていたとだけ記しておこう。

そして、由岐のそんな姿を見て、フェイがとても幸せな顔をしているのを目撃したのがローだけだったこともここに記しておく。

「さて、一服したことですし、話を再開しましょう」  
「ああ」

空になったお皿をさげてもらって、お茶をお代わりする。

「結論を先に述べてしましましょう。ユキが周囲の者から驚かれた原因は、その髪の毛です」

「え……？髪の毛が原因……で、どういうことですか？」

告げられた内容に訳が分からず、聞き返す。

「ああ……髪の毛か。確かに驚かれても仕方ないな」  
「ええ」

由岐には分からなかったのに、フェイは合点がいったという風に頷く。  
ますます頭は混乱しそうになる。

「ユキ、周りの人間を見てみる。何か気付かないか？」  
「え……」

促されて、周囲を見回す。

ただ見ても思うものは無い。

しかし、先ほどのリーとフェイの台詞の中の『髪の毛』をキーポイントとして見渡せば…。

「髪の毛の短い人が…いない？」

「その通りだ」

由岐の視界の先には、男も女も全て髪の毛を伸ばしている者しか居なかったのだ。

別に全ての髪が長いわけではない。

フェイのように後ろ髪のみを伸ばしている者や、それこそサイドの一部を伸ばして留めている者もいる。

だが、総じて長い髪を有しており、ショートカットの髪のある者はいなかった。

由岐を除いて。

由岐はリーに視線を向けた。

視線を受けて、リーが口を開く。

「ユキの…住んでいた場所には魔力や魔法といったものは存在していた？」

「ううん…私の住んでいた場所では、魔法というものは物語の中でしか存在してなかった」

「そう…リカルドで魔力を有しない生き物は居ない。大なり小なり全ての生き物が魔力をその身に内包しているの」

「え、でも…」

「ユキは分かっていると思うが、おまえ自身も魔力をその身に内包している」

「嘘…」

「本当だ。そのおかげでオレは助かったからな」



「？」

「その話は後だ。まずはリーの話聞いてみる」  
「……」

「話を続けるわよ。リカルドでの魔力の強さは、魔力を貯蓄できる量に比例するわ」

「貯蓄？」

「ええ。誰しもその身の中に、生まれもった器を持っている。その器というのが、魔力が貯められる場所」

「器：皆、持っているんですか……」

「そうです。しかし、生物にはそれぞれ特徴があるように、その身にもちえた器の容量にも差が出てくるのですよ」

補足するようにローが言葉を紡ぐ。

「容量？」

「はい。このコップがオレの身に持つ魔力を貯める器としましょう」

ローはそういつて、水の入ったコップを目の前に出してきた。

「で、こちらがフェイ様の器だとします」

そう言つて、コップの横に置かれたのはお代わり用の水の入った容器だった。

まだ半分以上も水と氷が入っている。

そして、ローの魔力の器として示されたコップの何倍もの大きさだった。

「おい」

「はい、ちょっと黙っていてくださいね。差が分かりやすくいいでしょう？」

「……」

「どうですか？明らかにフェイ様の器のほうが大きいですよ」

「はい」

「こんな風に、1人1人、器の大きさが違うんですよ。オレがこのコップいっぱい魔力を使っただけです。同じように、フェイ様が同じ量の魔力を使っただけなら、見てわかりますよね？フェイ様の方には、オレと違ってまだ使える魔力があるのが。こういうことです」

「器が大きければ大きいほどに、使える魔力がたくさんあるということね。と、言うことで、魔力をその身に内包できる　つまり、たくさん貯蓄できる器がある人ほど魔力は強いということになるの」

「ほあ〜」

「さて、ここからが本題よ」

ピシッと人差し指を立てて、リーの目がキラリと光った。

寄り道の途中で？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## 寄り道の途中で？

「本題…ですか？」

「そう、本題」

鸚鵡返しに問い返せば、力強く頷かれる。

肯定されてしまえば、後はもう聞く以外の選択肢はない。  
なので、由岐は居住まいを正した。

「お願いします」

「はいはい。さて、リカルドに生きる生命は、魔力を貯蓄する  
とができる器を持っているということまでは分かったわよね」

「はい」

「そして、人それぞれ器の大きさが違うことも」

「はい」

「で、ここでこんなの出ました！」

「へ？」

軽い口調の台詞と共に、ローの置いたコップと水の入った容器の横  
にもうひとつ物が置かれる。

「これって…お皿？」

「そう、受け皿」

そう言ったリーのお茶のティーカップの下に敷かれていた受け皿が、

なくなっていることを発見した。  
十中八九その受け皿だ。

「世の中には、こんな浅い器しか持たない人もいるの！」

「え…それって容量的にかなり少ない…」

「ええ。まあ、大抵は生まれたての赤ちゃんとか、10歳未満くらいの子どもがこんな感じかしら」

「子ども…ですか？」

「普通、年を重ねるごとに、器は身体と同じように成長していくの。そして、成人を向かえる前に器は成長を止める。止めるというよりは、『完成する』が正しいかな？」

「はあ…」

「魔力というものはね、実は、私たちがリカルドのいたるところに散らばっている危険から守ってくれるもののよ。この『危険』について、例を何個か挙げるとすれば、害虫・害獣・病原菌などかしら？」

「え？」

「生きている生命は、魔法という手段を使わずとも、生きている間ずっと、魔力を絶えず循環させて身体の極外側に、見えない膜みたいなものを張り巡らしている。張り巡らせることで…外界からの脅威を寄せ付けないようにしている」

「…」

「分かるかしら？魔力が少ないと、この身体を守るための膜がとても薄くしか形成されないんだけど、そうするとどうなるか」

「…」

「理解出来ているようね。世界の法則は絶対。…弱きものから消えていく」

リーの言葉が近くに居ながら遠く聞こえてくる錯覚を起こす。  
冷たいモノが背中を通り過ぎていくのを由岐は感じた。

いつもの冗談交じりな口調ではなく、先ほどの軽い感じも削げ落ちて、淡々と喋るリーに、本当に先ほどまでと同じ人かと由岐は問いそうになる。

「しかし、人は生きることには貪欲なんだ」

幼さを含んだやや高い声が張り詰めかけた空気を切り裂いた。

「フエイ…」

「そうです。弱いからといって、漫然と死を受け入れることを俺たちはしなかった。だからこそ、最初のところへ行き着くのですよ。」

ユキ

「ローさん」

「…長くなっちゃったけど、結局私たち人間は、少ない魔力を補うために鋭意工夫してきた。長い年月をかけて、ひとつの結論に至った」

「…リーさん。…結論？」

「魔力の器だけに頼るのではなく、身体の他の場所を使って、魔力を身体に貯蓄させる」

「？」

「長い長い研究の下、髪の毛が魔力を保有させるのに一番だという結果が出た。なんといっても髪は伸びる。足りない魔力の分だけ髪を伸ばせばいいと」

「分かりやすいだろう？」

「う、うん」

「でだ。だから、ユキの髪の毛が短いことに皆が吃驚してたということに至る。相当昔からこの考えで俺たちは生きてきた。だから、

髪を切るという行為は禁忌に近い。まあ、伸ばしっぱなしは流石にあれだから、整えたり、部分的に切ったりは、皆がするんだがな。とういか、昔よりは柔軟になったというのか……いろんな髪型の奴がいるぞ」

「ですが、全体的に短いというのは、まだ生まれて間もない赤ん坊くらいでしょう」

「……」

代わる代わる言われて、由岐は頭の中がこんがらがりそうだった。額に手を持っていく。

ぐいぐいと眉間を押しながら得た情報を整理する。

「……私って、今、何気に天然記念物っぽいつてこと？」

「てんねんきねんぶつ？」

「ああ……ええと……希少？」

「確かに希少だな」

「……もしかして今も」

「いや。店に入る前に、周囲に溶け込む魔法をかけてある。何が問題なのか、あの時には分かっていたが、見られることが嫌っていうことなら、やりようは色々あるからな」

「……ありがとう」

「気にするな」

フエイに感謝しながら、リカルドに来てからのことを走馬灯のごとく思い出す。

記憶のある場面まできて止まる。

荘厳な教会での1場面だ。

「く……」

「く？」

「くうそおおおおお！あの趣味悪男っ！！完膚なきまでに叩き潰しておけば良かった！！？」

頭をかきむしりながらテーブルに突っ伏す。

お茶のセット類は綺麗に横に片付けられていた。

ローの手によって。

仕事が早い。

そんなことにも気付かず、由岐は1人唸り続けるのだった。



## 寄り道の途中で？（後書き）

本編が終わってからの世界の説明ってどんなもんでしょね（汗）  
読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

寄り道の途中で？

「落ち着いたか？」

「…うん」

目の前に汗をかいたグラスを出されて、手に持って飲み干す。

「美味しい」

水だと思っていたのに、仄かな甘みと味を感じて目を瞠る。

「リムの果汁が入ってるからな。気分が爽快になるだろう？」

どうやら、由岐がテーブルに突っ伏している間に頼んでいた品物だったようだ。

「…ありがとう」

「気にするな。で、どうする？」

「え？」

「ユキが望むのなら、あの男を『完膚なきまで叩き潰し』に行ってもいいぞ」

「！？つい、いいよっ！てか、会いたくないし」

「そうか？まあ、会いたく無いには賛成だが…リー」

「はい！では私が奴を『完膚なきまでに』た」

「ひい！ごごごめんなさいっ！！しなくていいからっ」

「そう?」

両手をブンブン振って押し留める。

由岐の必死の行動に、立ち上がったリーが椅子に座った。  
心なしか…いや、かなり残念そうな表情を見てしまって、由岐は話題を変えようと慌てる。

「ええとっ…ローさん!」

「はい?」

「あのっ…えとっ…」

口火を切ったはいいが、何を言えいいのか意味の無い言葉ばかりが口から出る。

呼ばれたローが由岐の言葉を待っていた。

「あ、あのですねっ」

「はい」

「ロー、みなまで言わせるな」

「ふへ?」

「フェイ様?」

「そうだぞ!ロー!!」

「リー?」

「ユキは、ローにあの男を『完膚なきまでに』潰して来いと言ってるんだ!察しの悪い奴だ」

「!そうだったのですかっ!!す、すいません。察しが悪くて…」  
「あう…」

「今から行けば夕方には帰ってこれるだろう」

「あ…」

「はい、大丈夫です」

「え…」

「ユキがローを指名するのなら仕方がない。残念だけど、ローに譲ってあげるわ。でも、『完膚なきまでに』なんだからね！手を抜くんじゃないわよ」

由岐の悲鳴が店内に響き渡った。

先ほどと同様にテーブルに突つ伏した由岐はグスグスとやや涙声で抗議していた。

それに、3人はそれぞれに謝罪の言葉を口にする。

謝罪の声にも顔を上げずにいれば、優しい手に頭を撫でられる。

一定のリズムで撫でられて、由岐の揺れに揺れていた心はゆっくりと落ち着いていく。

「今後？」

「そうだ。このまま魔法で違和感を消して、周囲に存在を馴染ませているわけにもいかん」

「駄目なの？」

「ああ。こういった外でなら、まあ…構わないが、城に行くなら問題だ」

「お城…」

「そうなのよ。お城では下手に魔法使ったら反対に目を付けられちゃうわ。ほら、王様や王妃様とか御住まいおられる場所だから、色々と魔法が掛かっているわけよ。そこに別の魔法が紛れたら」  
「ま、紛れたら？」

言葉を切って、意味ありげにリーが見てくる。  
ドキドキしながら続きを促す。

「そこらに配置されている騎士たちに捕まって、牢に放り込まれるでしょうね」

「…」

「それだけでなく、暗殺とかを疑われて、尋問されるかもな」

「じ、尋問…」

「フエイ様もリーもそこまでユキを脅さなくても」

「間違ったことを言っているか？」

「…いえ、言っではいませんが」

「…」

残念ながら、奇異の目で見られながら過ごすことになるのは決定的ようだった。



寄り道の途中で？（後書き）

活動報告に、？と？の間の主従の会話を少し載せてあります。よければお読みください。

読んでくださった方、ありがとうございます。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 寄り道の途中で？

周囲に馴染ませる魔法を使ってもらっていても、奇声をあげていればさすがに周囲の視線は煩わしいものになるわけで、4人は休憩を終えて店を出た。

もちろん、店オリジナルの茶葉を購入して。

空は青くて気持ちのいい天気なのに、由岐の心はやはり曇り空のまま。

ため息ひとつ零せば、手に温もり。

それは案の定、フエイの手で。

「そんなため息を零すな。そして、そんなしょげた顔もやめとけ。いつ訪れるか分からぬ運氣を取り逃がしてしまうぞ？」

どこまでも強い光を帯びた瞳に、力を分け与えられるようだった。

「うん…。何かいい案あるかな？」

「ん…長いように見せかければ何とかなると思うんだが」

「見せかけるかあ…こっちにウィッグとか…ないよねえ…」

「ういっぐ？」

「ええと…かつら？」

「？」



「分かりませんか…」

首を傾げるその仕草に、手を伸ばしそうになったが、言葉の意味が伝わってないことを理解して、それどころではないと引っ込める。

「ウィッグって言うのは、自分の髪の毛じゃない人工の髪の毛で、頭にかぶるものって言ったらいいのかな…？ かぶるだけじゃなくて付け足して髪型をかえるのに使ったりするものなんだけど…」

「へえ、人工の髪の毛。なんていうか、ウィッグだっけ？ ユキの住んでいた場所には、そんなものがあるのね。こちらでは自分の髪の毛でなければ魔力を貯蓄させておくことは出来ないから、使ったことの無い代物ね。見たことも聞いたこともないわ…」

同じ女性であるリーがきつぱりと聞いた事が無いという。

これは望み薄だ。

（髪の毛を付け足そうにも、肝心の付け毛が無いんじゃない…）

由岐はいけないと思いつつもうな垂れる。

「…そうですか。！フェイ？」

道を歩きながらの会話だったのだが、フェイとつないでいた手が後ろに引っ張られる形になり、由岐は立ち止まって振り返る。

そこには、何やら考え込むフェイの姿があった。

「フェイ？…フェイってば！」

「あ…すまん」

「どうかしたの？」

「…いや、先ほどの話だが、付け足す髪の毛があればどうにかなる

「のだな？」

「う、うん。それは付け足す髪の毛をピンとかで留めればいいだけだし」

フェイの唐突な言葉にワケが分からないなりに答える。

スタンリーとの婚姻を強要され、ウェンディングドレスを着せられたときのことを思い出す。

髪の毛をこれでもかといわんばかりにピンや装飾品で留められたのだ。

付け毛さえあれば、髪の毛が長いように見せかけることは簡単だった。

「…よし」

1人納得して頷く姿に、ユキとリーたちはお互いに顔を見合わせる。

「ここは人の目がある。何処かに移動しよう」

「駒鳥亭に行きますか？」

「いや…あそこは少し都合が悪いな」

「では、違う宿屋に」

「ああ」

後で話してくれるだろうと、リーとローはフェイの言葉に従う。

由岐は、ただ流れる事態を受け入れるしかなかった。

とある宿屋の1室。

「持ち帰っていてよかったようだ」

皆が椅子に座ったのを見計らって、フェイが口を開いた。  
言葉と共にテーブルに置かれたものは、何かの素材でできた少々こわついた紙で包まれたもの。  
中身は見えず、何か分からない。

「開けても？」

「ああ」

ローが代表して、中の物を包んでいた紙を開いていく。

中には

「！」

「こ、これはっ」

サラリ

真ん中を紙で束ねられ、その中心を紐で結ばれたもの。

「髪の毛っ!」

由岐たちの前に置かれていたものは、髪の毛。

軽く30センチを超える長さはある髪の毛の束。

フェイが取り出したものは3人の予想外のものだった。

「人工のものは無いって…え?これって人の髪の毛?!」

「主…」

「フェイ様…」

驚く由岐をそのままに、リーとローが主人であるフェイに視線で問う。

「そうだ。これはユキの髪の毛だ」

「へ?...私の?」

「そうだ。教会で、ユキが自ら切り落とした髪の毛だ」

「」

テーブルに置かれた髪の毛の束とフェイを交互に見る。

確かに、言われて見れば、自分の髪の毛と同じ色合いで、髪質も似ているような気がした。

いや、フェイの言葉が真であるならば、似ているのではなく、一緒なはずだ。

テーブルに手を伸ばす。

触ってみれば、馴染んだ感触。

その時、由岐はその髪の毛が自分のものであると実感してしまった。

「あの場に置いていける筈も無いだろう。ユキの一部を」

「た、確かに…そうですが」

「よくそんな暇ありましたね。全然気付きませんでしたよ…」

「教会にて風を暴走させただろう？正氣に戻って風を鎮めたときに、ユキの髪の毛を回収しておいたんだ。これだけの長い髪の毛を放置していくほど、俺は間抜けではない」

「…？」

フェイの台詞に引つかかるものを感じた。

停止した思考を半ば無理やり動かして、仰ぎ見る。

「放置したままじゃ、駄目だったの？」

切ってしまった髪など、あとはゴミ箱に捨てるだけ。

由岐は目の前に差し出されるような形で戻ってくるまで、切ってしまった髪の毛のことなどすっかり忘れていたのだ。

その台詞を口から吐き出した途端、フェイだけでなく、リーとローからも視線をもらってしまった。

「駄目だ」

「駄目よ」

「駄目ですね」

止めに大きく頷かれてしまったのである。

寄り道の途中で？（後書き）

書けば書くほど番外編ではないのを感じます…（落）  
なにこれ？もう続編かいてる気分！ははは（乾笑）  
…読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただけたら幸いなのですが…。

## 寄り道の途中で？

「じゃあ、説明するわね。主が」

「説明します。フェイ様が」

「…」

「別にお前たちでも構わないと思うのだが…」

「そうですけど、時間も勿体無いことですし、私とローはこれから必要な物を買に行ってきますよ」

笑って言われてフェイが黙り込む。

リーの言葉が正しかったからだ。

時間はまだ大丈夫といっても、無限ではない。

したいことがあるのなら時間はあれど、したいことではなく、やらねばならないことがあるというのなら、作業を分担して効率をあげるべきなのだ。

現在は、したいことというよりも、しなければならないことであつた。

由岐への説明然り、由岐の髪の毛偽装（？）に必要なものの購入然りである。

「分かった」

「では、我々は少々席を外します」



「ユキ、可愛い装飾品、探してくるわね。分からないことはちゃんと聞くのよ?」

「楽しみにしてます。しっかり、お勉強しておきます!」

リーとローが部屋を出て行く。

部屋の扉が閉まるところまで、由岐は2人を見送った。

「さて…いいか?」

「うん。よろしくお願いします」

フェイの正面に座りなおし、姿勢を正す。

そんな由岐の姿を見ながら、フェイはローが入れていったお茶で口を湿らせた。

「身を守るためにリカルドに生きる生物たちは魔力を溜め込む。

そして、我ら人間は、決められた貯蓄量より多くの魔力を貯蓄するために、髪を伸ばしてその髪に魔力を貯める。弱き女・子どもが髪を伸ばしてそれなりの魔力を貯蓄できるようになり、死への危険は減少し、我々、人間はその数を増やしていった。…それですべてが上手くいけばよかった。だが、絶滅という大きな危機が遠くなる、人間はほかのことを考え始めた。現在よりも未来が便利になるようにと考え、発展させようと躍起になった。より魔力を循環させる方法や、魔力を他者へと譲る方法など、人の歴史が長くなる間に発見、つくりだされてきた」

「?…それは悪いこと?」

「いいや、悪いことではない。生活を豊かにしようと考えることはとてもよいものだ。しかし、全ての人が同じように考えるわけではない」

「自分の都合のよいようにするってこと？」

「そうだ。最初に魔力を他者に譲る方法を考えた者は、愛する者が他者より魔力の消費量が激しく、すぐに魔力が枯渇しそうになるという問題を抱えていた。そんな問題をどうにかしたいと思って方法を考え、つくり出した。しかし、その後、その方法は他者の魔力を奪う方法をもつくり出してしまった」

「……」

「新たな発見。新たな方法。新たな「それ」をどう使うかは扱う者次第だ。全ての人間がいい人間ではない。そうだろう？」

「……うん」

フェイが口を閉じて話が途切れる。

お互いに、ティーカップに手を伸ばし、口に運ぶ。

先ほどまでより、部屋の中が暗くなつたような気がしたが、夕方にはまだほど遠く、ただの由岐の心情の変化によるものだろう。

「で、ここからが本題だ」

ぽけっと、部屋から視線を移して窓から外を見ていれば、フェイが話を再開させた。

「ユキ、どうしてオレたちが髪を置いてくることに異議を唱えたか分かるか？」

「へ？」

フェイの質問に首を傾げる。

理由が分からなかったから今教えてもらっているのではないのか？  
由岐は訳が分からず、フェイを凝視する。

「いや、分かるかでは不適切だな。どうして駄目だと言ったと思う

？」

「えつと…」

ちろりと笑みを見せて更に問われる。

ぐるぐるとフェイの言葉が頭の中で回る。

（どう思ってたことは、私の意見を聞いてるってことよね？間違ってもいいから）

腕を組み、頭をひねる。

（フェイの笑み…あれは何か含んでいたような…ん？良かれと思っ  
て見つけ出された方法…どんな方法も、扱う者次第で…あれ？何か  
引っかかる…）

依然頭を悩ませる。

そんな由岐に迫り来る影があつて…。

チュッ

「ひゃっ！」

突然の感触。

そして音。

それは気付けば少々慣れてきてしまったもので。

「フェ、フェイツ！！き、急に何するのっ！！」

「キス」

「いや、だからっ?!」

「真剣に悩むユキを見ていたらしたくなった」

「あ、あ、あ…」

「嫌だったか？」

横から覗き込むようにして由岐の様子を窺うその姿は中身を裏切つてとても愛くるしい。

天然か計算か。

今のところ由岐にそれがどっちか判別できる力は無かった。

「ユキ？」

「あう…」

「ユキ…もつとしたい」

「っ!」

「今ならリーとローも居ないし」

「~~~~!!」

「部屋の中だから誰にも見られないし…駄目か？」

「~~~~~~~~!!!?!」

由岐は戦っていた。

羞恥と。

フェイト。

(ずるい~~~~~!!なんでフェイはこんなに可愛いのかっ!!  
本当は私より年上の癖に~~~~~!!!!)

心の中で絶叫が上がる。

少しずつ、だが、確実に追い込まれていく。

「ユキ？」

囁くように名前を呼んでくるフェイの顔はもうすぐ傍。  
十数センチほどしかない。

押しやることも、距離を縮めることも出来ず、固まったままじっと神秘的な紫の瞳を見るしかない。

部屋にあるひとつしかない窓から零れる日の光に、紫色の瞳の奥が揺らめく。

その揺らめきに知らずうちに呪縛されて、羞恥と混乱に荒れていた思考が真っ白になる。

ふに

視界はもう透明度の高い紫の海に溺れて、他は何もない。  
ただ、口元に柔らかい感触が伝わってくる。  
だが、それが何か答えは出てこなかった。

寄り道の途中で？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## 寄り道の途中で？

さすがにこのまま脱線しているわけにもいかず、切り上げたフェイに怒ればいいのかなんなのか、赤い顔して話を再開させた。

「言葉遊びはもういいから、ズバツとお願い」

「頭は適度に動かしてやらねば衰えていくぞ」

「早く喋れ」

ニコニコ笑って言ったら、フェイが黙り込んで、視線を逸らした。コホンと1つ咳をする。

「髪に我々は魔力を宿らせる。その魔力を帯びた髪の毛は、自分の身から離れた後でも、そのまま魔力を宿らせたままとなる」

「へ？霧散したりしないの？」

「しない。なので、伸びた髪を整えるために切られた髪の毛は、身体から離れた後も利用価値のある代物となる」

「……」

もらった情報をもとに、思考が目まぐるしく回転していく。

「私の髪の毛にも魔力が宿っていた？」

「その通りだ。付け加えるなら、大量の魔力が、だな」

「…あのまま置いてきたら、誰かに利用されてた？」

「そうだな、その可能性が高い。そして、髪にはお前の記憶が刻まれている。これだけの長さだ。最悪、髪に宿った魔力とユキの記憶を使って、人形が作られていたかもな」

「何それ！」

「そのままだ。愛玩人形。何でも言うことを聞く玩具だな」  
「ひいつ」

想像してしまった。

へんたい  
スタンリーの顔が浮かぶ。

肌という肌に鳥肌が立つ。

両手で肌をすり合わせて、衝撃を緩和させる。

「他には、ユキを遠隔で操作したり、呪われたり。後は」

「もういい〜〜〜〜！！？」

耳を塞いで、それ以上の台詞をシャットダウンする。

ガタブルガタブルと震えていると、頭を撫でられる。

フェイはこの頭を撫でるといふ行為が殊の外気に入っているようで、よくされる。

子ども扱いされているようで複雑になったりもする行為だが、今は甘んじて受け入れる。

（そう！今この時こそ、受け入れるべきときなのよ！！）

由岐は自分の想像力の豊かに口唇を噛んだ。

優しい感触に全ての意識を注いだ。

「大丈夫だ。ユキの髪の毛は全てここにある」  
「本当に？」



「ああ。教会でお前が切った髪の毛は全て」  
「……」

ほつとしたのも束の間、由岐の顔から血の気が見る見る下がっていく。

「ユキ？」

「教会での髪の毛？」

「？そうだ」

「髪の毛……え……でも……控え室で……髪の毛触られて……!？」

頭を抱えてブツブツと零す。

由岐は聖堂に入る前にあつた出来事を思い出す。

髪の毛を梳かれて、かなり複雑に編みこまれた髪の毛のことを。

そして、あの時床に落ちた髪の毛を丁寧に拾っていた侍女たちの姿と、同じように櫛に絡まっていた髪の毛をとっていた姿を。

唐突に椅子から立ち上がり、テーブルを挟んで座っているフェイの胸元を掴んで揺さぶった。

「まだ髪の毛があの変態の元にある……………!!? 操られるのも、呪われるのは……まあ……というか、知らないところで自分に似た人形が愛でられるのが嫌だ……………!!」

「ユ、ユキッ！ちよつ、ちよつと揺らすのをやめろ！（てか、呪われるのはいいのかっ!）」

かなりの勢いで揺さぶられて、フェイが悲鳴に似た声を上げる。

「嫌だ~~~~~!!」  
「の、脳が揺れる~~~~~!」

動転した由岐と、それに揺さぶられて目を回すフェイの姿はこのまま数分続いた。

「……何この状況？」  
「……はっ！フェイ様を助けないとっ!!」

必要な品を購入して返ってきたリーとローは啞然と部屋で行われていた奇怪な由岐の行動と、それに力なく揺さぶられているフェイを、扉を開けた状態で見ていた。

先に我に返ったローが、リーを押しつけてフェイの救助に向かう。リーはその後に続き続き、扉を閉める。

「てい」  
「リー!!」

お茶目な声と共に、チョップが由岐に振り落とされる。慌てるのはロー。

だがリーはお構い無しだ。かなり手加減されたものだったが、動転して周りが見えていなかった

た由岐が『べちゃっ』とテーブルに落ちた。

「あう…リーさん…？」

「帰ってきた？そしてただいま！」

「お…おかえりなさい。…すいませんでした」

「うん。てか、謝罪は主に言っておけてね」

「ふへ？…フエイツ！！」

「…ぎもちわるい」

「お水お持ちしましょうか？」

「今飲んだら、吐く自信がある…ぞ」

「…やめておきましょう」

強制的に我に返らされて、前を向けばこれまた突っ伏していたフェイの姿が。

心配そうに背中を擦るローが。

状況は一目瞭然で。

「ごめんなさい…」

涙目で叫ぶ由岐の姿があった。

寄り道の途中で？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

寄り道の途中で？

「ひどい目にあった」

「ごめんね？」

いまだぐったりとしているフェイを心配しながら、由岐は顔の前で手を合わせて謝っていた。

「もう、大丈夫だ」

「でも……」

「それよりも、髪の毛を付けてみてくれ」

「う、うん……」

青白い顔ながら、その顔に笑みをのせ、促すフェイに躊躇いつつもリーと共に洗面台のあるところに移動する。そこにしか鏡がないのだ。

移動しながらそつとフェイを窺えば、なにやらローと話している。

内容が気になったが、後で聞くことにして視線を戻せば、リーの笑顔が。

「もういい？」

「ふあっ！は、はいっ！！」

リーが、買ってきたものを袋から取り出す。

ヘアピンっぽいものに、飾り紐（髪を結ぶためのもの）にその他装飾品。

色々出てくるので、目移りしそうだ。

「こんなところかしら」

「いっぱいありますね……」

「これでも少ないわよ。他にも、これから必要そうなものは買ってあるから、後で確認してみてね」

別の袋を目の前に置かれて、その袋の大きさに中の量が推測されて冷や汗が出る。

「こんなにいっぱい…あの、手持ちがないんですが」

「何遠慮しているの！大丈夫。主は金持ちだから」

「何が大丈夫が分かりません……」

「そう？まあいいわ。このままじゃ、ちょっとかさばりそうだから、後で主に大容量収納鞆作ってもらいましょう」

「大容量収納鞆？」

「見た目的には普通の鞆なのに、中の空間を拡張してあるから物がいっぱいはいる鞆なの。重さも外側の鞆分しかないし、便利よ」

「ええ！そんな便利なものがあるんですか？！」

「またまた主の開発品ね。便利品だから、市場でも売り出しはじめただけ、複雑な魔法形成が必要らしくて大変な上、まだ作り手が少ないからお値段的に高い。そういうことで、そんなに多くは出回ってないわ」

「ふあ～～～」

櫛を渡される。

受け取って髪を梳く。

後ろ髪をまとめてピンもどきで留める。

(む。ゴムがないのが難点だわ)

とても久しぶりの髪の短さに、四苦八苦しながら下準備を終える。  
スタンリーの魔の手から救われていた髪の毛を手に持ちながら感慨に浸る。

(こうやって見ると、思い切ったことしたなあって思うわ。…付け足すところを丸めた感じにして、残りは背中に流すってところかしら…)

シュミレートしながら髪を付け足していく。

コトリ。

台に櫛を置いて鏡に色んな角度で映す。

「変じゃないですか？」

「全然！それどころか、違和感がないわよ。本当は髪が短いってのが、信じられないわ」

「よかったです」

太鼓判をもらってほっとしつつも、これから毎日この動作を繰り返さないといけないかと思うと、少し憂鬱な由岐であった。

「お待たせ」

残った装飾品をまとめて袋に入れて片付けた。

もう一度だけ鏡で確認してフェイのところへ戻れば、まだフェイとローは話し込んでいた。

（仕事の話かな？）

邪魔をしてはいけなさと離れようとすれば、それよりも早く気付いたフェイが振り向いた。

そのフェイの目がまんまるくなる。

「？」

「すごいな…髪が短かったというほうが嘘みたいに見えるぞ」

「そうですね…」

感心したとフェイとローに褒められれば、嬉しくなる。

「そう？よかった！…でも、毎日髪の毛を整えるのが面倒だわ」

面倒くさがりなワケではないいつもの由岐ではあったが、元いた世界では髪が短くても問題なかったので、ここまで隠蔽工作しないといけないということが、少々苦痛であった。

フェイはそんな由岐に首をかしげ、笑う。

「では、自分でやらなくても済むように術式を組んでやろう」  
「へ？」

言っている意味が分からず、間抜けな声をあげてしまう。  
近づいたフェイが、由岐の周りをぐるりと回る。



「ふむ。気に入った品はあったか？」

「えーと？」

「今回買ってきたやつで、気に入った装飾品はあったかしら？」

「え…と、この飾り紐が気に入りました」

髪をお団子にしてそれをまとめる用に使った飾り紐を、身体を傾けて見せた。

それをまじまじと見て頷かれる。

「確かに綺麗だな」

「ふふふ。主の瞳の色とお揃いですよ？」

「リーさんっ！」

言っただけで欲しくなかった事実をばらされて、由岐の頬が熱くなる。

フェイは由岐とその飾り紐を交互に見る。

口端があがる。

意地悪な顔だった。

「ほーう？そうか」

「~~~~~!!?」

顔を見ていられなくて、視線をそらす。

「人の瞳に合わせて物を身につける。ユキはその意味を知っているのかな？」

「…」

「その意味は、その者に束縛されて構わない。その者に囚われている」という意味がある」

「っ！」

「まあ、全てがそうでは混乱するが、オレに限っては珍しい色だからな。大々的に宣伝して損はない」

愉悦に満ちた笑いとともに側に来たフェイが下から覗き込んできた。頬に手を添えられて、視線を逸らすのが難しくなる。

「飾り紐に付けられるようなオレの瞳と同じ色の宝石細工をユキに贈ろう」

極め付けに、にっこりと笑われて、クラリとする。

「貰ってくれるかな？」

フェイにはまだまだいろいろと勝てないようだ。

由岐がフェイに追いついて追い越せる日はくるのか。

それは今のところ、誰にも分からないことだった。

## 寄り道の途中で？（後書き）

『寄り道の途中で』は一応これにて終わります。  
次は活動報告で少し載せてた話を移動してくる予定です。  
読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## とある宿屋の看板娘？（前書き）

前に更新してから早いものでもう1ヶ月が経ってしまいました。  
慌てて更新です。

## とある宿屋の看板娘？

「はあ~~~~」

大きいため息が、昼のかき入れ時を過ぎて客の居ない食堂にたつぷりと吐き出される。

「なんだい？そんな大層なため息なんてこぼして」  
「……」

宿屋兼食堂を切り盛りしている女将がため息をついた張本人に呆れた口調で声をかける。

だが、声を掛けられた方は聞こえていないのかなんなのか、ぼんやりと入り口を見たままであった。

その様子に、やれやれと肩をすくめて、女将は厨房へ姿を消す。

しかし、それにも気付かず、またため息をこぼすのは、駒鳥亭の看板娘のローラであった。

「…会いたい」

ポツリと零す。

しかし、それに応える声は無い。

すると、余計にむなしさを感じてやる気が抜けていくようだった。

駒鳥亭の看板娘、ローラ。

生まれてから、現在15才。

実は、初めての恋に振り回されている真只中である。

現在、ローラが恋焦がれているのはローと呼ばれる青年。

たまにこの駒鳥亭を利用する人物で、この街の者ではなかった。

ローラとの関係を言葉で表すならば、『お客と宿屋の娘』といったところだ。

さて、そんなロー青年に、駒鳥亭の看板娘のローラがどうして恋してしまったかというとてもありきたりな話である。

ローラのいる駒鳥亭は宿屋だけでなく、この街でそれなりに人気の食堂を営んでおり、日夜かなりのお客が訪れる。

そんな駒鳥亭の利用客の大半がむさくるしいと言っては申し訳ないが、そんな男たちで、ガサツで乱暴この上ない。

駒鳥亭の看板娘としてローラはそんな男たちのあしらいも慣れたものだが（母親である女将の威圧もある）、日々そんな夢も幻想もぶち壊すような男たちの相手をしてきたローラにとって、ある日訪れたローラは、今まで見てきた男たちと全てが違って見えた。

唯の『旅の途中での流れの客』であれば、ローラの恋心を弄ぶ（ローラ青年的に心外であろうが…）というか、きつとローラの気持ちに、これっぽちも気付いていない）ようなことにはならなかったのではあるが、運良くというか、運悪くというべきか、ローラという青年は初めて駒鳥亭に訪れてからここずっと、この街に度々寄り、駒鳥亭を利用し続けていた。

（いつ見ても身だしなみがきちんとしてるし、見るからに清潔だし、優しいし、喋り口調が丁寧だし、女とか男とかで区別しないんだもんなあ…）

暇さえあれば、こんな風に、初めて会ってからローラにとって新しい記憶のローラのことを思い出すのである。

そんな彼女ではあるが、実は最近は思いが募りすぎて、会えない時間にボウツと考え込むことが多くなっていた。

まあ、食堂で働いているときなどは、さすがにボウツとはしていない。

そんなことをすれば、女将の大目玉を食らって、裏の仕事に回されてしまう。

そうすれば、もしローが訪れたとしても気付くのが遅れてしまう。それだけは絶対嫌だと、ローラは駒鳥亭で日夜必死に働いているので、今のところ無事に表の仕事（接客）に携わっている。

しかし、それも限界に近い。

会えない時間のほうが圧倒的に多すぎるのだ。

この前、ローが訪れてから数えて、木の葉も入れ替わるほどの長い月日が過ぎていたのである。

「はあ~~~~~~~~」

「大きなため息ですね」

「!!!!!!」

何度目かの盛大なため息を付いた瞬間、無防備な後方から声をかけられて、ローラは心臓が止まりそうになった。

そのまま、息を止めて振り返る。

そこには、件のローが幾月ぶりかの穏やかな笑み浮かべて立っていた。

「ロ、ロ、ローさんっ！いつの間にそこに……!?!」

「はい？今ですけど？」



「い、いらつしやいませっ！」

お辞儀の最高角度まで腰を折って挨拶をする。

「お久しぶりです。いつ訪れても、ローラさんは元気ですね。部屋は空いていますでしょうか？」

明らかに様子のおかしいローラに気付かず、ローが聞く。

ついちよつと前まで恋焦がれていた笑みを惜しみなく曝すローを、ローラは直視できない。

「は、はい！いつもと同じでよろしいでしょうか?!」

「ええと…すいません。今日は2人部屋を2つでお願いします」  
「え？」

ローの言葉にうろつろと彷徨わせていた視線を戻す。

良く見れば、ローの背中に背負われた少女。

そして、いつもの同じ同伴者である2人組み。

ひとりとは女性で、もうひとは少年。

2人とも顔が整っており、いつもちよつと気後れしてしまう。

顔が整っているのはローも一緒なのだが、どこまでも丁寧で、優しい雰囲気満載のところが気後れをさせない。

ローの連れである片割れの女性のほうがローラの視線に気付き、にっこりと笑う。

そうすると、華やかさと美人度が割り増しになったが、ローラに対する親しみも感じて、ホッとする。

美人は笑わないと怖い。

そのまんまだ。

そして、いつもは視線と共にニツと笑う少年が、今日はじっとローに背負われた少女を見ており、ローラのほづをちらりとも見ようとしなかった。

(?)

ローラは不思議に思いながらも、手続きをするために、宿屋のほうのフロントにその団体を促した。

ちなみに、女性がリーで、少年がフェイという。

部屋の番号と共に鍵を渡すと、挨拶もそこそこに移動していくローとその連れ。

遠ざかっていく後姿を見えなくなるまで目が追ってしまふ。

「もうちょっとローさんと話したかったのに……」

拗ねたように言ってみるが、ローの後ろに抱えられた何か事情のありそうな少女を、早く部屋に連れて行きたいと思うローたちの気持ちも分かったので、ローラは気持ちをすっぱりと切り替える。

それでなくても、ローが久しぶりに駒鳥亭を訪れたのだ。

何日か泊まっていくはずだと思い、気持ちが高揚するのを止められない。

(ローさんが来た~~~~~~~~!!!)

色んなところに向かつて叫びたかったが、女将の拳骨が怖かったの  
で心で叫ぶに留める。

（それに、こんなところで叫んじやったら、ローさんに聞こえちゃ  
う）

しっかり浮き上がる心と同じように軽やかな歩みで、食堂へ昼の片  
付けに向かうのであった。

## とある宿屋の看板娘？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、今度の更新はもう少し早くできたらと思います。

少し続きますので、お付き合いいただけたらと思います！！

## とある宿屋の看板娘？（前書き）

活動報告にて、スタンリーに起こった悲劇（喜劇？）のお話が載っております。

良ければお読みください！

## とある宿屋の看板娘？

何か様子がおかしい。

ローラは晩飯を食べに来た人々で賑わっている食堂で、人の波を避けながら給仕に走る。

その給仕の途中で、ぽかりとたまに手持ち無沙汰な時間が出来たりするのだが、その時間に、感じる違和感について頭をひねっていた。

（ローさんたち…なんか様子、変？）

ローたちが駒鳥亭に来てからのことを思い出す。

借りた部屋に早々にひっこんでから1刻ほど。

出てこないと思えば、リーが慌てて降りてきて、フロントに居た従業員に話しかけていたのを見かけた。

そして、部屋に戻ったと思ったら、ローと2人で戻ってきて、駒鳥亭を出て行ったのである。

（フェイ君置いて2人で出掛けるなんて初めて見た…）

リーとローの普段の様子から、フェイという少年が、彼らにとって、護り、付き従うべき人間だということをおぼろげながらローラは理解していた。

とても仲が良いのに、ふとした瞬間にフェイを立てる2人。

宿屋を営む女将の子どもとして生まれ、小さいころから働いてきたローラには、人様の事情に軽々しく踏み込んではいけないという觀念がちゃんと根付いている。

なので、ローのことが知りたくても、探りを入れたり、フェイとの関係について聞くことなど無い。

（外から帰ってきたと思ったら、またリーさんだけ出て行って、全然帰ってこないし…）

思い出しつつ唸っていれば、新しい客が来たのが見えた。回想を中断して、客の側へ急ぐ。

「今日のおススメ1つと、エール1つ。大ジョッキで」

「はい。少々お待ちください」

オーダーを厨房へ届けてため息ひとつ。

「…顔が見たいな」

色々考えてみているが、結局のところローラの望みはそれだけで。久しぶりに訪れたローと話すことが出来ず今に至る。

過去を振り返れば、今まで彼らが駒鳥亭を利用して、ここまで話が

出来なかったことは無い。

少しでも話せないときもあったが、楽しくおしゃべりした事実があるだけに、ローラの心が今回もローを切望していた。

「おススメお待ち！」

「はい」

厨房から出てきた料理をお盆にのせる。

食堂の入り口辺りに座った客へお盆の上にのせた料理を運んでいけば、隣接している宿の階段から降りてくる人影が見えた。

（ッ！）

それは先ほどからずっと切望していたローの姿だった。

姿を視界に入れた途端、ローラはすばやい動作で料理を客の元へ運び、用事を済ませてローのほうへ向かった。

その動きはなかなか見られるものではないほどに素早く、余分な動作が切り捨てられていた。

「ローさん、夕食ですか？」

「ええ、そうなんです。申し訳ないのですが、今日は部屋のほうで食事を取らせていただきたいのですが」

笑顔のローに、ローラは頬が赤くなるのを止められない。  
ローラに向けられた笑顔は、いつもどおりのものだった。

「分かりました！出来たらすぐにお持ちします！」

部屋での食事といわれて残念に思ったが、ローと話すことが出来る



だけで幸せなのだと自分の気持ちを抑える。

少しでも多くローと喋りたいと思って、部屋まで持っていくと言ったローラを誰が責められようか。

しかし、その提案にローが困った顔をして頭を振る。

「今の時間帯はとてもお忙しいのに、そこまでして頂くわけにはいきません。自分で運びますので」

「そんなんっ！ローさんにそんなことさせられませんよ！」

（ローさん優しい〜〜〜〜！！）

ローの台詞に歓喜しながら、それでも言い募ろうとすれば、無常にも厨房から声がかかってしまった。

（馬鹿〜〜〜〜〜〜〜〜！！）

カウンター席の隅に腰を下ろすローを目の端に捉えながら、ローラは心で泣いた。

厨房に行つてオーダーをいれ、言われたテーブルに料理を運ぶ。

ローの姿を捜せば、人の邪魔にならないようにか、端のほうにある席に座っているのが見てとれた。

（あああ〜〜〜〜！！今すぐあそこに行きたいっ！！ローさんとお話したいいいい〜〜〜〜！！）

ちらちらとローの姿を見ながら、傍に行く機会を窺うが、神様は無情だった。

それからローが頼んできた食事ができるまでの間、ローラがローの傍に行くことは叶わなかった。

ひっきりなしに入ってくる注文と客に、今日ほど憎いと思ったことは無いと、ローラは思ったのだった。

とある宿屋の看板娘？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## とある宿屋の看板娘？

ローラは落ち込んでいた。

海よりも深く、落ち込んでいた。

理由は当然、ローに関することだ。

ローラは、先ほどまでの常以上の働き振りから一転、置物のように動かなくなった。

これ以上は戦力にならないと判断した女将は、ローラに部屋に戻るよう to 告げた。

フラフラと幽鬼のように食堂を出て行く姿に、女将がため息を付いたのだが、当然の如く、ローラはそれに気付く余裕はなかった。

「ローさん、何で…」

部屋に戻らず、宿の裏手にある小さな庭に出た。

満月には遠い、欠けた月がローラを照らす。

その光は優しく、ローの笑顔を思い出させる。

そのことが、ローラの目元に涙を滲ませた。

ローラがこうなったのは、ローが食堂から夕餉をもらってから半刻

ほど過ぎたかどうかという時のことが原因であった。

せっかくのローとの逢瀬を邪魔されて腐りかけていたローラであったが、少しではあるが、ローと話せたのも本場で、その事実がローラを上機嫌とは言えないが、それなりの機嫌にさせていた。

食堂も晩飯の時間帯を過ぎれば、緩やかな時間が流れる。

ちよつと前までの忙しさに変わり、今は遅い晩飯を食べる者と、その食後の一杯と称してお酒を飲んでいる者たちが居るぐらいだった。

煩雑な時間帯を過ぎた辺りで、順番に給仕をしていた従業員たちも晩飯を食べる。

ローラも準備されていた晩飯を食べ、食堂に戻ろうとしていた時だった。

「ローさん！」

宿の受付にてローを発見して、見えないローラの尻尾が盛大に揺れる。

パタパタと近づけば、困ったような笑顔に迎えられた。

「あ…お出かけですか？」

ローは受付を横切って出て行こうとした真最中だったらしい。

（こんな時間に何処へ？）

珍しいことがある日はいろいろと続くらしい。

駒鳥亭にローたちが泊まった時は、いつも夜に出て行くことなど無かった。

そして、リーもまだ帰ってきておらず、ローも何処かに出掛けるとなれば、彼らの守るべきフェイが1人になるのだ。

ローたちが来たときは、傍から見てちょっと危ないのではと心配されるほどにローウォッチングをしているローラだ。

ローとリーが2人ともフェイの傍を離れることは本当に珍しいことだったのである。

ローとは客と宿の従業員の関係でしかないローラが、つい立場を超えての台詞が出たのも仕方の無いことだったのかもしれない。

女将に見つかれば、拳骨一発の刑に処されていたことだろうが、ローラには幸いなことに、女将はその場を見てはいなかった。

「うん…ちょっと、教会に」

ローの言葉にますます疑問が募る。

が、それ以上突っ込むことは出来ない。

出掛ける途中でずっと引き止めるわけにも行かず、出て行くローを見送った。

「…教会に何しに行くんだろう？」

ローの姿が見えなくなってから、頭の中をまわる疑問を口から出してしまふ。

誰かの答えが欲しくて言った言葉ではなかったのだが、予想に反してサイドから声がかかった。

「本当に、夜に教会に行くと思うのか？夜に行くところなんぞ決まってるだろう」

爽やかにはほど遠い笑いとともに、受付にいた青年と呼べる姿かた

ちの男が、ローラの眩きに答えてきた。  
知らずうちに眉間に皺が寄る。

「ニック…夜に行くとこって何処よ」

駒鳥亭で働くようになって二月ほどの、ニックと呼ばれる青年で、何かあるごとにちよつかいをかけられてローラは辟易していた。  
下品な笑いに、嫌悪が募るが、ニックの台詞が気になって問うた。

「へっ…花街だろう」

「ローさんはそんなところ行かないわ！」

「そんなこと断言できねえだろ。夜だぜ？行くとこなんてそうあるはずねえよ」

「…」

それ以上聞きたくなくて、ローラは無言で踵を返した。

しかし、もしかしたらの可能性が、ローラの心を黒く塗りつぶさうとする。

そうして、ローラは感情に振り回されて動けなくなった。

「…花街なんてこと…ないよね…」

庭に設置された台に腰をかけて月を眺める。

あの純朴なローラに限ってありえないと思いつつも、不安が拭えずに次への行動へ移れないローラ。

月は空でそつと輝くだけで、ローラに何一つ教えてはくれない。  
何度目か分からないため息について、そろそろ寝なければ明日に支障が出ると腰を上げようとした。

「まだ落ち込んでるのかよ」  
「……」

ローラに嫌な可能性について述べた声が、背後から聞こえてきて、ピタリと止まる。

今一番聞きたくない声だった。  
無視しようとするが、相手はお構いなしに近づいてくる。

「たまにしか来ないあんな男の何処がいいんだか」

「……」  
「他にも男はいるだろうがよ。あんな男やめちまえよ」

「……」  
「おい、ローラ。返事くらい返せよ」

「……」  
「くそつ」

ちらとも反応を返さないローラに焦れたのか、ニックは乱暴にローラの肩を掴んで自分のほうを向かせる。

「いたつ……五月蠅いのよ、あんな。どっか行って!」

「つ……人がせつかく」

「何がせつかく? 余計なお節介だわ! ていうか、迷惑よ!」

? まれた肩から手を叩き落とす。  
無視も限界だった。



どうしてニツクが余計な事を言うのか分からなかった。

分かりたいとも思わなかった。

自由を取り戻し、数歩距離を取る。

睨みつければ、相手も顔色を変えた。

ローラに向けてのびてくる手。

怒りがローラに恐怖を感じさせなかった。

「この」

「やかましいっ！」

「ギャッ！！」

「え…え？ええ？！フェイクくん！？」

その場の空気が破られる。

フェイの登場は唐突だった。

ローラの気のせいではなければ、フェイは上から降ってきた。

呆然と上を見上げれば、3回のベランダのドアが開け放たれているのが見えた。

「う、嘘…」

ローラは穴が開くのではないかと思うほどにフェイを見つめた。

とある宿屋の看板娘？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## とある宿屋の看板娘？

フェイの上からの不意打ちにより、ニツクは地に沈んだ。

ここで起こせば、面倒くさい事態に逆戻りすることになりかねないので、そのまま放置することにした。

放置と言っても、後で室内には入れるつもりではあるが。

ちらりと気を失ったニツクを見やった後、先ほどのやりとりを思い出してしまい、ローラは慌てて視界から外した。

「あ、あのっ、フェイクくん、ありがとう！」

「礼には及ばない。ただ、こいつが五月蠅かったただけだ」

そう言つて、フェイが地に沈んだニツクをつめたい目で見下ろす。

「……うるさくしたのは私も……ごめんな」

「原因はこいつだ。謝罪もいらない。もう報復は済んだしな」

「……」

まだ謝罪し足りないと思いつつも、それ以上の謝罪はいらないというフェイの態度に、口を噤む。

口を閉じれば、辺りを静寂が包む。

確かに、これだけ静かなら自分たちの声はとても辺りに響き、騒がしかったことだろうと思わせた。

気持ちが悪の方へ傾いていたローラはますますうなだれていく。

「教会だ」

「え…？」

「ローは教会に行ってる」

「あ…あ、あの？」

「知りたかつたんだろう」

「！？」

先ほどのニツクとのやりとりを聞かれていたのだ。

フェイの言葉の意味を知って、驚きと羞恥に襲われる。

慌てて否定しようとして、口を開いたが、すぐに口を閉じた。

「バレバレでしたか？」

自分の気持ちをごまかしたり、否定したくないと思ったのだ。  
ソツと聞いてみる。

「まあな。でもローは気づいてない」

優しい顔をしたフェイと目が合う。

ローラの気持ちを馬鹿にするでもなく、フェイはありのままに受け止めていてくれるのが分かり、ホッとした。

そして、聞いてみたいと思った。

「…ローさんてモテますよね？」

「そうだな。なかなか年齢層幅広くモテてるな。ちなみにオレの妹もローに熱を上げてたりする。だが、ローがそれに気づいたことは1度もない」

あっさりと返ってきた返事に笑う。

（うん、ローさんならありそう）

フェイはローラを否定しない。

フェイはローラを笑わない。

そのことがとても嬉しい。

「フェイクン」

「何？」

「好きな人っている？」

「いる」

「ローさんは…好きな人いるかな？」

「いないだろうな」

「そっか」

ローに好きな人がいないと聞いて、いけないと思いつつも、ローラは顔に笑みが上る。

（可能性は限りなく少ない。でも、まだ望みを捨てないでいいんだ）

そのことが、ローラに本来の笑顔を取り戻させる。

「フェイクン」

「何？」

「ありがとう」

「ん」

口元に笑みを乗せて視線を向けられて、同じように笑みを返せた。

もう夜もいい時間だ。

聞いてみたいことが沢山あったが、ローラは我慢する。

フェイが部屋に戻ろうと踵を返す。

それを見送ろうとすれば、フェイの歩みが止まった。

「ああ、そういえば」

「？」

「フェイの好きな奴って話だけど」

「！」

「-そういう意味じゃないけど、あいつオレのことが大好きで大事な  
らしいから、振り向いてほしけりゃ、要努力が必要」

「！？」

ローラは目を見開いて固まる。

その反応を見て、フェイはニヤリと笑う。

その後は何も口にするのではなく、ひらひらと手を振って宿の中へ  
と消えて行ってしまった。

「……」

フェイが部屋に戻っていった、少々でない時間が過ぎて、やっと口  
ーラは動き出した。

頭の中はフェイの言葉が回っていた。

「フェイくんのが大事…そりゃそうだよな」

今までのローのフェイへの態度を思い返せば一目瞭然だ。  
自分よりも何よりもまずフェイのこと。

それはリーにもいえる。

ローラは愕然とする。

まだ見ぬ恋敵<sup>ライバル</sup>よりも、フェイの存在の方が今の自分の前に高く…とても高くそびえ立っていることを忘れていたことに。

ローラの眠れない夜はまだまだ続くようだった。

とある宿屋の看板娘？（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

活動報告にてちょっとしたオマケ載せてあります。  
そちらもよければお読みください！

ローラの話は次で終わりにしたいと思います。（要努力が必要…汗



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9288o/>

---

光ある国

2011年10月10日16時42分発行